

令和四年（二〇二二年）度学位論文博士（文学）

江戸時代前期の作家と絵師の研究

慶應義塾大学大学院 文学研究科国文学専攻
後期博士課程三年 石田礼以菜

目次

第一章	はじめに…	5
第二章	吉田半兵衛の画業について…	10
第三章	蒔絵師源三郎の画業について…	20
第四章	井原西鶴の画業について…	35
第五章	居初つなの著作と画業について…	49
第六章	坂内直頼の著作について…	63
第七章	苗村丈伯の著作について…	86
第八章	中村孫兵衛の出版物について…	103
第九章	吉田半兵衛作品年表…	120
第十章	おわりに…	149

第一章 はじめに

江戸時代前期は、木版印刷技術が普及し、出版文化が多様化した時代であった。写本では、御伽草子などの物語を題材とした、彩色された絵入りの豪華な絵本・絵巻である奈良絵本・絵巻などが制作され、版本では、江戸時代前期の京都の作家である浅井了意の『御伽婢子』などに始まる仮名草子や、江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴の『好色一代男』などに始まる浮世草子などが制作されていた。奈良絵本・絵巻の制作背景は、近年まで不明であったが、石川透氏の『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店 二〇〇三年）や、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）などによって、それらは、浅井了意や、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である居初つなどの人物によって制作されていたことが明らかになった。これは、本文の筆跡や絵の鑑定によって明らかになったことである。近年では、中世文学において、奈良絵本・絵巻などの絵画資料を参考とした研究も増えている一方で、近世文学においては、作品の本文や書誌などの研究が中心であり、仮名草子・浮世草子における挿絵などの絵画資料を参考とする研究は、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）以来、ほとんど進んでいないという問題点がある。そこで、本論文では、江戸時代前期の写本・版本における絵画資料に焦点を当て、作家と絵師などの関係を通して、当時の作品の制作背景をより具体的に明らかにすることを目的とした研究を行った。

当時の作品の制作背景を明らかにするために、本論文では、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛という人物を中心に取り上げている。この人物は現在ではあまり知られていないが、当時は、江戸時代前期の江戸の絵師である菱川師宣と並び称されており、元禄八年（二六九五年）刊『好色とし男』第二巻第一話「是は絵にかきし姿」に「菱川吉田が浮世枕絵有程ひろげて爰な男はかつかうよりもち物がちいさいの」、宝永七年（一七一〇年）刊『寛濶平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に「板行の浮世絵をみるにつけても、むかしの庄五郎が流を、吉田半兵衛まなびながら、一流つゞまやかに書出しければ、京大坂の草子は半兵衛一人にさだまりぬ、江戸には菱川、大和絵師の開山とて、坂東坂西此ふたりの図を写しけるに、近き比鳥羽絵といふ物、扇服沙にはやり出ぬるを見れば、貌形手足人間にあらず、化物づくしに似たり、宗達流又おかし、これらは皆一流を建立せし巧妙手にして、氣をかへたるいたり詮義なるべし、」^⑤、貞享三・四年（二六八六・一六八七年）頃刊『諸国此頃好色覚帳』第一巻第一話「艶男は女の目の毒」に「当世ぬれ絵かきの名人お江戸のひしかわ京の吉田半兵衛も筆をなげつべし」^⑥という記述がある。菱川師宣は、浮世絵を創始した人物であるとされており、代表作である、江戸時代前期頃作「見返り美人図」は現代でも有名である。菱川師宣は、版本の挿絵だけでなく肉筆画もいくつか残っている一方で、吉田半兵衛は、リチャード・レイン「海外の名品 慶長元禄期秘画《絵巻》全集」『季刊浮世絵』第六七号（画文堂 一九七六年一〇月）において、元禄初年頃作「吉田半兵衛風（肉筆）秘画巻」が紹介されているものの、現在、署名のある肉筆画は発見されていない。版本の挿絵については、菱川師宣と吉田半兵衛は、注釈書・咄本・辞書などの挿絵

を描いているという共通点があり、また、吉田半兵衛が、菱川師宣の挿絵の構図を流用している例も見られる^⑤。なお、菱川師宣と吉田半兵衛の画風について、リチャード・レイン『元禄のエロス』五（画文堂 一九七九年）では、「吉田半兵衛の方がより形式的で静的、人形のような絵姿」であると述べられている。

吉田半兵衛は、宝永六年（一七〇九年）刊『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほへたる富貴草」に、「半兵衛は三年めに寺町通へ出て。弟子あまたかゝへ」とあるように、多くの弟子がいたとされており、そのうちの一人が、居初つなであつたとされている^⑥。居初つなは、写本においてはかわいらしい絵を描き^⑦、版本においては吉田半兵衛に似た画風の絵を描いている^⑧。このように、居初つなは、当時としては珍しい女性書家・作家であつただけでなく、自身の作品の挿絵を描く絵師でもあり、書家および作家としても、絵師としても、専門家並みの力量を持っていた。つまり、世界初の女性絵本作家ともいえる人物なのである^⑨。彼女の仕事量からして、これらの仕事で生計を立てていたと考えることができ、現代でいう、いわゆるキャリアウーマンであつたといえるので、今日におけるジェンダー論の観点からしても、注目するべき人物である。また、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』によると、浅井了意作の、寛文五年（一六六五年）刊『日本廿四孝』と延宝五年（一六七七年）刊『出来斎京土産』は、吉田半兵衛画であるとされている。

このように、江戸時代前期に写本と版本の両方を制作していた人物が、両者とも吉田半兵衛と関わりがあるというのは注目すべきことである。つまり、吉田半兵衛についての研究は、江戸時代前期の出版界の構造を明らかにする上でも意義のあることなのである。

さらに、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』によると、吉田半兵衛は、井原西鶴作の、貞享三年（一六八六年）刊の『好色五人女』『好色一代女』や、貞享四年（一六八七年）刊の『男色大鑑』などの挿絵を描いたともされており、このことから、吉田半兵衛は、当時の出版界において重要な人物であつたといえる。

しかし、現在、菱川師宣以外の版本の挿絵を描いた絵師については、知名度も関心も低く、先行研究には多くの誤りがある^⑩という問題点がある。そこで、今後は、先行研究を再検討し、それぞれの絵師について業績を正しく整理し評価することが必要である。

江戸時代の浮世絵師についての主な先行研究を概括すると、以下の通りである。まず、寛政二年（一七九〇年）に、江戸時代後期の江戸の文人である大田南畝が、江戸時代の浮世絵師約四〇人の経歴や系譜などを考察した『浮世絵類考』を著し、その後、後人によって何度か増補された。明治四三年（一九一〇年）には、宮武外骨氏が、浮世絵の専門雑誌である『此花』（雅俗文庫 一九一〇年一月～一九二二年七月）を刊行し、浮世絵に関する論考が活発に行われた。昭和六年（一九三一年）には、井上和雄氏が、江戸時代の浮世絵師について五〇音順に項目を立てて人物ごとに解説した『浮世絵師伝』（渡辺版画店 一九三一年）を著した。昭和一〇年（一九三五年）には、水谷不倒氏が、江戸時代の版本の挿絵師約七〇人について、それぞれの経歴と作品を考察した『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）を著した。昭和二三年（一九四八年）以前には、漆山又四郎氏が、応永二四年（一四一七年）～明治年間（一八六八年～一九一二年）の絵本・絵巻・挿絵入りの版本を年代順に整理した『絵本年表』^⑪を著した。渋井清氏は、美術史の方面から江戸時代の

版本の挿絵について研究した。平成二九年（二〇一七年）に刊行された長谷川強氏の『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（笠間書院二〇一七年）は、その集大成ともいえるものであり、浮世草子研究者にとつて欠かせない一冊となっている。

なお、吉田半兵衛を中心に上げている先行研究は、以下の通りである。まず、明治四三年（一九一〇年）に、宮武外骨氏が、吉田半兵衛画と考えられる作品を一〇点指摘した「吉田半兵衛の絵本」『此花』第三枝（雅俗文庫 一九一〇年三月）を発表した。大正八年（一九一九年）には、雨石齋主人氏が、吉田半兵衛と関係があると考えられる人物である蒔絵師源三郎についてのそれまでの先行研究をまとめた、「吉田半兵衛と蒔絵師源三郎」『浮世絵』第五一号（浮世絵社 一九一九年一月）を発表した。昭和四年（一九二九年）には、青木平七氏が、吉田半兵衛の作品数点を紹介しつつ、その弟子として蒔絵師源三郎と居初つなと考えられるとした、「吉田半兵衛の挿絵とその遺風」『古本屋』第八号（荒木伊兵衛書店 一九二九年一月）を発表した。昭和四三年（一九六八年）には、竹原松鶴氏が、『好色訓蒙図彙』の解説と一部の翻刻を載せた「好色訓蒙図彙 吉田半兵衛 図入辞典〈訓蒙図彙〉を好色面から編集」『国文学解釈と鑑賞』第三三号（ぎょうせい 一九六八年七月）を発表した。

そもそも、「浮世」とはどのような意味を持つ語なのだろうか。それについて詳細に考察したのが、平成二九年（二〇一七年）に内藤正人氏によって著された、『うき世と浮世絵』（東京大学出版会 二〇一七年）である。「うき世」という語は、室町時代以前は、「憂き（つらい）世」、つまり「憂世」と表記されることが多かったが、江戸時代以降は、訓読みが同じである中国語の「浮世（定めのない世）」という語と混同され、つら

いことの多い世の中だからこそ、流れる水に浮かぶように、浮かれ遊んで楽しく生きるべきだという考えから、「浮世」と表記されるようになり、「現代的な」「好色的な」という意味を持つようになったという経緯がある。その「浮世」を描いた浮世絵は、現代に生きる私たちが漫画やイラストを愛好するのと同様に、当時の人々の生活を潤す、欠かすことのできない娯楽であった。

浮世絵は、国外においても、平成二五年（二〇一三年）と平成二六年（二〇一四年）に、イギリスの大英博物館で、「春画―日本美術における性とたのしみ」展が開催されて好評を博し、春画の文化的価値が国内外において再評価されるようになった。今後、浮世絵への関心は、ますます高まっていくだろう。

本論文では、第一章「はじめに」において、本論文の意義や、先行研究の概要や、その問題点などについて述べた。第二章「吉田半兵衛」では、吉田半兵衛の署名がある作品を整理し、その業績をより具体的に明らかにする。第三章「蒔絵師源三郎」では、先行研究において吉田半兵衛の弟子であると考えられている^③、江戸時代前期の蒔絵師・絵師である蒔絵師源三郎について再検討し、その業績を正しく捉え直す。第四章「井原西鶴」では、先行研究において井原西鶴画とされている作品を、無名の専門絵師が描いていた可能性について検討する。第五章では、先行研究において吉田半兵衛の弟子であると考えられている、江戸時代前期の書家・作家・絵師である居初つなについて考察し、吉田半兵衛との関係を明らかにする。第六章「坂内直頼」では、吉田半兵衛と親交の深かった^④江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼の経歴と作品を整理し、その新たな作品を指摘する。第七章「苗村丈伯」では、吉田半兵衛

と関係の深かった^{②③}江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯の経歴と作品について再検討し、その業績を正しく捉え直す。第八章「中村孫兵衛」では、坂内直頼と同様に吉田半兵衛と親交の深かった、江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛の経歴と出版物を整理する。第九章「吉田半兵衛作品年表」では、今後の吉田半兵衛研究の参考資料として、現在、吉田半兵衛画と考えられる作品を年代順に並べた表を記載する。そして、第十章「おわりに」では、それぞれの章の総括を述べる。以上の方法によって、これから、吉田半兵衛の経歴と作品を明らかにし、吉田半兵衛と他の絵師・作家・書肆などの周辺の人物との関係を通して、江戸時代前期の出版界の構造を明らかにしてみたい。

注

- ②『近世文芸叢書』第七卷（国書刊行会 一九一一年 三六三頁）所収。
③『近世文芸叢刊』第三卷 浮世草子集（般庵野間光辰先生華甲記念会 一九七〇年 八頁）所収。
④延宝二年（一六七四年）刊『伊勢物語抄』（絵師不明）の改題本には、延宝七年（一六七九年）刊『伊勢物語頭書抄絵入読曲』（菱川師宣画）と、貞享二年（一六八五年）刊『伊勢物語絵入読曲』（吉田半兵衛画）があるが、『伊勢物語絵入読曲』の、扉絵四図を除く二八図中図二六図は、『伊勢物語頭書抄絵入読曲』の構図を流用している。
⑤宮武外骨氏の「居初津奈女」『此花』第一三枝（雅俗文庫 一九一一年 一月一六頁）では、「画風によつて鑑定を下すと、吉田半兵衛の門人であらうと思ふ、そして其筆力は師に劣らないものと見る」としており、青木平七氏の「吉田半兵衛の挿絵とその遺風」『古本屋』第八号（荒木伊兵衛書店 一九二九年二月二六頁）でも、画風が吉田半兵衛式であることから、居初つなは半兵衛の門人であらうとしている。さらに、井上

和雄氏の『浮世絵師伝』（渡辺版画店 一九三一年 一二二頁）「津奈女」項にも、画風が半兵衛流であることから「吉田半兵衛門人歟」と記されている。

⑥居初つなが、写本の本文および絵を書いている例は、江戸時代前期頃写『はちかづき』（石川透氏蔵、上巻末尾に「居初氏女書画」とある）などである。また、版本の本文および挿絵を書いている例は、元禄八年（一六九五年）刊『女実語教』（刊記に「居初氏女津奈書画之」とある）などである。

⑦例えば、元禄八年（一六九五年）刊『女実語教』（居初つな画）第六図は、『女用訓蒙図彙』（吉田半兵衛画）第三卷三丁ウと、琴を弾く女性の姿が類似している。

⑧石川透『西行物語』の版本の制作者について『西行学』第四号（西行学会 二〇一三年八月 四九頁）にも、「居初つなは」おそらくは、日本で最初の女流絵本作家といった存在となるであろう」とある。

⑨例えば、水谷不倒『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年 一二八頁）「吉田半兵衛」項では、「吉田半兵衛は、元禄五六年で終つたものと見ねばならぬ。」とされているが、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年二月）により、吉田半兵衛は享保四年（一七一九年）までは生存していたことが判明している。

⑩漆山又四郎氏が、没年である昭和二三年（一九四八年）までに著した『絵本年表』は、日本書誌学大系³⁴『絵本年表』（青裳堂書店 一九八三）一九八七年）に所収されている。

⑪水谷不倒『古版小説挿画史』（一三〇頁）「吉田半兵衛」項に、「東にあつては、師宣以降、古山師重・鳥居清信・奥村政信等の輩出した如く、西にあつても、半兵衛について、蒔絵師源三郎・大森善清・川島叙清等が続出した。」とあることから、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五卷（岩波書店 一九八四年 五〇九頁）「蒔絵師源三郎」項では、「吉田半兵衛の流れを汲む。」とされている。

㉔ 塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二二号（人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月）によると、坂内直頼の墓誌に、「洛陽ノ書賈仲邨富平・画工吉田孝賢（筆者注…中村孫兵衛と吉田半兵衛のこと）」が「多年法師（筆者注…坂内直頼のこと）ノ顧盼ヲ獲」たので、江戸時代中期の京都の僧である玄璠に墓誌の撰文を依頼したことが記されている。

㉕ 現在、苗村丈伯作であると考えられる作品は二四作品である。挿絵があるのはそのうち一六作品で、そのうち一作品が吉田半兵衛画、一五作品が私見では吉田半兵衛画である。

第二章 吉田半兵衛の画業について

一、はじめに

吉田半兵衛は、江戸時代前期の京都の絵師である。この人物は現在ではあまり知られていないが、当時は、浮世絵を創始した人物として有名な菱川師宣と並び称されており、「江戸の菱川、京の吉田半兵衛」⁽³³⁾と、もてはやされていたほどであった。

日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第六卷(岩波書店 一九八五年)「吉田半兵衛」項では、「吉田半兵衛^{よしたは はんべえ} 江戸時代の画家。吉田氏。俗称半兵衛。一説に無色軒・三夕軒・三白居士と名のる人物を半兵衛とする。京都の人。元禄五年(一六九二)版『万買物重宝記』に「四条御たひの後」とあるのは晩年の居所。貞享年間(一六八四―一六八八)が最盛活躍期。元禄六年頃没か。墓所など一切未詳。画系は『寛濶平家物語』に庄五郎の流れをくむと記す。」と説明されており、また、その画風については、「温雅流暢な描線で品位ある人物を画き、図中に多人数を躍動的に構図することも巧みで、やや説明的ながら丁寧な背景・環境の描写とあいまって挿絵の価値を大いに高めた。」と説明されている。水谷不倒氏の『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年)「吉田半兵衛」項では、吉田半兵衛は、仮名草子・浮世草子・浄瑠璃本・名所記・節用類書などの様々な版本の挿絵を描いたとされており、また、貞享三年(一六八六年)刊『好色五人女』『好色一代女』や、貞享四年(一六八七

年)刊『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている。吉田半兵衛は、その他にも多くの作家と関わりがあるので、江戸時代の出版界を知る上で重要な人物であるといえる。

しかし、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』以来、吉田半兵衛に関する研究はほとんど進んでおらず、先行研究にはいくつかの問題点がある。そこで、本稿では、吉田半兵衛に関する様々な資料をもとに、吉田半兵衛についての考察を改めて行ってみたい。

二、吉田半兵衛の経歴

吉田半兵衛の経歴については未だはっきりとしたことは分かっておらず、以下に挙げる三つの文献が、吉田半兵衛の生涯について知るための重要な手掛かりとなっている。

一つ目は、宝永六年(一七〇九年)刊の、当時の商人の致富譚を記した月尋堂作の浮世草子、『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」である。以下に、その全文を記載する。

商人と屏風とはまがらねばたゞづといへり。それも一旦の方便にて。其身相応に。下なるものには慈悲を施すべし。世界はおし合て人はたてるものなり。昔みやこ大宮通の末に。絵師半兵衛といへるあり。以前は新在家の絵所に。季をかさねて末の奉公人ながら。律儀に勤めて銀子三百目。十五年此かたに溜ける。今は宿這入すべき分別よく／＼思ふに。此三百目の内にて。世帯道具をととのへて残銀を元手にして身を過ん事。いかにしてもおぼつかなし。今二三の奉公と此分別に定まりし所に。仲人

にかたられ。此大宮通の絵書の死跡。後家の方へ入贅しける。はじめ聞しは。先夫覚悟能年々に延し置たる貳貫目の有銀。後家親元近江の在所より。二人扶持の合力。皆あとかたもなきいつはり。けつく先夫病中より。今迄の買がゝり貳百三十拾匁の借錢をいたゞきける。されども後家のきりやう十人並といひしが。是ばかりは卑下成べし。三つに成継娘ふしぎに似た縁成べしと。人にいはるゝもよしなし。今となつて。かたられたるとて。いひやぶつて此家を出てば。互のぐわいぶんよろしからず。其うへ女の心底ずいぶんたまか成事見とゞけしは。鍋釜の尻に炭をつけず。継子もいつしかふびんに成て。それなりけりに爰に暮しぬ。三百目の内。仲人に三捨匁と錢貳百とられ。其外何角引のこつて。貳百六十式匁を元手にして。前の買がゝりは時々こなしにて過られず。爰にて半兵へふんべつして。うつら／＼とする内には。手と身とに成て。三人袖乞する事遠かるまじ。此身はいかやうにもかたづかんが。女路途にたちて。先夫ながらへてそはゞ。かうは有まじと。愚痴のなげきも。ふびんは幼き者也。是を何とぞそだてあげてとらせなば。堂塔建立にもまさるべし我子ならぬ。継子を見はなせしと。人のそしり。天のとがめも恐ろし何とぞ一思案にて。世をわたらんと工夫して屏風の押絵。図の極りたる草花尽鳥つくし仙人唐子など。版下の絵に書。ひそかに板行にほらせて唐紙に摺。其うわ絵をそれ／＼の絵の具にて。彩色けるに十日の仕事。一日に仕廻ひて。しかも手ぎわ一段見事なり。是を田舎問屋へおろすに。殊外下直なれば。出来次第に買人先をあらそふ。六枚屏風壺双分の押

絵。十二枚にて六匁とは。此細工なり。丸一年が内に。三貫八百匁の儲銀其後又。南京模様とて。扇の絵に藍摺をし出し。一夏ふた夏世間。めづらしがりて。此扇を持ぬ人なし。又五拾両しこだめける。後／＼は類商売。何事も三年はさせず。我一にと仕出来るゆへ。友ぜり合にて。誠の絵を書ほどの手間賃にあたれり。半兵衛は三年めに。寺町通へ出て。弟子あまたかゝへ金銀の屏風襖の。下張をさせて。絵は其身次第に巧者になつて。うちつけ書の菊ぼたん。まことの富貴草を書得たるぞ。めでたし

この話の概要を簡潔に述べると、京都の大宮通の末に住む律儀な年季奉公の絵師であつた半兵衛は、仲人に騙され、奉公先の町絵師の死後に婿入りして多額の借金を抱えたが、草花尽し・鳥尽くし・仙人・唐子などの屏風絵を描き、それを版木に彫つて紙に摺り、その下絵をそれぞれの絵の具で彩色するという工夫をしたところ、絵を一枚一枚描く手間が省けて早く仕上がり、しかも出来上がりが綺麗で安価であつたために評判になつて大いに売れたという。その後は、扇に南京模様を藍摺したものが流行し、三年目に寺町通に出店して多くの弟子を抱えた、というものである。

二つ目は、元禄五年（一六九二年）刊の、京都・江戸・大坂の買物案内書である『万買物調方記』である。この「絵師」の項に、「▲京ニテ当世絵書 四条通御たひの後半兵衛」と記されている。

三つ目は、宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛濶平家物語』第四卷第四話「微塵も絵図に違ぬ女」である。この話の中に、「惣じてその身一代に立身する程のものは、

何れの道にも、一かはり手のかはる思案なくては、名をとり徳をとる事なりがたし、板行の浮世絵をみるにつけても、むかしの庄五郎が流を、吉田半兵衛まなびながら、一流つゞまやかに書出しければ、京大阪の草子は半兵衛一人にさだまりぬ、江戸には菱川、大和絵師の開山とて、坂東坂西此ふたりの図を写しけるに、近き頃鳥羽絵といふ物、扇服沙にはやり出ぬるを見れば、貌形手足人間にあらず、化物づくしに似たり、宗達流又おかし、これらは皆一流を建立せし巧妙手にして、気をかへたるいたり詮義なるべし、」(と)という記述があることから、吉田半兵衛は庄五郎という人物の絵を学んでいたことや、当時は江戸の菱川師宣と並び称されていたことなどがわかる。

これらの文献からは、吉田半兵衛の当時の居場所も知ることができる。小説である『子孫大黒柱』の記述を正しいものと仮定した場合、『子孫大黒柱』に「昔みやこ大宮通の末に。絵師半兵衛といへるあり。」とあることから、吉田半兵衛は、最初は京都の大宮通の辺りに住んでいたが、『子孫大黒柱』に「半兵衛は三年めに。寺町通へ出て。」とあり、『万買物調方記』に「四条通御たひの後」とあることから、後に寺町通と四条通が交わる場所、つまり、四条通にある八坂神社御旅所付近に店を構えたようである。

三、吉田半兵衛の作品

次に、吉田半兵衛の作品についてである。吉田半兵衛は数多くの作品の挿絵を描いたとされているが、今回は、筆者が新たに指摘す

るものも含めて、作品中に吉田半兵衛の署名などがあり、吉田半兵衛画である可能性が高いと考えられる八作品を取り上げる。

一作品目は、延宝九年(一六八一年)刊の『源氏御世遊』である。

これは、日本の文学や歴史上の人物などの性生活を描いた浮世草子であり、この下巻末尾に「絵師 吉田半兵衛」という署名がある。

二作品目は、貞享二年(一六八五年)刊の『伊勢物語絵入読曲』である。これは、『伊勢物語』の読み方などを頭書に記して挿絵を載せた注釈書であり、この刊記に「絵師 京 吉田定吉」とあり、これは吉田半兵衛の別号であると考えられている²⁶⁾。これについての検討は本稿の第五節で行う。

三作品目は、貞享三年(一六八六年)刊の『好色訓蒙図彙』である。これは、『訓蒙図彙』を模倣し、当時の好色風俗について挿絵入りで解説した浮世草子である。この上巻の「天象」の扉に「絵師 洛陽 吉田半兵衛図」という署名があり、また、下巻の「人支」の扉に「図 無色軒筆」、「器財」の扉に「図画 無色軒筆」という署名がある。この作品の序に「無色軒三白居士みづから序」とあることから、「無色軒三白居士」は吉田半兵衛の号で、吉田半兵衛はこの作品の序と挿絵を担当したと考えることができる。

四作品目は、貞享四年(一六八七年)刊の『山路の露』である。

これは、宰相局の悲恋を描いた浮世草子であり、序に「花洛の画工 吉田氏に物して世におこなふと云尔」と記されている。

五作品目は、貞享四年(一六八七年)刊の『好色貝合』である。

これは、角書に「好色訓蒙図彙後編」とある²⁷⁾ことから、前年に刊行された『好色訓蒙図彙』の補遺的な作品であると考えられる。この作品には吉田半兵衛の署名はないものの、序に「僕去年其品々を図

にあらはして好色訓蒙図彙をつくる今又もれしを集て是とあはせて全部をなす扱こそ好色貝合と号す」とあることから、西鶴学会 古典文庫 第一六冊『好色貝合』（古典文庫 一九四八年）などでは、『好色訓蒙図彙』と同じく吉田半兵衛画であるとされている。また、『好色訓蒙図彙』と同じ意匠の枠の中に題が書かれていることから、『好色訓蒙図彙』と同じ人物によって挿絵が描かれていると考えることができる。

六作品目は、貞享四年（一六八七年）刊の『女用訓蒙図彙』である。これは、『訓蒙図彙』を模倣し、女性のための知識について挿絵入りで解説した往来物である。この第四巻の序に「浮世絵の逸物吉田氏が筆をかりて粗かゝしむる也」と記されている。

七作品目は、元禄六年（一六九三年）刊の『百人一首絵抄』である。これは、百人一首を挿絵入りで解説した注釈書で、刊記に「京極四条 吉田半兵衛」という署名がある。

八作品目は、筆者が吉田半兵衛画の作品として新たに指摘する、正徳二年（一七一二年）刊の『傾城盃軍談』である。これは、『太平記』に仮託して、登場人物が酒の飲み比べを行う浮世草子である。この刊記に「画師 巻飾堂」という署名および「吉田氏」「孝賢」という印記があり、「孝賢」は、半兵衛の実名であると考えられる。これについては本稿の第五節で詳しく述べる。

以上の八作品が、現在、作品中に吉田半兵衛の署名などがあり、吉田半兵衛画である可能性が高いと考えられるものである。

四、吉田半兵衛と同時代の人物との関係

次に、吉田半兵衛と同時代の人物との関係について取り上げる。

まず、江戸時代前期の蒔絵師である蒔絵師源三郎についてである。元禄三年（一六九〇年）刊の、『訓蒙図彙』を模倣し、江戸時代の職業について挿絵入りで解説した事典である『人倫訓蒙図彙』の第三巻末尾に「蒔絵師源三郎筆」という署名があることからその名前が知られており、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』で、吉田半兵衛の門人であると考えられている人物である。水谷不倒氏の『古版小説挿画史』には、「源三郎の経歴は、半兵衛よりも、更に判らない。新井白石の『退私録』に、南都の天蓋といふ所に、塗師屋源三郎といふ者があつて、徐熙筆鷺の絵を所持してゐたことが記してある。これによつて、源三郎は奈良の人といふことを知るのみである。」とある。これは、江戸時代中期頃写の新井白石の随筆である『退私録』上巻「珠光之事」のことであり、以下がその引用である。「一 茶の湯に名ありし珠光は浄土宗にて永観堂の末寺にて南都の称名寺の住僧なりしより仰あり天蓋と云所に塗師屋源三郎と云者あり其家に珠光が所持せし徐熙が鷺の画あり見侍りし由仰す」⁽²⁶⁾。この記事により、水谷不倒氏が、蒔絵師源三郎は「奈良の人」であるとしたことから現在では蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるということが通説になっている⁽²⁷⁾が、筆者が改めて塗師屋源三郎という人物について確認したところ、塗師屋源三郎とは、松屋久重（通称は塗師屋源三郎。江戸時代前期に奈良の転害郷（現在の奈良県奈良市手貝町）に住んでいた漆器商人。室町時代の僧である村田珠光の茶道を継承し、珠光が好んだ徐熙の鷺の絵を所持していた。⁽²⁸⁾）のことなので、蒔絵師源三郎とは別人であることが判明した。つまり、蒔絵師源三郎の経歴については、ほとんど不明ということになる。

次に、江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴についてである。水谷不倒氏の『古版小説挿画史』や、中村幸彦氏・日野竜夫氏の『新編稀書複製会叢書』第四〇巻（臨川書店 一九九一年）によると、貞享三年（一六八六年）刊『好色五人女』『好色一代女』や、貞享四年（一六八七年）刊『男色大鑑』などの井原西鶴の作品は吉田半兵衛画であるとされており、それらの作品の挿絵は、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』の挿絵と構図が類似しているという。例えば、『好色五人女』第一巻第四図は、女性が画面右を向いて俯きながら立ち、右肩を衿から出している姿勢が『女用訓蒙図彙』第三巻第一四図と類似しており、『好色五人女』第三巻第一図は、袈裟を被った女性が、画面右を向きながら立っている姿勢が『女用訓蒙図彙』第三巻第二〇図と類似している。また、『好色一代女』第一巻第七図は、女性が画面右を向きながら着物の裾を掴んで立ち、左手を伸ばして左足を捻っている姿勢が『女用訓蒙図彙』第三巻第二一図と類似している。さらに、『男色大鑑』第八巻第九図は、笠を被った女性が画面右を向いて立ち、両手を少し広げて左足を上げている姿勢が『女用訓蒙図彙』第三巻第六図と類似している。このように、それぞれの挿絵の構図がよく似ていることから、吉田半兵衛は井原西鶴の主要な作品の挿絵を描いていたと考えることができるのである。

次に、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である居初つなについてである。宮武外骨氏の『此花』第一三枝（雅俗文庫 一九一一年一月）の「居初津奈女」項では、「画風によつて鑑定を下すと、吉田半兵衛の門人であらうと思ふ」とされており、また、青木平七氏の「吉田半兵衛の挿絵とその遺風」『古本屋』第八号（荒木伊兵衛書店 一九二九年十二月）でも、「画風は全く半兵衛式であつて（中

略）半兵衛が遺髪を継いだ門人であらうと思はれる」とされている。さらに、井上和雄氏の『浮世絵師伝』（渡辺版画店 一九三一年）の「津奈女」項でも、「吉田半兵衛門人歟」「画風半兵衛流なり」とされている。吉田半兵衛は『女用訓蒙図彙』居初つなは元禄八年（一六九五年）刊の『女実語教』などのように、両者とも女性用の往来物の制作に関わっているという共通点があり、また、居初つなは、貞享（元禄年間（一六八四年～一七〇四年）頃）に「雛形絵巻」という絵巻を制作している^①が、『女用訓蒙図彙』の第三巻は、着物を着た女性の姿絵を描くことで着物の意匠を見せる雛形絵の性質を持つ内容であり、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』で吉田半兵衛画とされている、元禄四年（一六九一年）刊の『としの花』という作品も、当時における伊達な模様の衣装を京都・大坂の歌舞伎役者に着せた雛形絵であることから、両者とも雛形絵の性質を持つ作品に関わっているという点でも共通している。もし居初つなが吉田半兵衛の門人であった場合、吉田半兵衛は女性の絵師も弟子としていた、当時としては珍しい人物であったといえる。

そして、江戸時代前期の京都の作家である浅井了意についてである。水谷不倒氏の『古版小説挿画史』によると、浅井了意作である、寛文五年（一六六五年）刊『日本廿四孝』と延宝五年（一六七七年）刊『出来斎京土産』は、吉田半兵衛画であるとされている。石川透氏の『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店 二〇〇三年）で、仮名草子作家である浅井了意が、多くの奈良絵本・絵巻を書写していたことが明らかになった。また、女性往来物作家である居初つなも、多くの奈良絵本・絵巻を書写していたことが、同じく『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）で明らかになっている。江

戸時代前期に写本と版本の両方を制作していた人物が、両者とも吉田半兵衛と関わりがあるというのは注目すべきことである。つまり、吉田半兵衛について研究することは、江戸時代の出版界の構造を明らかにする上でも意義のあることなのである。

五、吉田半兵衛についての再検討

最後に、吉田半兵衛についての先行研究の再検討を行ってみたい。前述のように、吉田半兵衛についての先行研究にはいくつかの問題点があるが、ここではそのうちのいくつかを取り上げる。

まずは、貞享二年（一六八五年）刊『伊勢物語絵入読曲』の刊記にある「絵師 京 吉田定吉」という署名は本当に吉田半兵衛のことかという問題についてである。これまでの研究では指摘されていないが、元禄一〇年（一六九七年）刊『伊勢物語大成』は、内題が「伊勢物語よみくせ并二百人一首絵抄・三十六人哥仙」であり、『伊勢物語絵入読曲』の挿絵が全て収録され、元禄六年（一六九三年）刊『百人一首絵抄』の挿絵がその頭書部分に全て収録されている。『伊勢物語絵入読曲』（刊記に「絵師 京 吉田定吉」とある）と、『百人一首絵抄』（刊記に「京極四条 吉田半兵衛」とある）の挿絵が同時に収録されていることから、『伊勢物語大成』は、吉田半兵衛が挿絵を描いた作品の再録本であると考えることができるので、『伊勢物語絵入読曲』の刊記の「絵師 京 吉田定吉」という署名は、吉田半兵衛の別号である可能性が高いと考えられる。

次に、吉田半兵衛の没年についての考察は本当に正しいかという問題についてである。水谷不倒氏の『古版小説挿画史』では、吉田

半兵衛は元禄五・六年に引退もしくは逝去し、少なくとも絵師としての生涯は終わったとされており、元禄六年（一六九三年）刊『百人一首絵抄』の挿絵は刊行以前に描かれたものではないか^⑧としているが、現在まで、『百人一首絵抄』の元禄六年以前の版本などは見つかっていない。また、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号（人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部二〇〇〇年九月）によると、江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼の墓誌に、「洛陽の書賈仲邨富平^⑨・画工吉田孝賢^⑩」が「多年法師（筆者注：坂内直頼のこと）の顧盼を獲」^⑪したので、江戸時代中期の京都の僧である玄璠に墓誌の撰文を依頼したことが記されており、坂内直頼の作品の中には吉田半兵衛画とされているものがいくつかある^⑫ため、これは吉田半兵衛の実名であると考えることができる。このことから、吉田半兵衛は、この墓誌がつけられた享保四年（一七一九年）までは生存していたと考えられる。また、筆者が本稿で新たに指摘した作品である、正徳二年（一七一二年）刊『傾城盃軍談』には、刊記にこの実名と思われる「吉田氏」「孝賢」という印記があり、吉田半兵衛がこの時期まで生きていたと考えられる証拠の一つとなっている。

最後に、吉田半兵衛は絵師であり作家でもあったかという問題についてである。西鶴学会 古典文庫 第一六冊『好色貝合』では、吉田半兵衛は絵師であり作家でもあったとして、貞享四年（一六八七年）刊『好色貝合』の序に「僕去年其品々を図にあらはして好色訓蒙図彙をつくる今又もれしを集て是とあはせて全部をなす扱こそ好色貝合と号す」とあることから、『好色貝合』の作者である「洛下散人何之何氏」は、貞享三年（一六八六年）刊『好色訓蒙図彙』の作

者である「洛下の野人」と同じく吉田半兵衛のことであるとしている^⑤。また、西鶴学会 近世文芸資料第一〇『好色物草子集』（古典文庫 一九六八年）では、貞享四年（一六八七年）刊の、男色の心得を記した浮世草子である『男色十寸鏡』の序の「洛陽之野人三夕軒好若処士」という署名や、貞享五年（一六八八年）刊の、『好色貝合』の補遺的な作品である『人倫糸屑』の序の「洛下之野人」という署名も、吉田半兵衛のことであるとしている^⑥。しかし、塩村耕氏は「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』第九六三号（日本古書通信社 二〇〇九年一〇月）で、本文の筆跡から、『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』の三作品は坂内直頼（号は山雲子）作であるとしており、また、陳翠秀氏の「山雲子の著作について」『近世文藝』九九号（日本近世文学会 二〇一四年一月）では、坂内直頼の他の作品の署名との類似から、『好色訓蒙図彙』の序の「洛下の野人」という署名や、『好色貝合』の序の「洛下散人何之何氏」という署名や、『男色十寸鏡』の序の「洛陽之野人三夕軒好若処士」という署名などは、坂内直頼のことであると指摘している。以上を踏まえて、吉田半兵衛の署名がある作品の、絵ではなく、本文の内容を書いたと考えられる作者を以下にまとめた。

- ①『源氏御色遊』 山本八左衛門作
- ②『伊勢物語絵入読曲』〔坂内直頼〕作（初版本である延宝二年（一六七四年）刊『伊勢物語抄』扉に「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作せる所なり」とある）
- ③『好色訓蒙図彙』 洛下の野人（坂内直頼）作
- ④『山路の露』 妙仙尼作

- ⑤『好色貝合』 洛下散人何之何氏（坂内直頼）作
- ⑥『女用訓蒙図彙』 奥田松柏軒作
- ⑦『百人一首絵抄』 〔苗村松軒〕作
- ⑧『傾城盆軍談』 〔八文字屋自笑〕作（『国書総目録』より）

まず、延宝九年（一六八一年）刊『源氏御色遊』については、下巻末尾に「物語の作者 書林やまのやつ」とあることから、江戸時代前期の京都の書肆・作家である山本八左衛門作であると考えられる。次に、貞享三年（一六八六年）刊『伊勢物語絵入読曲』については、この作品には署名がないものの、この初版本である延宝二年（一六七四年）刊『伊勢物語抄』^⑦の扉に「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作せる所なり」とあることから、坂内直頼作であると考えられる。次に、『好色訓蒙図彙』については、序に「洛下の野人」という署名があり、これは前述の通り、塩村耕氏によって坂内直頼のことであると指摘されている。次に、貞享四年（一六八七年）刊『山路の露』については、序に「妙仙尼」という署名がある。次に、『好色貝合』については、序に「洛下散人何之何氏謹撰」という署名があり、これも塩村耕氏によって坂内直頼のことであると指摘されている。次に、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』については、序に「洛下 奥田松柏軒」という署名がある。次に、『百人一首絵抄』については、前述のように、その全文が収録されている『伊勢物語大成』の序に「苗村松軒」という署名がある^⑧ので、苗村松軒作である可能性がある。次に、正徳二年（一七二二年）刊『傾城盆軍談』については、『国書総目録』補訂版 第三卷（岩波書店 一九九〇年）によると、江戸時代中期の京都の書肆・作家である八文

字屋目笑作であるとされている。さらに、吉田半兵衛の署名がある八作品の版下の筆跡を調べたところ、以下の六つの系統に分けることができた。

- A 系統 『源氏御色遊』
- B 系統 『伊勢物語絵入読曲』
- C 系統 『好色訓蒙図彙』、『好色貝合』(下巻「好色乱体図」からは別筆)、『女用訓蒙図彙』(二巻の序は別筆)
- D 系統 『山路の露』
- E 系統 『百人一首絵抄』
- F 系統 『傾城盃軍談』

このように、吉田半兵衛の署名がある作品の版下の筆跡がそれぞれに異なっているので、このことから、吉田半兵衛はあくまで絵師であり、絵師であり作家でもあったとする先行研究は誤りであると指摘したい。

六、おわりに

最後に、改めて今回の結論を述べると、以下の通りである。吉田孝賢(号は半兵衛)は、江戸時代前期の京都の絵師である。まず、その経歴については、宝永六年(一七〇九年)刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』にその半生が記されており、これらの当時の文献から、吉田半兵衛は京都の四条通にある八坂神社御旅所付近に住んでいたと考えられる。次に、その作品

については、現在、作品中に吉田半兵衛の署名などがあり、吉田半兵衛画である可能性が高いと考えられる作品は、延宝九年(一六八一年)刊『源氏御色遊』、貞享二年(一六八五年)刊『伊勢物語絵入読曲』、貞享三年(一六八六年)刊『好色訓蒙図彙』、貞享四年(一六八七年)刊『女用訓蒙図彙』、『山路の露』、『好色貝合』、元禄六年(一六九三年)刊『百人一首絵抄』、正徳二年(一七二二年)刊『傾城盃軍談』の八作品であると考えられる。なお、これらの作品についての考察から、先行研究において、吉田半兵衛は絵師であり作家でもあるとされているのは誤りであり、元禄年間に死んだとされているのも誤りであると指摘したい。

今後も、吉田半兵衛についての研究を進め、吉田半兵衛の周辺について、より具体的に明らかにしていきたい。

(本稿は、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年二月)を一部加筆し修正したものである。)

注

(一) 菱川師宣と吉田半兵衛が対比されている例は、貞享二・四年(一六八六・一六八七年)頃刊『諸国此頃好色覚帳』第一巻第一話「艶男は女の目の毒」の「当世ぬれ絵かきの名人お江戸のひしかわ京の吉田半兵衛も筆をなげつべし」、元禄八年(一六九五年)刊『好色とし男』第二巻第一話「是は絵にかきし姿」の「菱川吉田が浮世枕絵有程ひろげて愛な男はかつかうよりもち物がちいさいの」など。

(二) 『近世文芸叢書』第七巻(国書刊行会 一九一一年 三六三頁)を参照。

⑤ 漆山又四郎 日本書誌学大系 34(1)『絵本年表』第一卷(青裳堂書店 一九八三年 一五三頁)「貞享二乙丑年」項の「首書新抄 伊勢物語絵入読くせ 絵師、京、吉田定吉(半兵衛敷)」などを参照。

⑥ 『国書総目録』補訂版 第三卷(岩波書店 一九九〇年 二四六頁)に「好色貝合こうしよく かいあわせ 二冊 ④ 好色訓蒙図彙後編」とある。

⑦ 水谷不倒『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年 一三〇頁)「吉田半兵衛」項に、「東にあつては、師宣以降、古山師重・鳥居清信・奥村政信等の輩出した如く、西にあつても、半兵衛について、蒔絵師源三郎・大森善清・川島叙清等が続出した。」とある。

⑧ 『新井白石全集』第五卷(国書刊行会 一九〇六年 五七二頁)を参照。

⑨ 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五卷(岩波書店 一九八四年 五〇九頁)「蒔絵師源三郎」項に、「新井白石著『退私録』中の南都に塗師屋源三郎という者がいたという記事より、奈良の人と考えられる。」とある。

⑩ 松屋久重(塗師屋源三郎)については、『神谷宗湛日記』天正五年(一五八七年)三月二七日条に、「一塗や源三郎御会。奈良にて。

宗湛。四畳半。六尺床に白鷺の絵始終掛て。(中略)絵の事。絹の内堅三尺四五寸。横一尺六七寸。白鷺二ツ。蓮葉二ツ。印三ツ有。内二ツは左の方に上下に有。同下之印そと大也。右の上に一ツ。皆一寸三分程の印也。上下茶。中風帯小紋濃浅黄の緞子。露紫也。一文じなし。はち軸くはりん。筆者徐熙也。」(塙保己一『続群書類従』第一九輯下 遊戯部・飲食部(続群書類従完成会 一九八八年 四〇八頁)を参照)という記事もある。

⑪ 小林忠『肉筆浮世絵大観』第九卷 奈良県立美術館・京都府立総合資料館(講談社 一九九六年 一五二頁〜一五四頁)を参照。

⑫ 水谷不倒『古版小説挿画史』(二二八・二二九頁)を参照。

⑬ 江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛。名は富平。京都の高辻通雁金町に店を構えていたので、井上和雄『慶長以来書賈集覧』(彙文堂書店 一九一六年 六四頁)「永原屋孫兵衛」項に「好色訓蒙図彙(貞享二(筆者注…正しくは貞享三))の奥書中に『高辻昆陽軒(筆者注…正しくは昌陽軒)』とあるは此の店の家号に非るか」とある。

⑭ 出典は、江戸時代中期写の玄璠の漢文集である『雲堆雜著』「白慧法師墓誌」である。以下にその一部を引用する。

「粵洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼不堪攀慕今夏来山中請余曰勒行実於石可以垂之不朽余知法師最久故每想疇昔盡然有所感且古人曰有善而不聞於来世後死者之責也因徇其請不敢辞乃歷序其所識而繫之以銘曰

維山雲子 志氣堅剛 青山不變
白雲飛颺 塵埒之外 逍遙徜徉
毘嵐攪動 幻夢一場 令名千載
薦此石章

享保四年歲舍己亥六月日四明西麓沙門某書」

⑮ 坂内直頼作で吉田半兵衛画とされている作品は、延宝二年(一六七四年)刊『山城四季物語』(序に「坂内氏山雲子みつから序」とある。水谷不倒『古版小説挿画史』で吉田半兵衛画であるとされており、この改題本である、享保六年(一七二一年)刊『都歳時記』については、漆山天童『新撰浮世絵年表』(奎光書院 一九三四年 三九頁)では「吉田半兵衛の挿画」、漆山又四郎 日本書誌学大系 34(1)『絵本年表』第一卷(一一六頁)では「画工不明 吉田半兵衛敷」とされている。)、天和三年(一六八三年)刊『歌仙金玉抄』(序に「洛陽散人山雲子謹書」とある。漆山天童『新撰浮世絵年表』(四六頁)では「吉田半兵衛挿画」、漆山又四郎 日本書誌学大系 34(1)『絵本年表』第一卷(一二二頁)では「吉田半兵衛風ノ画」とされている。)

などである。

⑤ 西鶴学会 古典文庫 第一六冊『好色貝合』（古典文庫 一九四八年 解説一・二頁）に、「〔作者〕序に「洛下散人何之何氏」と匿名であるが、その中に「僕去年其品々を図にあらはして好色訓蒙図彙をつくる。今又もれしを集て是とあはせて全部をなす。扱こそ好色貝合と号す」とあるから、作者は貞享三年に好色訓蒙図彙を著した「洛下の野人作者（筆者注…正しくは「書」）無色軒三白居士」（同序）即ち「絵師洛陽吉田半兵衛」（訓蒙図彙上巻中扉）であることが知られる。」とある。

⑥ 西鶴学会 近世文芸資料第一〇『好色物草子集』複製・解説（古典文庫 一九六八年 四六三・四六五頁）の「人倫糸屑」項には、「〔作者〕序文の「洛下野人撰」は、『好色訓蒙図彙』序の「洛下の野人作書無色軒」、「好色貝合」序の「洛下散人何之何氏謹撰」と同人であることを示すと共に、これら三書の本文版下は、文字も絵も同一筆蹟と判定することができるから、作者は、吉田半兵衛と考へる。」とあり、「男色十寸鏡」項には、「〔作者〕序文に「洛陽之野人三夕軒好若処士」とある署名の仕方は、『好色貝合』序文の「洛下散人何之何氏」や『好色訓蒙図彙』序文の「洛下の野人無色軒三白居士」などと同工異曲であり、加ふるに、本文版下、挿絵ともに、これら三書は同一筆者の手に成ると考へられるから、作者は吉田半兵衛と断じてよいであらう。」とある。

⑦ 塩村耕「表紙図版・題字解説」『東海近世』第七号（東海近世文学会 一九九五年 表紙見返）によると、吉田半兵衛画ではない。

⑧ 元禄一〇年（一六九七年）刊『伊勢物語大成』序に「苗村忝軒」という署名がある。

第三章 蒔絵師源三郎の画業について

一、はじめに

蒔絵師源三郎は、江戸時代前期の京都の蒔絵師であり、版本の挿絵を描いた絵師である。元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』（吉田半兵衛）・蒔絵師源三郎画の第三巻末尾に「蒔絵師源三郎筆」と署名があることからその名が知られており、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）では、江戸時代前期の京都の絵師である、吉田半兵衛の門人の一人^③とされている^④。吉田半兵衛は、貞享三年（一六八六年）刊『好色訓蒙図彙』、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』などに署名があることからその名が知られており、貞享三年（一六八六年）刊『好色一代女』『好色五人女』、貞享四年（一六八七年）刊『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている^⑤。吉田半兵衛は、その他にも多くの作家と関わりがあるので、江戸時代前期の出版界を知る上で重要な人物であるといえる。吉田半兵衛については、拙稿「絵師吉田半兵衛の周辺『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年十二月）」に詳しく述べている。

蒔絵師源三郎についての主な先行研究は、近代までの先行研究を概括した、雨石斎主人「吉田半兵衛と蒔絵師源三郎」『浮世絵』第五一号（浮世絵社 一九一九年十二月）、蒔絵師源三郎の経歴と作品について考察した『古版小説挿画史』などであるが、それ以降、蒔絵

師源三郎に関する研究はほとんど進んでおらず、後述するように、先行研究にはいくつかの問題点があると考えられる。そこで、本稿では、蒔絵師源三郎の経歴と作品について、改めて検討してみたい。

二、蒔絵師源三郎の経歴

蒔絵師源三郎の詳細については不明であり、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で考察しているのみである。以下に、『古版小説挿画史』『蒔絵師源三郎』項の一部を引用する。

源三郎の経歴は、半兵衛よりも、更に判らない。新井白石の『退私録』に、南都の天蓋といふ所に、塗師屋源三郎といふ者があつて、徐熙筆鷲の絵を所持してゐたことが記してある。これによつて、源三郎は奈良の人といふことを知るのみである。

ここで水谷不倒氏が蒔絵師源三郎の経歴を知る手掛かりとして挙げているのは、明暦三年（一六五七年）享保一〇年（一七二五年）の政治家である新井白石が著した、『退私録』上巻「珠光之事」である。以下に、その部分を引用する^⑥。

一茶の湯に名ありし珠光は浄土宗にて永観堂の末寺にて南都の称名寺の住僧なりしより仰あり天蓋と云所に塗師屋源三郎と云者あり其家に珠光が所持せし徐熙が鷲の画あり見侍りし由仰す

このように、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で、蒔絵師源三郎は「奈良の人」であるとしたことから、現在では、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるということが通説になっている^⑦が、筆者が改めて塗師屋源三郎という人物について確認したところ、水谷不倒氏が参照した『退私録』にある塗師屋源三郎とは、松屋久重

（通称は塗師屋源三郎。江戸時代前期に奈良の転害郷（現在の奈良県奈良市手貝町）に住んでいた漆器商人。室町時代の僧である村田珠光の茶道を継承し、珠光が好んだ徐熙の鷺の絵を所持していた。^⑧）のことなので、蔣絵師源三郎とは別人であることが判明した。なお、塗師屋源三郎については、『神谷宗湛日記』天正一五年（一五八七年）三月二七日条にも以下のような記事があり^⑨、このことから、蔣絵師源三郎よりも前の時代に生きていた人物であり、蔣絵師源三郎とは別人であることが分かる。

一塗や源三郎御会。奈良にて。宗湛。四畳半。六尺床に白鷺の絵始終掛て。（中略）絵の事。絹の内堅三尺四五寸。横一尺六七寸。白鷺二ツ。蓮葉二ツ。印三ツ有。内二ツは左の方に上下に有。同下之印そと大也。右の上に一ツ。皆一寸三分程の印也。上下茶。中風帯小紋濃浅黄の緞子。露紫也。一文じなし。はち軸くはりん。筆者徐熙也。

以上のことから、蔣絵師源三郎の経歴については、現在のところ、やはり詳細は不明ということになる。ただし、『人倫訓蒙図彙』の刊記に「書林 平楽寺 開板」とあることから、蔣絵師源三郎は、奈良ではなく、京都の書肆である平楽寺の近くに住んでいた、京都の絵師であったということが、可能性の一つとして考えられる。

三、『人倫訓蒙図彙』の挿絵を描いた絵師について

『人倫訓蒙図彙』は、江戸時代の職業について図解した事典で、全七巻である。その第三巻末尾に蔣絵師源三郎の署名があり、第一巻・第二巻と第三巻く第七巻では挿絵の画風が異なるので、現在、

『人倫訓蒙図彙』の挿絵を描いた絵師については、以下の二通りの説が存在する。

A 第一巻・第二巻は蔣絵師源三郎画、第三巻く第七巻は別人画とする説

B 第一巻・第二巻は別人（吉田半兵衛）画、第三巻く第七巻は蔣絵師源三郎画とする説

以下に、それぞれの説を引用する。まず、A説の、第一巻・第二巻は蔣絵師源三郎画、第三巻く第七巻は別人画とする説は、水谷不倒氏の『浮世草子 西鶴本』（水谷文庫 一九二〇年）上巻「五」西鶴本の挿絵に就て」における説である。

蔣絵師源三郎の筆意といふはどんなものを指すか。（中略）『類考』の提供してをる『人倫訓蒙図彙』に就ても、実は其筆者に不明な点があつて、自信がないのである。原来此書を源三郎の絵と称するのは、三の巻の終りに「蔣絵師源三郎筆」と刻してあるに起因してゐる事はいふまでもないが、同書の絵は、一二の巻二冊と三四五六の巻四冊^⑩とは、全然筆意が異なつてをり、どうしても二人の画工によつて画かれたものである事が窺はれる。然れば源三郎はどちらの方を画いたかといふに、当然名の刻してある三の巻以下を画いてをるやうに思はれるけれど、事實は之に反し、一二巻の方が源三郎の筆で、三四巻以下は別人であると思はれる。然れば何故に二の巻の終りに源三郎の名を入れなかつたのか、又何故に他人の画いた三の巻にわざと源三郎の名を入れたか、斯う穿鑿立をして来るといふ迷宮に入るばかりである。或は『人倫訓蒙図彙』には、源三郎の名のないものがあつて、名のあるものは後摺でないかといふ説もある

が、流布本は大概在名のもので、其原版といふものをまだ見た事がないから、其疑ひを解く事が出来ぬ⁸⁸⁾。しかし同書中源三郎が画いたものありとすれば、『類考』はじめ一二の巻の絵を源三郎の筆と認める人が多いやうであるから、こゝには其説に従つて一二の巻を源三郎の筆意と仮定する。

一方、B説の、第一巻・第二巻は別人(吉田半兵衛)画、第三巻く第七巻は蒔絵師源三郎画とする説は、井上和雄氏の『浮世絵師伝』(渡辺画店一九三一年)と漆山又四郎氏の、日本書誌学大系34(1)『繪本年表』第一巻(青裳堂書店一九八三年)における説である。まず、井上和雄氏の『浮世絵師伝』「源三郎」項では、

源三郎 【生】 【歿】
【画系】 【作画期】 元禄

奈良の人、蒔絵師なり、元禄三年七月版『人倫訓蒙図彙』(版元、京都村上平樂寺)七冊の内、卷三以下(卷一及び卷二は別人の筆)の五冊を画けり、蓋し、卷三の終りに「蒔絵師源三郎筆」とあるを以て、彼が名を知らるれども、其が画風は頗る稚氣を帯び、画系の如きは全く不明なり。また元禄八年版(舎衣軒作)の『好色十二人男』五冊も彼の挿画なりと云ふ⁸⁹⁾。

と、第一巻・第二巻は別人画、第三巻く第七巻は蒔絵師源三郎画であるとしている。次に、漆山又四郎氏の、日本書誌学大系34(1)『繪本年表』第一巻「元禄三年」項では、

人倫訓蒙図会 半紙本七卷百四十二丁半 元禄三庚午載七月吉旦

蒔絵師源三郎画 三、四、五、六、七ノ巻(三卷末に署名あり)
書林平樂寺開板

序 署名なし

○但シ一、二ノ巻ハ吉田半兵衛風ノ画也 大坂高麗橋一丁目村上清三郎・江戸日本橋南平松町 村上五郎兵衛

○天童⁹⁰⁾按、住吉具慶の洛中洛外の絵巻を見るに源三郎は具慶の門人か左なくも具慶を私淑せる者なるべし、又署名なきも西鶴の好色一代男、二代男⁹¹⁾、諸国咄、近代艶隠者、□版の撰集抄等は源三郎の画なる事疑無し

とあり、第一巻・第二巻は吉田半兵衛風の画、第三巻く第七巻は蒔絵師源三郎画であるとしている。

そこで、このA・B説のどちらが正しいかを検証するために、『人倫訓蒙図彙』の挿絵の比較を行った。すると、『人倫訓蒙図彙』第一巻・第二巻は、吉田半兵衛の画風と類似していることが分かった。例えば、『人倫訓蒙図彙』第一巻二四丁オの、尼が両手を広げながら左足を上げている絵と、『女用訓蒙図彙』(吉田半兵衛画)第三巻四丁ウの、女性が両手を広げながら左足を上げている絵が類似している。また、『人倫訓蒙図彙』第二巻一三丁ウの、鬚を結った若衆が画面左を向きながら将棋をしている絵と、『女用訓蒙図彙』第三巻一一丁オの、鬚を結った女性が画面左を向きながら立っている絵が類似している。一方、『人倫訓蒙図彙』第三巻く第七巻は、吉田半兵衛とは画風が異なっていることが分かった。例えば、『人倫訓蒙図彙』第四巻五丁オの、持遊細物屋を見物している子供は、先に吉田半兵衛の画風と類似していると指摘した『人倫訓蒙図彙』第二巻における、六丁オの、小児科医師と向き合つて座っている子供と比較すると、子供が異様に小さく描かれるなど絵が稚拙である。

以上のことから、B説が正しく、私見では第一巻・第二巻は吉田

半兵衛画、第三巻と第七巻は蒔絵師源三郎画であると考え。

では、なぜA説が生まれたのかについて考察してみたい。水谷不倒氏は、『浮世草子 西鶴本』の、先に引用した部分において、『類考』ははじめ一二の巻の絵を源三郎の筆と認める人が多いやうであるから、こゝには其説に従つて一二の巻を源三郎の筆意と仮定する。」と述べている。ここで水谷不倒氏が参照しているのは、江戸時代後期の作家である山東京伝が著した、享和二年（一八〇二年）写『浮世絵類考追考』『蒔絵師源三郎』項である。以下に、その部分を引用する。

元禄三年刻本人倫訓蒙図彙に此名あり、西鶴が作の読本のさし絵、名を顕さずといへども多くは此人の絵なり。

『浮世絵類考追考』の作者である山東京伝は、吉田半兵衛については、『浮世絵類考追考』『当世絵又兵衛・同半兵衛』項に、「元禄五年版買物調方三合集覧」に、京にて当世絵書、丸太町西洞院古又兵衛とあり。是等も岩佐又兵衛が名を似せたるものなるべし、又是にならばせて、四条通御旅所の後半兵衛とあり、是等も京の浮世絵師なり。」とのみ述べており、京都の絵師であるということしか知らなかった。また、『浮世絵類考追考』『蒔絵師源三郎』項では、『人倫訓蒙図彙』は第一巻・第二巻と第三巻と第七巻で画風が異なることは指摘されていないので、山東京伝は、第一巻・第二巻（私見では吉田半兵衛画）だけを見て、それを署名のある蒔絵師源三郎画と考え、「西鶴が作の読本のさし絵、名を顕さずといへども多くは此人の絵なり。」と述べたのではないか。

しかし、水谷不倒氏はそのことに気付かず、『人倫訓蒙図彙』の第一巻・第二巻と第三巻と第七巻の挿絵を比較した際に、井原西鶴の

作品によく見られる吉田半兵衛の挿絵に似た画風の、第一巻・第二巻が蒔絵師源三郎画であると考えたのではないかと思われる。

四、蒔絵師源三郎の作品

次に、蒔絵師源三郎の作品についてである。前述の通り、蒔絵師源三郎の画風については、研究者によって異なった見解が示されており、その結果、現在、蒔絵師源三郎画でない作品についても、蒔絵師源三郎画とされているという問題点がある。そこで、蒔絵師源三郎についての記述がある主な書籍やデータベースにおいて、これまで蒔絵師源三郎画とされてきた作品を全て調べ、確実に蒔絵師源三郎画であるとしてきた作品は、延宝九年（一六八一年）刊『日蓮大聖人御伝記』天和二年（一六八二年）刊『好色一代男』、貞享元年（一六八四年）刊『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』、貞享二年（一六八五年）刊『西鶴諸国はなし』、貞享三年（一六八六年）刊『近代艶隠者』『好色一代女』『本朝列仙伝』、貞享四年（一六八七年）刊『絵入西行撰集抄』、元禄元年（一六八八年）刊『好色文伝授』、元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』、元禄五年（一六九二年）刊『世間胸算用』『小謡 観世流百番』、元禄六年（一六九三年）刊『浮世栄花一代男』『西鶴置土産』、元禄七年（一六九四年）刊『西鶴織留』、元禄八年（一六九五年）刊『好色十式人男』『西鶴俗つれつれ』、元禄九年（一六九六年）刊『万の文反古』『古今武士鑑』、元禄十一年（一六九八年）刊『小夜嵐』『怪談全書』『新色五巻書』『初音草咄大鑑』、元禄十三年（一七〇〇年）刊『御前義経記』、元禄十五年（一

七〇二年）刊『女大名丹前能』『元禄曾我物語』『元禄大平記』『御前伽婢子』『風流好色十二段』、元禄一六年（一七〇三年）刊『好色敗毒散』『新平家物語』『風流今平家』『傾城百人一首』、宝永二年（一七〇五年）刊『御伽人形』『棠大門屋敷』『傾城武道桜』、宝永三年（一七〇六年）刊『御伽百物語』『当世乙女織』、宝永四年（一七〇七年）刊『色道懺悔男』『伊達髪五人男』『昼夜用心記』『傾城播磨石』、宝永五年（一七〇八年）刊『美景蒔絵松』、宝永六年（一七〇九年）刊『御前二代曾我』、刊年不明（元禄四・五年頃）『好色にしき木』の四五作品であった。

これらの作品を改めて確認したところ、『人倫訓蒙図彙』以外で、蒔絵師源三郎の署名がある作品はなかった。また、水谷不倒氏が『浮世草子 西鶴本』において、私見では吉田半兵衛画を蒔絵師源三郎画であるとしたこともあり、『人倫訓蒙図彙』以外に、蒔絵師源三郎画であると考えられる挿絵が描かれている作品もなかった。よって、現在、蒔絵師源三郎画であることが確実な作品は、『人倫訓蒙図彙』のみであるといえる。

五、従来蒔絵師源三郎画とされていた作品の絵師について

現在蒔絵師源三郎画とされている作品の中で、『好色一代男』『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝列仙伝』『絵入西行撰集抄』の七作品は、蒔絵師源三郎の絵(と)とは異なるものの、いずれも同じ画風であった。これは、漆山又四郎氏が、日本書誌学大系34(1)『絵本年表』第一巻の、先に引用した部分にお

いて、「○天童按、(中略)又署名なきも西鶴の好色一代男、二代男、諸国咄、近代艶隠者、□版の撰集抄等は源三郎の画なる事疑無し」としたためである。これらの作品の挿絵には、いずれも人物の身体が曲がっていて、下半身が極端に細く描かれているという特徴がある。例えば、『好色一代男』第六卷第六図の、廊下を歩いている遊女の絵、『諸艶大鑑』第六卷第七図の、遊郭を歩いている遊女の絵、『近代艶隠者』第一卷第七図の、小さな獣を抱く女性の絵、『絵入西行撰集抄』第六卷第一四図の、扇を手に舞う遊女の絵、『俳諧女歌仙』第一図の、座っている光貞妻の絵、『西鶴諸国はなし』第二卷第七図の、首のない女性の幽霊の絵、『本朝列仙伝』第四卷第二図の、富士山の上で舞う天女の絵などである。

これについて、水谷不倒氏は、『古版小説挿画史』『蒔絵師源三郎』項で、以下のように述べている。

『蒔絵師伝』(と)は後者に属し、三卷以下を源三郎の筆として、なほ『類考』の説を支持し、西鶴の『一代男』等、半兵衛の筆以外の挿絵を、源三郎が描いたやうに云つてゐる。之は西鶴の条に、私が考証した西鶴の挿絵に、該当するものであるから、其説の非なることは論を俟たぬ。

このように、水谷不倒氏がこれらの作品を井原西鶴画とした理由は、井原西鶴が画賛を書いた絵と画風が類似しているからである(と)。井原西鶴の画賛については本稿では詳しくは取り上げないが、現在発見されている井原西鶴の画賛は、その本文には井原西鶴の署名があるが、絵には井原西鶴画であるという署名はない(と)ので、井原西鶴が画賛を書いた絵が、本当に井原西鶴画であるという確証はない。井原西鶴が自身の作品の挿絵を描いていたという説に対しては、小

池藤五郎氏の『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年）「西鶴筆の自画賛物。画技の基礎の作品」では、「核心をきわめずして、外側に雪・石・ごみ・土までもつけ」た「雪だるま」のような主張であると述べられており、信多純一氏の『好色一代男の研究』（岩波書店 二〇一〇年）「西鶴自画をめぐって」では、これまで井原西鶴画とされていた作品に対して、それぞれに疑問点を提示し、『好色一代男』他従来西鶴画とされてきたものはすべて白紙に戻し、下絵は西鶴画に違いがないが、当時の専門絵師に描かせたものとして、今後論じていきたい。」と述べられているが、その後、水谷不倒氏のこの説が、再検討されることなく現在に至っている。そこで、これらの作品が本当に井原西鶴画であるかについて、再検討してみたい。

まず、現在、井原西鶴画とされている作品を整理した。『好色一代男』『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝列仙伝』『絵入西行撰集抄』と同じ画風の作品を調べたところ、【表一】に記載したような一五作品（挿絵の合計は八一二図）があった。そのうち、井原西鶴作・編の作品は七作品（挿絵の合計は二九八図）、別人作・編の作品は六作品（挿絵の合計は三一五図）、作者不明の作品は二作品（挿絵の合計は一九九図）であった。このように、別人作・編の作品があることや、挿絵の合計が八〇〇図以上に及ぶことから考えると、これらの作品が、専門絵師ではない井原西鶴画であるとはやや考えにくい。なお、作者不明の作品については、現在では、その挿絵が、水谷不倒氏が井原西鶴画とした絵と同じ画風なので、井原西鶴作と推定されているが、もし井原西鶴画でなければ、井原西鶴とは全く関係のない作品ということになる。

次に、作品の作・编者自身が挿絵を描いていた場合、本文と挿絵

の内容の違いはあまりないはずであると考えた。そこで、井原西鶴の代表作であり、天和二年（一六八二年）刊の大坂版（井原西鶴画）と貞享元年（一六八四年）刊の江戸版（菱川師宣画）が存在する『好色一代男』を対象とし、その本文と挿絵の内容の比較を行った結果、大坂版（井原西鶴画）の挿絵では全五四図中一一図に、【表二】に記載したような違いがあった。このことから考えても、『好色一代男』などの作品が、井原西鶴画であることについては疑問が残る。

次に、肉筆で描かれ彩色された絵巻の存在についてである。元禄五年（一六九二年）頃に制作された「西鶴独吟百韻自註絵巻」一卷（紙本着色・天理図書館蔵）は、井原西鶴が一人で吟じた一〇〇句の連句に自分で注をつけた絵巻である。この「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵には、現在、井原西鶴画とされている版本の挿絵との類似点がある。例えば、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第三図の、三人の若衆が、画面右を向き、笠を斜めに深く被り、右腕を後ろにして左腕を懐に入れ、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵は、『三箇津』第二五図の、一人の若衆が、画面左を向き、笠を斜めに深く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵、『好色一代男』第二巻第六図の、一人の香具売りが、画面右を向き、笠を斜めに深く被り、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵、『俳諧石車』第四図の、一人の若衆が、画面左を向き、笠を斜めに深く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵と類似している。また、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第七図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差して

立っている絵は、『好色一代男』第一巻第五図の、世之助が、画面左を向き、笠を被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差して立っている絵、『難波の貞は伊勢の白粉』第二巻第四図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差して立っている絵と類似している。この絵巻は、水谷不倒氏が井原西鶴画とした絵と同じ画風なので、近年まで井原西鶴画であると考えられていたが、現在では、専門絵師ではない井原西鶴が絵巻を制作したとは考えにくく、専門絵師画である可能性が高いという意見^⑧もあるので、もし、「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵を描いた人物が、先行研究で指摘されている通りに、井原西鶴ではなく専門絵師であった場合、版本の挿絵も専門絵師が描いたと考えられるのではないか。

以上、現在、井原西鶴画とされている作品について再検討したが、作品中に絵師の署名がある作品などはなく、これらの作品が井原西鶴画ではないという確証はなかった。しかし、ここからは、もし、これらの作品が井原西鶴画でなかった場合について考えてみたい。

最後に、『寛濶平家物語』における記述についてである。宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛濶平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に、『好色一代男』の挿絵を描いた絵師についての記述がある。以下に、その部分を引用する^⑨。

好色一代男の絵は何ものゝ筆なりけん、島原の初音もろこし、よしの夕ぎりあづまをはじめ、皆江藻髪^⑩の婆々の御影を見るがごとく、腰かゞまり袖ちいさく、鳩むね鍮おとがいにして、立すがたは大風にふかれて倒ありくに似たり、大坂の正甫は鶉一

疋銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり、されば泰羅の色盛、いまだ家の世継誕生なしとて、京にて妾あまたかゝえられしに懷妊の沙汰なく、此たびは大坂にて見たて役人くんだり、姿絵を絵師にあつらへけるに、内意ありて江戸には三浦の小むらさき、京にては花崎、大坂にてはみちとせ、此三人の形をうつし絵に、似たる女をと肝煎中間人置に、図を渡して尋ねさせ、来廿一日中の島の屋敷にて目見ある筈にふれわたしけるに、煎場の弥兵衛方より三十七人、上町の天狗婆々が手より廿九人、天満五丁目笠屋興十郎が十七人、玉造の八内三十六人、合百二十人つれて参りけるをみれば、皆六十よりうへの世界みじかき婆々共なり、役人あきれて、かやうの古き化ぞこなひは、何の為に来りけるぞと無興ある時、肝煎共罷り出、いづれもお望みの絵図に合せましてと取出すをみれば、一代男の絵師がかける女姿也、

この話の概要を簡潔に述べると、主人公である色盛は、京都に妾が多くいたが、まだ子供がいなかったので、大坂で美人を探そうとして、絵師に三都における理想の女性の姿を描かせ、後日屋敷で女性を見ることにしたが、連れて来られた一二〇人の女性を見ると、皆六〇歳以上の老女であり、使いの者が呆れると、幹旋人が「どれも望みの絵の通りの女性です」と言いながら取り出したのは、『好色一代男』の絵師が描いた絵であったというものである。これはあくまで小説だが、この話から、『好色一代男』の挿絵を描いた人物について、以下のようなことが推測できる。

まず、『寛濶平家物語』は、井原西鶴が没した元禄六年（一六九三年）の一七年後である宝永七年（一七一〇年）に刊行された作品だ

が、本文中に「好色一代男の絵は何ものゝ筆なりけん」とあるように、その当時からすでに、『好色一代男』の挿絵を描いた人物の本人は不明であったということがわかる。もし、『好色一代男』が井原西鶴画であった場合、当時からそのことが知られていなかったというのは少し疑問である。

また、先行研究では指摘されていないが、本文中に「好色一代男の絵は何ものゝ筆なりけん」としながらも、「大坂の正甫は鶉一疋銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり」と、江戸時代前期の大坂の絵師であり、鶉の絵を得意とした⁽⁸⁾北峯正甫の名が挙げられていることから、その子がこの絵師の候補として考えられる。『寛濶平家物語』によると、「此たびは大坂にて見たて役人くだり、姿絵を絵師にあつらへけるに」とあるように、『好色一代男』の挿絵は、大坂の絵師によつて描かれたとされているが、北峯正甫は大坂の絵師であることや、【表一】に記載した、現在、井原西鶴画とされている作品には俳諧書や井原西鶴の作品が多いが、北峯正甫は俳人でもあり、井原西鶴と同じ西山宗因の門人であった⁽⁹⁾ことなども共通している。ちなみに、信多純一氏の『好色一代男の研究』「『好色一代男』絵影響作」でも、井原西鶴画とされている挿絵を描いた絵師については、「彼は西鶴に近い立場の人で、或いは俳諧仲間でもあったろうか。」と推測されている。また、北峯正甫については、元禄一〇年（一六九七年）刊の、全国の地誌である『国花万葉記』第六卷「撰津国」に「絵師 谷町 北岑正甫」とあるが、【表一】に記載した、現在、井原西鶴画とされている作品を刊行した書肆の場所は、いずれも現在の大府大阪府大阪市北区・中央区周辺であり、北峯正甫の店があつた現在の大府大阪府大阪市中央区谷

町とは半径五キロメートル以内の距離である。よつて、地理的にも、北峯正甫の子が、それらの作品の挿絵を描いていたと考えても自然ではない。

以上のことから、現在、井原西鶴画とされている作品は、北峯正甫の子などの、大坂の専門絵師画であつた可能性があるということ

六、おわりに

最後に、改めて今回の結論を述べると、以下の通りである。まず、一つ目に、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるという先行研究は誤りであり、『人倫訓蒙図彙』の刊記に、京都の書肆の名前があることから、京都の絵師であつたということが考えられる。二つ目に、これまで蒔絵師源三郎画とされてきた作品は四五作品あるが、『人倫訓蒙図彙』以外に、蒔絵師源三郎の署名がある作品はなく、水谷不倒氏が、私見では吉田半兵衛画を蒔絵師源三郎画であるとしたこともあり、蒔絵師源三郎画であると考えられる挿絵が描かれている作品もなかったことから、現在、蒔絵師源三郎画であると考えられる作品は『人倫訓蒙図彙』のみであるといえる。三つ目に、蒔絵師源三郎は、吉田半兵衛と同じく、『好色一代男』などの、井原西鶴の作品の挿絵を描いていたとする先行研究は誤りであり、先行研究において蒔絵師源三郎画であるとされていた作品には、現在、井原西鶴画であるとされている作品と同じ画風の挿絵が描かれているものがあるが、それらは井原西鶴画ではなく、北峯正甫の子などの、大坂の専門絵師画であつたという可能性がある。

今後も、江戸時代前期の絵師および、現在、井原西鶴画とされている作品について、より具体的に明らかにしていきたい。

(本稿は、拙稿「蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』『三田國文』第六六号(三田國文の会二〇二二年一月)を一部加筆し修正したものである。)

【表一】井原西鶴画とされている作品一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	本文の筆跡	書肆
延宝元年（一六七三年）	一〇月	『哥仙大坂俳諧師』	俳諧	井原西鶴	A系統	刊記なし
延宝九年（一六八一年）	三月	『山海集』	俳諧	紅葉庵賀子	B系統	大坂天神橋筋御藏前 板木屋 伊右衛門
天和二年（一六八二年）	一月	『俳諧百人一句難波色紙』	俳諧	土橋春林	井原西鶴	大坂伏見呉服町書林 深江屋太郎兵衛板
	四月	『高名集』	俳諧	梅林軒風黒	C系統	大坂伏見呉服町書林 深江屋太郎兵衛板
	四月	『三箇津』	俳諧	松水軒如扶	D系統	大坂呉服町書林 深江屋太郎兵衛板行
	一〇月	『好色一代男』	浮世草子	井原西鶴	E系統	大坂思案橋荒砥屋 孫兵衛可心板
貞享元年（一六八四年）	一〇月	『俳諧女歌仙』	俳諧	井原西鶴	井原西鶴	大坂南本町堺筋河内屋 市左衛門板
	不明	『諸艶大鑑』	浮世草子	井原西鶴	井原西鶴	大坂呉服町真斎橋筋角 書林 池田屋三良右衛門板
貞享二年（一六八五年）	一月	『西鶴諸国はなし』	浮世草子	井原西鶴	井原西鶴	大坂伏見呉服町真斎橋筋角 池田屋三良右衛門開板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	本文の筆跡	書肆
貞享三年（一六八六年）	一月	『近代艶隠者』	浮世草子	西鷺軒橋泉	井原西鶴	摂陽順慶町心斎橋筋角 河内屋善兵衛刊
貞享四年（一六八七年）	十一月	『本朝列仙伝』	伝記	田中玄順	F系統	江戸青物町 万屋清兵衛・大坂呉服町心斎橋筋角池田屋 書林岡田三郎右衛門 板行
貞享四年（一六八七年）	五月	『絵入西行撰集抄』	説話	作者不明	G系統	摂城書林 河内屋善兵衛
元禄四年（一六九一年）	八月	『俳諧石車』	俳諧	松魂軒（井原西鶴）	井原西鶴	京城 上村平左衛門・江府 万屋清兵衛・大坂 寿善堂
〔天和三年（一六八三年）〕 (53)	〔二月〕	『難波の只は伊勢の白粉』	評判記	井原西鶴	H系統	刊記なし
〔元禄四年（一六九一年）〕 (54)	〔二月〕	『枕久二世の物語』	浮世草子	作者不明	I系統	刊記に記載なし

【表二】『好色一代男』における本文と挿絵の内容の違い

巻数	話数	本文と挿絵の内容の違い（井原西鶴）画	本文と挿絵の内容の違い（菱川師宣画）
第一巻	第七話「別れは当座ばらひ」	梅に鶯の屏風ではなく菊の襖である。	屏風だが真名の散らし書きである。
第二巻	第二話「髪きりても捨てられぬ世」	炬燵の上に猫がいる ⁸⁰⁾ 。	
	第三話「女はおもはくの外」	女性が木の棒で世之助の眉間ではなく後頭部を打っている。	女性が木の棒で世之助の眉間ではなく前頭部を打っている。
	第四話「誓紙のうるし判」	世之介たちがいるのが揚屋内ではなく屋外である。	世之介たちがいるのが揚屋内ではなく屋外である。
第三巻	第六話「木綿布子もかりの世」		比丘尼の一人が黒頭巾ではない。
第四巻	第三話「夢の太刀風」	女性の楓の妖怪が出てきた場所が庭ではなく二階である。大綱の妖怪に羽が生えており、出てきた場所が空ではなく室内である。	女性の楓の妖怪が出てきた場所が庭ではなく二階である。
	第四話「替った物は男傾城」	世之助は浄瑠璃を観ていないのに浄瑠璃の舞台が描かれている。	
	第六話「目に三月」	扇屋が扇を売りに来るのではなく世之助が扇屋に行っている。	扇屋が扇を売りに来るのではなく世之助が扇屋に行っている。

第八卷	第七卷			第六卷		第五卷		巻数
第一話「らく寝の車」	第五話「諸分の日帳」	第四話「さす盃は百二十里」	第二話「末社らく遊び」	第四話「寢覚の菜好み」	第三話「心中箱」	第六話「当流の男を見しらぬ」	第五話「一日かして何程が物ぞ」	話数
			本文にはない遊女二人が座って涼んでいる様子が描かれている。	世之助が二階にいる。		世之助の羽織が花色（薄い藍色）ではない。	本文にはない遊女が禿から手紙を受け取る姿が描かれている。 ⁹⁹ 。世之助の瞼麦紋の羽織を着ているのが遊女である。	本文と挿絵の内容の違い（井原西鶴）画
車一両に四人のほすが三人しか乗っていない。	世之助が読んでいたはずの太夫の日記がない。	太夫の付き人の着物が紅葉紋ではない。	本文にはない遊女二人が座っている様子が描かれている。	世之助が二階にいる。	琴の糸ではなく縄に女性の髪が吊るされている。			本文と挿絵の内容の違い（菱川師宣）画

注

⑤ 宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に、「半兵衛は三年めに寺町通へ出て弟子あまたかゝへ」とあり、これは吉田半兵衛のことであるとされている。

⑥ 水谷不倒『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年 一三〇頁）

「吉田半兵衛」項に、「東にあつては、師宣以降、古山師重・鳥居清信・奥村政信等の輩出した如く、西にあつても、半兵衛について、蔣絵師源三郎・大森善清・川島叙清等が続出した。」とある。

⑦ 水谷不倒『古版小説挿画史』『吉田半兵衛』項を参照。

⑧ 『新井白石全集』第五巻（国書刊行会 一九〇六年 五七二頁）所収。

⑨ 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五巻（岩波書店 一九八四年 五〇九頁）「蔣絵師源三郎」項に、「新井白石著『退私録』中の南都に塗師屋源三郎という者がいたという記事より、奈良の人と考えられる。」とある。

⑩ 千宗室『茶道古典全集』第九巻（淡交新社 一九五七年）を参照。

⑪ 塙保己一『続群書類従』第一九輯下 遊戯部・飲食部（続群書類従完成会 一九八八年 四〇八頁）所収。

⑫ 正しくは「一二の巻二冊と三四五六七の巻五冊」である。

⑬ 私見では、署名がない本よりも署名がある本の方が版木が摩耗しているのの後刷であり、署名は新しく追加されたものであると考える。

⑭ 朝倉無声『新修日本小説年表』（春陽堂 一九二六年 五七頁）に「○好色十二人男 五 舎衣軒・蔣絵師源三郎画同（元禄八年）」とある。

⑮ 漆山又四郎氏の号。

⑯ 『諸艶大鑑』の別名。

⑰ 大田南畝『浮世絵類考』（岩波書店 一九四一年 五三頁）所収。

⑱ 『万買物調方記』の別名。

⑲ 蔣絵師源三郎についての記述がある主な書籍やデータベースは、柳亭種彦『好色本目録』『新群書類従』第七巻 国書刊行会 一九〇六年）、『此花』第四枝（雅俗文庫 一九一〇年）、漆山又四郎 芸苑叢書第一期『浮世絵年表』（風俗絵巻図画刊行会 一九二〇年）、水谷不倒『浮世草子 西鶴本』（水谷文庫 一九二〇年）、稀書複製会『版画礼讃』（春陽堂 一九二五年）、井上和雄『浮世絵師伝』（渡辺版書店 一九三一年）、米山堂『近世文芸名著標本集』（米山堂 一九三三～一九三五年）、漆山又四郎『新撰浮世絵年表』（奎光書院 一九三四年）、水谷不倒『古版小説挿画史』、大村西崖『近世風俗画史』（宝雲舎 一九四三年）、山崎麓 書誌書目シリーズ⑥『改訂日本小説書目年表』（ゆまに書房 一九七七年）、漆山又四郎 日本書誌学大系 34(1)『絵本年表』第一巻（青裳堂書店 一九八三年）、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五巻、『浮世草子大事典』編集委員会『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（笠間書院 二〇一七年）、新日本古典籍総合データベース、西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースであり、これらを調査対象とした。

⑳ 古典文庫第六〇四冊『好色文伝授・好色錦木』（古典文庫 一九九七年 四五七頁）を参照。

㉑ 『人倫訓蒙図彙』第三巻く第七巻の挿絵を参照。

㉒ 正しくは、漆山又四郎 日本書誌学大系 34(1)『絵本年表』第一巻のこと。

㉓ 水谷不倒『浮世草子 西鶴本』（二八頁）上巻「〔五〕 西鶴本の挿絵に就て」に、「西鶴の遺墨中画讃のものが往々ある。之を見ると、西鶴は素人ながら土佐風の絵に巧みであつた事がわかる。」とある。

㉔ 例えば、延宝七年（一六七九年）に制作された「世継翁画賛」には、本文に「西鶴」という署名があるが、その絵には井原西鶴画であるという署名はない。ただし、延宝七年（一六七九年）に成立

した「西鶴書簡 下里勘兵衛宛」に、「自筆の翁一ふく進上申候御聞可被下候紙に少き御座候而きりぬき申候上手細工に仕申候は見え申ましく候」とあることから、天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（天理大学出版部 二〇二〇年）などでは、「世継翁画賛」は、井原西鶴画であるという証拠がある唯一の画賛であると考えられている。しかし、井原西鶴の画賛はそれぞれに画風が異なるので、もし「世継翁画賛」が井原西鶴画であった場合でも、他の画賛についても井原西鶴画であるとはいえないのではないかと筆者は考える。

㉔ 岸得蔵「挿絵から見た西鶴文学の一性格」『近世文藝』第二号（日本近世文学会 一九五五年一〇月一頁）には、「自註百韻」の絵が直接彼（筆者注：井原西鶴のこと）の手に成ったとは私は素直に信じ難い。しかしそれらは今問わない。」とあり、野間光辰『西鶴』解説（天理図書館 一九六五年 九六頁）には、「本巻（筆者注：『西鶴独吟百韻自註絵巻』のこと）は従来西鶴画とされてゐるが、その技法の余りにも優れてゐる所から、西鶴画たることを疑ふ説もある。確かに画中人物の姿態・顔貌に、他の西鶴筆の画中の人物と相通ずるものがあり、その特色を示してゐる。（中略）（『西鶴独吟百韻自註絵巻』の）文字の筆者と画家は必ずしも同一人たるを要しない。むしろ別人たることを思はせるものがあり、西鶴画の疑はれる理由も大いに存するわけである。」とあり、瀬原退蔵・暉峻康隆・野間光辰『定本西鶴全集』第二二卷（中央公論社 一九七〇年 一九頁）には、

「『西鶴独吟百韻自註絵巻』には、藤井乙男氏による「松寿軒西鶴書画俳諧百韻」という題簽があるが、本巻は、百韻自註の部分と絵の部分とは別々に執筆せられ、後に卷子として仕立てられた形跡が歴然として残つてゐる。従来本巻は西鶴の自画自筆に成るものと信じられてゐたが、もし文字も絵も西鶴の一筆であるとすれば、その製作の過程にいささか疑問を抱かざるを得ない。何となれば、本巻の姿からいへば、文字の筆者と画の書き手とは必ずしも同一人たるこ

とを要しないからである。しかしまた、画中人物の姿態・顔貌等、他の西鶴画作のそれと相通ずるものがあつて、遽かに西鶴画でないとも決することは出来ない。藤井博士が「西鶴書画」の四字を排して、わざわざ「自註絵巻」の四字を選ばれた真意も、或はその辺にあつたのではなかつたかと思はれる。画は確かに俳画と趣を異にする町狩野の風であるが、西鶴の画については猶今後の研究に俟たい。」とある。一方、現在では、佐上圭太「やまとの名品」44 西鶴独吟百韻自註絵巻 西鶴自筆『陽気』第七三六号（養徳社 二〇一〇年 八月三〜四頁）には、「従来、挿絵も西鶴画とされていたが、極彩色であまりに精緻な筆さばきは、狩野派の町絵師が描いた可能性が高い。」とあり、天理大学附属天理図書館 新天理図書館善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（解題 一〇頁）には、「『西鶴独吟百韻自註絵巻』は、挿絵を「伝西鶴画」とするが、精密な描写や色遣いなどから専門絵師の手になると考えられている。」とある。

㉕ 『近世文芸叢書』第七卷（国書刊行会 一九一一年 三六三〜三六四頁）所収。

㉖ 星野錫『美術画報』一三編第五卷（画報社 一九〇八年六月一頁）に北峯正甫画の「菊に鶉図」が紹介されている。

㉗ 延宝元年（一六七三年）刊『哥仙大坂俳諧師』は、江戸時代前期の大坂の俳人である西山宗因の門人三六人を紹介した俳諧書であり、北峯正甫も入集している。

㉘ 『浮世草子大事典』編集委員会『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（八五五〜八五六頁）を参照。

㉙ 土田衛「難波の貌は伊勢の白粉」の刊年『天理図書館報 ビブリア』第三二号（天理大学出版部 一九六五年六月）を参照。

㉚ 天和二年（二六八二年）刊『三箇津』（井原西鶴）画 第六図からの流用か。

㉛ 明暦四年（一六五八年）刊『京童』（画者不明）第二卷第一七図の流用か。

第四章 井原西鶴の画業について

一、はじめに

江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴作の『好色一代男』は、天和二年（一六八二年）刊の大坂版（絵師の署名はない）が井原西鶴画、貞享元年（一六八四年）刊の江戸版（刊記に「大和絵師 菱川吉兵衛師宣」とある）が菱川師宣画であるとされている。

このように、絵師の署名がない大坂版が井原西鶴画であるとされている理由は、水谷不倒氏が『浮世草子 西鶴本』（水谷文庫 一九二〇年）などで、井原西鶴が画賛を書いた絵と画風が類似していることから、大坂版『好色一代男』などの版本を、井原西鶴画であるとしたためである^①。しかし、現在発見されている井原西鶴の画賛は、その本文には井原西鶴の署名があるものの、絵には井原西鶴画であるという署名はないので、井原西鶴が画賛を書いた絵が、本当に井原西鶴画であるという確証はない。これについては、野間光辰氏も『西鶴新攷』（筑摩書房 一九八四年）「西鶴本の挿絵」で、大坂版『好色一代男』などの版本の挿絵は井原西鶴らしいという直観的な印象を受けるという理由から水谷不倒氏の説に賛同しながらも^②、「現在知られてゐる真蹟画讃にはなるほど西鶴の署名あり、松寿・鶴永の印が存するが、しかしそれは讃の方にかかるものではないかという風に疑へば疑ふことも出来るのである。」と述べている。一方で、

水谷不倒氏のこの説に反対する意見もある。小池藤五郎氏は『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年）「西鶴筆の自画賛物。画技の基礎の作品」および『俳諧三ヶ津^{歌仙}』と西鶴を援助した無名画工^{絵入}」で、水谷不倒氏の説について、「核心をきわめずして、外側に雪・石・ごみ・土までもつけ」た「雪だるま」のような主張であると述べており、現在、井原西鶴画とされている作品は、天和二年（一六八二年）刊『高名集』の編者であり、「友とするに琴賤て不叶詩不才也酒乱書眼洪茶其具むつかし花籬廻の儲応かたし只独楽は俳諧にしかし兼言軟語一義に帰し治生産業実相に不背あたなる戯を縁とし賤事を譬勝義の深理をしる浅智疎学の煩もなきと老ほれの親仁もくなつき犬打童もつふやく故に大はたぬき沓波を遊き遠山を踏て尋慕千万を選て一国一人に賦六十有六人画図に一句を添是を師とし朋とす当時日本に鳴渡て肩を双る翅もなき鶴の翁にみせしむれば誠は世の鑑ともならんと羽扣して飛ば石亀も筆をとつて磷」^③という序を書いた、梅林軒風黒（伝未詳）画であると推測している。また、信多純一氏は『好色一代男の研究』（岩波書店 二〇一〇年）「西鶴自画をめぐって」で、天和二年（一六八二年）刊の、当時の大坂の俳人一〇〇人の俳句と肖像画を載せた、土橋春林編の俳諧書である『俳諧百人一句難波色紙』の序に、「叵波俳林の梅は白ひも赤ひもしらすして是を思ふに童に花そかし我此道に数寄いりてある雪の夜西鶴のもとにたつねて今の世の風躰朝にこと葉をかへゆうへに品をつけいづれか是非を聞にひとつとしてあしきにあらす俳諧さかむなるよりもとつき古代の掟を見やふり伝授の鳥を我物にして無理咲の桜盗人

の夜分をも見のかし一坐一興これも面白し正風にして同作同字改こそ面白しこの津はつけあひも早船のより所作者数を覚すこの百人はおほえてそのかたちをしるし一句をとめて南窓の袖壁に残されしをこの春のなくさみに是を開版する物ならし」⁽⁸⁾とあることについて、『百人一句難波色紙』の序をもって西鶴自身が関わっていると思われる見方は容認出来るが、これでもって『俳諧百人一句難波色紙』などの作品を、自筆自画とすることは不可である。西鶴の他の筆蹟からその版下の自筆説は認められるにしても、その挿絵まで彼の描くところとするのは拡大解釈である。「かたちをしるし」とあるが、その下絵を元に専門絵師が版にする時描き直した可能性が存するからである。」と指摘しており、『好色一代男』他従来西鶴画とされてきたものはすべて白紙に戻し、下絵は西鶴画に違いないが、当時の専門絵師に描かせたものとして、今後論じていきたい。」と述べている。このように、大坂版『好色一代男』などの作品が井原西鶴画であるという水谷不倒氏の説は、確実な根拠に基づいているとはいえないにもかかわらず、現在通説となっており、近年の研究によっていくつかの疑問点が指摘されているものの、これまで詳細には再検討されていないという問題点がある。

そこで、本稿では、大坂版『好色一代男』などの作品が、本当に井原西鶴画であるかについて、現在、井原西鶴画とされている版本と画賛などとの比較によって、再検討してみたい。

二、井原西鶴画とされている版本について

拙稿「蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』」「三田國文」第六六号（三田國文の会二〇二一年二月）での論考の結果、現在、井原西鶴画であると考えられる版本は、延宝元年（二六七三年）刊『哥仙大坂俳諧師』（井原西鶴編）、延宝九年（二六八一年）刊『山海集』（紅葉庵賀子編）、天和二年（一六八二年）刊『俳諧百人一句難波色紙』（土橋春林編）、同年刊『高名集』（梅林軒風黒編）、同年刊『三箇津』（松水軒如扶編）、同年刊『好色一代男』（井原西鶴作）、貞享元年（一六八四年）刊『俳諧女歌仙』（井原西鶴編）、同年刊『諸艶大鑑』（井原西鶴作）、貞享二年（一六八五年）刊『西鶴諸国はなし』（井原西鶴作）、貞享三年（一六八六年）刊『近代艶隠者』（西鷺軒橋泉作）、同年刊『本朝列仙伝』（田中玄順編）、貞享四年（一六八七年）刊『絵入西行撰集抄』（作者不明）、元禄四年（一六九一年）刊『俳諧石車』（松魂軒（井原西鶴）編）、刊年不明（天和三年（一六八三年）頃⁽⁹⁾）『難波の良は伊勢の白粉』（井原西鶴作）、刊年不明（元禄四年（一六九一年）頃⁽¹⁰⁾）『椀久二世の物語』（作者不明）の一五作品である。

なお、これらの作品には絵師の署名はないが、いずれも、挿絵において、人物の身体が曲がっていて、下半身が極端に細く描かれているという特徴がある。例えば、『哥仙大坂俳諧師』第一〇図の、座っている方女の絵、『山海集』第三一図の、座っている女性の絵、『俳諧百人一句難波色紙』第二四図の、座っている川崎方女の絵、『高名集』第五四図の、花見幕の中にいる女性の絵、『三箇津』第二五図の、笠を斜めに深く被りながら歩いている若衆の絵、『好色一代男』第六卷第六図の、廊下を通っている遊女の絵、『俳諧女歌仙』第一七図の、座っている方女の絵、『諸艶大鑑』第六卷第七図の、歩く遊女の絵、『西鶴諸国はなし』第二卷第七図の、二人の首のない女性の幽霊の

絵、『近代艶隠者』第一巻第七図の、小さな獣を抱く女性の絵、『本朝列仙伝』第四巻第二図の、富士山の上で舞う二人の天女の絵、『絵入西行撰集抄』第六巻第一四図の、扇を手に舞う遊女の絵、『俳諧石車』第四図の、笠を斜めに深く被りながら歩いている若衆の絵、『難波の良は伊勢の白粉』第三巻第四図の、立っている小桜千之助の絵、『椀久二世の物語』下巻第三図の、鬼の面を被りながら人面馬を追いつ立てる若衆の絵などである。^{⑤⑥}

これらの版本については、拙稿「蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』」「三田國文」第六六号において、まず、現在、井原西鶴画とされている版本のうち、井原西鶴作・編の作品は七作品（挿絵の合計は二九八図）、別人作・編の作品は六作品（挿絵の合計は三二五図）、作者不明の作品は二作品（挿絵の合計は一九九図）であり、別人作・編の作品があることや^⑤、挿絵の合計が八〇〇図以上に及ぶことを指摘し、次に、井原西鶴の代表作であり、天和二年（一六八二年）刊の大坂版（井原西鶴）画）と貞享元年（一六八四年）刊の江戸版（菱川師宣画）が存在する『好色一代男』を対象とし、その本文と挿絵の内容を比較した結果、大坂版（井原西鶴）画）の挿絵では全五四図中一一図、江戸版（菱川師宣画）の挿絵では全五四図中一二図に違いがあり、井原西鶴画とされている挿絵にも、本文と挿絵の内容に違いがあることから、『好色一代男』などの版本の挿絵が井原西鶴画であることについては疑問が残ることを指摘している。

三、井原西鶴画とされている画賛について

前述したように、絵師の署名がない大坂版『好色一代男』が井原

西鶴画であるとされている理由は、水谷不倒氏が『浮世草子 西鶴本』で、大坂版『好色一代男』などの版本を、井原西鶴が画賛を書いた絵と画風が類似していることから、井原西鶴画であるとしたためである。そこで、現在発見されている井原西鶴の画賛を整理すると、以下の二〇作品があった。

まず一作品目は、延宝七年（一六七九年）作「世継翁画賛」（天理図書館蔵）^{⑤⑦}である。これは、平安時代の歴史物語、『大鏡』の登場人物である大宅世継の淡彩画である。画面左に「吉書也天下の世継物かたり」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。これは、延宝七年（一六七九年）成立の「西鶴書簡下里勘兵衛宛」^{⑤⑧}に、「自筆の翁一ふく進上申候御聞可被下候紙に少き御座候而きりぬき申候上手細工に仕申候は見え申ましく候」とあることから、井原西鶴画であるという証拠のある唯一の画賛であると考えられている^{⑤⑨}。しかし、後述するように、井原西鶴の画賛はそれぞれに画風が異なるので、もし「世継翁画賛」が井原西鶴画であった場合でも、全ての画賛が井原西鶴画であるとはいえないのではないかと筆者は考える。

二作品目は、制作年不明（延宝元年（一六七三年）以降）「日演上人画讃」（高安六郎氏旧蔵）^{⑤⑩}である。これは、江戸時代前期の僧である日演の手のために描かれた、座っている日演と水面に浮く葉の絵である。画面左に「のり浮む妙の一葉の舟路かな」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

三作品目は、制作年不明（延宝元年（一六七三年）以降）「高安六郎氏蔵画讃」（高安六郎氏旧蔵）^{⑤⑪}である。これは、江戸時代前期

の僧である日演の手向のために描かれた、水面に浮く葉の絵である。画面左に「のり浮む妙の一葉の舟路かな」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

四〇六作品目は、制作年不明（延宝初年頃）「画賛十二月」〔㉔〕である。これは、一二月を題材にした淡彩画である。各画面中央に画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名がある。「画賛十二月」は、絵と画賛の配置が一定でない「画賛草稿十二月」〔全一卷〕（六月）「七月」「八月」「十二月」欠、木村直三郎氏旧蔵、絵と画賛の配置が一定である「画賛新十二月」〔全一卷、山川良一氏旧蔵〕、一部の絵や画賛の内容を変更した「画賛十二月」〔全二枚、柿衛文庫蔵〕の三作品が制作されている。

七作品目は、制作年不明（延宝〓天和年間頃）「神の梅」発句画賛（天理図書館蔵）〔㉕〕である。これは、天満宮の飛梅・一夜松・鳥居の淡彩画である。画面右に「大鵬ははね也奇瑞は神の梅」という画賛があり、画面右下に「難波西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

八作品目は、制作年不明（天和二年（一六八二年）以降）「宗因像自画讃」（山本愿太郎氏旧蔵）〔㉖〕である。これは、江戸時代前期の俳人であり、井原西鶴の師である西山宗因の追善のために描かれた、座っている宗因の水墨画である。画面中央に「七十八や八十八夜なけきの霜」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

九作品目は、制作年不明（貞享〓元禄年間頃）「梅に鶯」画賛（天理図書館蔵）〔㉗〕である。これは、梅の木の枝に止まっている鶯の水墨画である。画面右に「梅に鶯世〓の朝也夕食也」という画

賛と「難波俳林 西鶴」という署名と「松寿」という落款がある。

一〇作品目は、制作年不明（元禄三年（一六九〇年）頃）「磯崎松画賛」（天理図書館蔵）〔㉘〕である。これは、阿波国（現在の徳島県）磯崎に生えていた、画面左下から右に向かって枝を伸ばした松の淡彩画である。画面中央に「里の海士足袋はくすかた見る世かな」という画賛と「西鶴」という署名と「松寿」という落款がある。

一一作品目は、制作年不明（元禄三年（一六九〇年）頃）「塩浜や」発句画賛（天理図書館蔵）〔㉙〕である。これは、阿波国（現在の徳島県）の海辺で塩釜を焚く人物の淡彩画であり、画面右に「塩浜や焼かてそのまゝ今朝の霜」という画賛と「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

一二作品目は、制作年不明（元禄三年（一六九〇年）頃）「塩浜画賛」（佐方正輝氏蔵）〔㉚〕であるが、これは未見であり詳細は不明である。

一三作品目は、制作年不明（元禄年間頃）「西鶴・才麿画賛」（天理図書館蔵）〔㉛〕である。これは、盃を持つ鬼の水墨画である。画面右に「下戸の目に桜は見えしかくれ笠」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名がある。また、画面左に「大根の花延年のたね」という画賛があり、「才麿」という署名がある。才麿とは、江戸時代前期の俳人であり、井原西鶴の弟子である椎本才麿のことである。

一四作品目は、制作年不明「足元の」俳諧画賛（所蔵者不明）〔㉜〕であるが、これは未見であり詳細は不明である。

一五作品目は、制作年不明「大ふりや」発句画賛（天理図書館蔵）〔㉝〕である。これは、謡曲「鉢木」より、大降りの雪の中を歩く

修行者の水墨画である。画面中央に「大ふりや修行者埋む炭かしら」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名がある。

一六作品目は、制作年不明「門松画賛」（柿衛文庫蔵）^㉔である。これは、松飾りと鶴の淡彩画である。画面中央に「曾の森や世間気恥る門の松」という画賛があり、画面右下に「難波西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

一七作品目は、制作年不明「難波浦舟画賛」（山上嘉信氏旧蔵）^㉕である。これは、難波江（現在の大阪湾）に浮かぶ船に乗る二人の人物の淡彩画である。画面中央に「雛箱や春しり貞にあけまい物」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

一八作品目は、制作年不明「梅柳画賛」（山中熊治郎氏旧蔵）^㉖である。これは、紐で結ばれた一本の梅と柳の淡彩画である。画面左に「鶯も鼻うたうとふ機嫌にて」という画賛があり、画面左下に「西鶴」という署名があり、画面右下に「鶴永」という落款がある。

一九作品目は、制作年不明「万歳楽画賛」（中尾龍秀氏蔵）^㉗である。これは、七福神の一人である福祿寿の淡彩画である。画面右に「君か春やまんさいらく万歳楽」という画賛があり、画面右下に「西鶴」という署名と「鶴永」という落款がある。

二〇作品目は、制作年不明「雪の梅」俳諧画賛（熊坂弥造氏旧蔵）^㉘である。これは、画面左中央から右に向かって枝を伸ばした梅の絵である。画面中央に「意味ふくむ今俳諧や雪の梅」という画賛があり、画面右下に「松寿軒 西鶴」という署名がある。

その他に、井原西鶴以外の人物が画賛を書いた絵で、井原西鶴画とされているものがある。制作年不明（天和二年（一六八二年）以

前）「宗因賛西鶴画花見西行偃息図」（柿衛文庫蔵）^㉙である。これは、平安時代の僧である西行が地面に横になって桜を見ている淡彩画である。画面左に「なかむとて花にもいたし首の骨」という画賛と「梅翁」という署名がある。梅翁は、西山宗因の号であり、これは、井原西鶴が絵を描き、西山宗因がその画賛を書いたものであるとされている。

現在、井原西鶴画とされている作品の絵の詳細な比較は第五節で行うが、その結果、これらの画賛は、それぞれに画風が異なっていることが分かった。もし、井原西鶴が絵を得意とする人物であった場合、全ての画賛が同じ画風である可能性が高いと考えられるので、やはり、これらの作品が井原西鶴画であることについては疑問が残る。

四、井原西鶴画とされている絵巻について

現在、井原西鶴画であるとされている作品には、絵巻も存在する。制作年不明（元禄五年（一六九二年）頃）「西鶴独吟百韻自註絵巻」一卷（紙本着色・天理図書館蔵）^㉚は、元禄五年（一六九二年）に井原西鶴が紀伊国（現在の和歌山県・三重県）熊野を訪れた際に、一人で吟じた一〇〇句の連句に自分で注をつけた絵巻であり、序に「難波俳林 松寿軒 西鶴」という署名と「松寿」という落款がある。この絵巻は、水谷不倒氏が井原西鶴画であるとした絵と同じ画風なので、近年まで井原西鶴画であると考えられていたが、現在では、専門絵師ではない井原西鶴が、彩色された絵巻を制作したとは考えにくいという意見^㉛もある。

この「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵には、現在、井原西鶴画とされている作品の絵との類似点がある。例えば、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第三図の、三人の若衆が、画面右を向き、供の者を連れながら、笠を斜めに深く被り、右腕を後ろにして左腕を懐に入れ、脇差を差して歩いている絵は、『三箇津』第二五図の、一人の若衆が、画面左を向き、供の者を連れながら、笠を斜めに深く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差して歩いている絵、『好色一代男』第二巻第六図の、一人の香具売りが、画面右を向き、供の者を連れながら、笠を斜めに深く被り、脇差を差して歩いている絵、『俳諧石車』第四図の、一人の若衆が、画面左を向き、供の者を連れながら、笠を斜めに深く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差して歩いている絵と類似している。また、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第七図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差している絵は、『好色一代男』第一巻第五図の、世之助が、画面左を向き、笠を被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差している絵、『難波の貞は伊勢の白粉』第二巻第四図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差している絵と類似している。よって、もし先行研究で指摘されている通りに、「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵を描いた人物が井原西鶴ではなく専門絵師であった場合、版本の挿絵も専門絵師が描いたものであるということが考えられる。このことから、これらの作品が井原西鶴画であるという説には疑問点があると指摘できる。

五、井原西鶴画とされている作品の絵師の検討

現在、井原西鶴画とされている作品が、本当に井原西鶴画であるかを検討するために、作品の本文と画像による比較を行った。その結果、版本では『哥仙大坂俳諧師』『山海集』『俳諧百人一句難波色紙』『高名集』『三箇津』『好色一代男』『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝列仙伝』『絵入西行撰集抄』『俳諧石車』『難波の貞は伊勢の白粉』『椀久二世の物語』の一五作品、画賛では「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「大ふりや」発句画賛「万歳楽画賛」の五作品、絵巻では「西鶴独吟百韻自註絵巻」の一作品は、以下の理由により、同一人物画であると考えられる。

まず、一つ目の理由は、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「大ふりや」発句画賛「万歳楽画賛」は、版本と人物の描き方が類似していることである。例えば、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「一月」と「大ふりや」発句画賛」と『山海集』第三六図は、いずれも、大きな笠を被った修行者が、画面右を向き、雪の中を杖をついて歩いている絵が描かれており、「大ふりや修行者埋む炭かしら」という俳句が書かれている点が共通している。また、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「一月」と「万歳楽画賛」は、いずれも、画面右を向き右手に払子を持っている福祿寿の絵が描かれており、「君か春やまんさいらく万歳楽」という俳句が書かれている点が共通している。また、「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「十二月」と『三箇津』第三七図は、町人二人が、大きな門松を背景に歩いており、画面左側にいる町人が右手に提灯を持っている絵が描かれており、「大晦日定めなき世のさため哉」という俳句が書かれている点が

共通している。また、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「九月」と『山海集』第一九図と『高名集』第一六図は、書かれている俳句は、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「九月」は「あし元の赤ひ時見よ下紅葉」、「山海集」第一九図は「桜ちるこのした事よけふの風」、「高名集」第一六図は「門松や今朝神代の巻柱」と異なるものの、樹木の付近で、烏帽子を被り狩衣を着た貴族二人が向かい合っている絵が共通している。一方で、「宗因賛西鶴画花見西行偃息図」は、版本と人物の描き方が類似していない。例えば、「宗因賛西鶴画花見西行偃息図」と『山海集』第一図は、いずれも、「なかつて花にもいたし首の骨」という俳句が書かれているが、「宗因賛西鶴画花見西行偃息図」は、等身の高い僧が桜の下で画面右を向き、笠と杖を地面に置いて横になっている絵が描かれているのに対して、『山海集』第一図は、等身のやや低めな僧が桜の下で画面左を向き、笠を胸元に携えながら杖をついて歩いている絵が描かれている点が異なっている。

次に、二つ目の理由は、「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」は、版本と鬼の描き方が類似しているということである。例えば、「画賛新十二ヶ月」「七月」「画賛十二ヶ月」「九月」と『三箇津』第一九図は、書かれている俳句は「画賛新十二ヶ月」「九月」「画賛十二ヶ月」「七月」は「唐からし泪枝折そ鬼の角」、「三箇津」第一九図は「神鳴や三喜の見たてけさの秋」と異なっているが、角が二本生えており、短いおかつば頭で腰に虎皮を巻いている鬼の絵が共通している。なお、『西鶴諸国はなし』第二巻第九図、『本朝列仙伝』第一巻第一図・第二巻第三図・第二巻第一八図、『絵入西行撰集抄』第八巻第四図、『枕久二世の物語』上巻第六図にも、同じ特徴を持つ鬼が描かれ

ている。一方で、「西鶴・才麿画賛」は、版本と鬼の描き方が類似していない。例えば、「西鶴・才麿画賛」と『三箇津』第一九図は、書かれている俳句は、「西鶴・才麿画賛」は「下戸の目に桜は見えしかくれ笠」「大根の花延年のたね」、「三箇津」第一九図は「神鳴や三喜の見たてけさの秋」と異なっているが、あえて比較すると、やはり、「西鶴・才麿画賛」は肩まで伸びた髪が外側に跳ねている鬼が描かれているのに対して、『三箇津』第一九図は、短いおかつば頭の鬼が描かれている点が異なっている。

次に、三つ目の理由は、「画賛新十二ヶ月」は、版本と馬の描き方が類似しているということである。例えば、「画賛新十二ヶ月」「六月」と『高名集』第五六図は、書かれている俳句は「画賛新十二ヶ月」「六月」は「雲をはくや樗の枝に捨わらち」、「高名集」第五六図は「柴馬やさくらかさしてけふも鞍」と異なっているが、胴が白くたてがみと足が黒い馬が、右足を前に出して左足を内側に向けている絵が描かれている点が共通している。なお、『好色一代男』第二巻第五図にも、同じ特徴を持つ馬が描かれている。

最後に、四つ目の理由は、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」と「塩浜や」発句画賛」は、塩浜の描き方が類似していないということである。「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「一〇月」と「塩浜や」発句画賛」は、いずれも、「塩浜や焼かてそのまゝ今朝の霜」という俳句が書かれているが、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「一〇月」は、前方に海があり、松の生えている浜辺に塩釜がある絵が描かれているのに対して、「塩浜や」発句画賛」は、後方に海があり、松の生えている浜辺で塩釜を焚いている人物の絵が描かれている点が異なっている。なお、「塩浜や」発句画賛」について

は、小池藤五郎氏の『新資料による西鶴の研究』^①「西鶴筆の自画賛物。画技の基礎の作品」にも、「この絵については、写真のみで、実物を見ないからわからないが、非西鶴的のものがある。」とある。

ちなみに、「画賛」という語の意味について検討してみたい。「画賛」という語は、日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第二版 第三卷（小学館二〇〇一年）によると、「画の余白に、内容を補うように書き添える文章、詩歌。讃。」と説明されている。では、水谷不倒氏の説のように、当時、絵を描く人物とその画賛を書く人物は同一人物であることが一般的だったのだろうか。そのことについて考察する際に、参考となる一例を以下に紹介する。元禄四年（一六九一年）刊の、『徒然草』の挿絵入りの注釈書である『徒然草絵抄』は、江戸時代前期の作家である苗村丈伯作であり、挿絵は私見では江戸時代前期の絵師の吉田半兵衛画である。この作品は、刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三徑 図讃」とあることから、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第四卷（岩波書店 一九八四年）「苗村丈伯」項では、「その絵は丈伯自らが描いている。」と説明されているが、筆者の調査では、苗村丈伯はあくまで作家であり、吉田半兵衛は専門絵師であると考えられる^②。よって、「図讃」とは、吉田半兵衛が絵を描き、それに苗村丈伯が文章を書き添えたという意味だと考えられるので、「図讃」に似た「画賛」という語も、絵を描く人物とその画賛を書く人物が必ずしも同一人物であるという意味を表すものではなかったと考えられる。

以上の考察から、もし先行研究で指摘されている通りに、「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵を描いた人物が井原西鶴ではなく専門絵師で

あった場合、それと類似する絵が描かれている版本の挿絵も専門絵師が描いたものということが考えられるが、さらに、それらの版本と類似する絵が描かれている「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「大ふりや」発句画賛「万歳楽画賛」についても、専門絵師が描いたものであるということが考えられる。もちろん、これらの作品については、井原西鶴が下絵を描いた可能性もあるが、本稿で絵に類似点があることを指摘した作品数を合計すると、【表一】に記載した通り、版本は一五作品（全八二二図）、画賛は五作品（全三四図）、絵巻は一作品（全一一図）であり、その全てを専門絵師ではない井原西鶴が描いたと考えるには作品数がやや多いと思われるので、専門絵師画であると考えの方が可能性が高い。

なお、現在、井原西鶴画とされている挿絵を描いた絵師の候補として、拙稿「蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』『三田國文』第六六号で、宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛濶平家物語』第四卷第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に「好色一代男の絵は何ものゝ筆なりけん、島原の初音もろこし、よしの夕ぎりあづまをはじめ、皆江藻髪の婆々の御影を見るがごとく、腰かゞまり袖ちいさく、鳩むね鎧おとがいにして、立すがたは大風にふかれて倒ありくに似たり、大坂の正甫は鶉一足銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり、」^③という記述がある、江戸時代前期の大坂の絵師であり、鶉の絵を得意とした^④北峯正甫の子を、その根拠とともに挙げている。

六、おわりに

本稿では、現在、井原西鶴画とされている作品について再検討したが、絵師の署名がある作品などはなく、これらの作品が井原西鶴画ではないという確証はなかった。しかし、現在、井原西鶴画と考えられる作品は、版本は一五作品、画賛は五作品、絵巻は一作品あり、それらの作品について詳細に調べると、井原西鶴以外の作・編者が著した版本にも井原西鶴画とされている挿絵があること、井原西鶴作・画とされている版本の本文と挿絵の内容に異なっている点があること、井原西鶴画とされている画賛はそれぞれに画風が異なっており全てが同一人物による絵ではないと考えられること、先行研究において専門絵師画とされている「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵には井原西鶴画とされている版本の挿絵との類似点があること、井原西鶴画と考えられる作品の絵は合計八五七図に及ぶので専門絵師ではない井原西鶴が描いたとは考えにくいこと、『寛濶平家物語』における大坂版『好色一代男』の絵師についての記述などから、今後、本当に井原西鶴画であるかということを再検討されてもよいのではないかと筆者は考える。

今後江戸時代前期の絵師について、より具体的に明らかにしていきたい。

【表一】井原西鶴画とされている作品一覧表

刊行年・制作年	刊行月	作品名	作・編者名	図の数
延宝元年（一六七三年）	一〇月	『哥仙大坂俳諧師』	井原西鶴	三六図
延宝九年（一六八一年）	三月	『山海集』	紅葉庵賀子	三六図
天和二年（一六八二年）	一月	『俳諧百人一句難波色紙』	土橋春林	九八図
	四月	『高名集』	梅林軒風黒	六六図
	四月	『三箇津』	松水軒如扶	三七図
	一〇月	『好色一代男』	井原西鶴	五四図
	一〇月	『俳諧女歌仙』	井原西鶴	三六図
貞享元年（一六八四年）	不明	『諸艶大鑑』	井原西鶴	八一図
貞享二年（一六八五年）	一月	『西鶴諸国はなし』	井原西鶴	四七図
貞享三年（一六八六年）	一月	『近代艶隠者』	西鷺軒橋泉	四一図
	十一月	『本朝列仙伝』	田中玄順	三七図
貞享四年（一六八七年）	五月	『絵入西行撰集抄』	作者不明	一七五図
元禄四年（一六九一年）	八月	『俳諧石車』	松魂軒（井原西鶴）	一七図

刊行年・制作年	刊行月	作品名	作・編者名	図の数
〔天和三年（一六八三年）〕	〔二月〕	『難波の良は伊勢の白粉』	井原西鶴	二七図
〔元禄四年（一六九一年）〕	〔二月〕	『枕久二世の物語』	作者不明	二四図
〔延宝初年〕		〔画賛草稿十二ヶ月〕	井原西鶴	八図
		〔画賛新十二ヶ月〕	井原西鶴	一二図
		〔画賛十二ヶ月〕	井原西鶴	一二図
		〔「大ふりや」発句画賛〕	井原西鶴	一図
制作年不明		〔万歳楽画賛〕	井原西鶴	一図
〔元禄五年（一六九二年）〕		〔西鶴独吟百韻自註絵巻〕	井原西鶴	一一図
合計		二二作品		八五七図

注

㉔ 水谷不倒『浮世草子 西鶴本』（水谷文庫 一九二〇年 二八頁）上巻「五」 西鶴本の挿絵に就て」に、「西鶴の遺墨中画讃のものが往々ある。之を見ると、西鶴は素人ながら土佐風の絵に巧みであった事がわかる。」とある。

㉕ 野間光辰『西鶴新攷』（筑摩書房 一九八四年 三二一頁）「西鶴本の挿絵」に、「何ものにも捉われない、自由なそして素直な態度で挿絵そのものを観察すると、（中略）ますます西鶴らしいといふ感じが強調せられるのである。明確な証拠はと開き直られると、水谷氏の具体的証明も疑へば疑はるる余地が存するにも拘らず、猶且西鶴自画を主張し、又それが一般に受け入れらるる根柢には、かかる感じが根づよく纏つてゐるからであらう。たとへそれが極めて素朴な直観的印象に基くとはいへ、感じといふものも案外馬鹿に出来ないものであり、又単に馬鹿に出来ないばかりではなく、理論的な肯定と否定の材料が尽して、その何れにも一応の根柢が認められるといふ場合に立到つた時には、却てこの感じが最後の決定を下す重要な材料になることが往々あるのである。そして西鶴本の挿絵の場合もさうなのである。」とある。

㉖ 稀書複製会『高名集』（米山堂 一九三二年）所収。

㉗ 稀書複製会『難波色紙百人一句』（米山堂 一九三三年）所収。

㉘ 土田衛「難波の貌は伊勢の白粉」の刊年『天理図書館報 ビブラ』第三二号（天理大学出版部 一九六五年六月）を参照。

㉙ 『浮世草子大事典』編集委員会『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（笠間書院 二〇一七年 八五五・八五六頁）を参照。

㉚ 現在、井原西鶴画とされている版本の挿絵の類似点としては、他にも、天和二年（一六八二年）刊『好色一代男』第五巻第一話「後は様つけて呼」の吉野と貞享元年（一六八四年）刊『俳諧女歌仙』

第三四図の吉野、『好色一代男』第六巻第二話「身は火にくばるとも」の夕霧と『俳諧女歌仙』第三二図の夕霧（着物の柄も一致）、『好色一代男』第六巻第七話「全盛歌書羽織」の野秋と『俳諧女歌仙』第三三図の吉田、『好色一代男』第七巻第一話「其面影は雪むかし」の高橋と『俳諧女歌仙』第三一図の花鳥が挙げられる。

㉛ 別人作・編および作者不明の作品は、貞享三年（一六八六年）刊『近代艶隠者』以外は、筆跡も井原西鶴以外の人物によるものである。詳しくは、拙稿「時絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』『三田國文』第六六号（三田國文の会 二〇二二年 二月）を参照。

㉜ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三巻『西鶴自筆本集』（天理大学出版部 二〇二〇年 一五一頁）に画像が紹介されている。

㉝ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三巻『西鶴自筆本集』（一七一〜一七六頁）に画像が紹介されている。

㉞ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三巻『西鶴自筆本集』（解題 一二・一八頁）に、「延宝七年三月二十二日付西鶴書簡下里勘兵衛宛に「自筆ノ翁一ぶく進上申候 御聞可被下候 紙ニ少きれ御座候 而きりぬき申候 上手細工ニ仕申候バ見え申まじく候」とある下里知足（勘兵衛）へ献呈の一幅が本画賛に当たる。赤外線鑑定によつて修復の跡も確認されている。右書簡によつて西鶴自筆画であることを西鶴自身が証明する画賛となる。」「西鶴本の挿絵を西鶴自画とする作品については、水谷不倒『浮世草子西鶴本 上・下』水谷文庫、一九二〇年 一月）以来の研究成果から得た結論であり、多くは通説となつてゐる。ただ、該当するいずれの作品にも西鶴画とする明確な証左はなく、（中略）この問題を云々する見識もないが、本書掲載の「世継翁画賛」は、解説で述べたように、「西鶴書簡 下里官兵衛宛」によつて、証左のある唯一の西鶴自画賛であることが言えるのである。」とある。

㉟ 滝田貞治『西鶴襍藁』（野田書房 一九四一年 口絵）に画像が紹

介されている。

㉔ 滝田貞治『西鶴襟藁』（四六四頁）に画像が紹介されている。

㉕ 制作年については、小池藤五郎「西鶴の新史料、四作品の瞥見」『国語と国文学』第四六二号（東京大学国語国文学会 一九六二年九月六〇頁）によると、「画賛草稿十二ヶ月」「画賛新十二ヶ月」「画賛十二ヶ月」「十一月」の絵は、延宝九年（一六八一年）刊『山海集』第三六図（いずれも、大きな笠を被った修行者が、画面右を向き、雪の中を杖をついて歩いている絵が描かれている）と類似していることなどから、「延宝初年の作とせざるを得ない。」としている。「画賛草稿十二ヶ月」は『西鶴』（天理図書館 一九六五年 二一六～二一九頁）、「画賛新十二ヶ月」は『西鶴』（二二〇～二二五頁）、「画賛十二ヶ月」は『西鶴』（二二六～二三二頁）に画像が紹介されている。この作品が制作された背景については、野間光辰『西鶴』解説（九七頁）に、「夙くから、望まれるままに自句に絵を加へて人に与へてゐたものが、次第に句・絵柄も固定し、いつしかそれを四季十二ヶ月の一揃へとすることが始まり、人もそれを望むやうになつたものと思はれる。」と考察されている。

㉖ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五二頁）に画像が紹介されている。

㉗ 三越大阪支店『上方俳星遺芳』（芸艸堂 一九三二年 三七頁）に画像が紹介されている。

㉘ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五五頁）に画像が紹介されている。

㉙ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五六頁）に画像が紹介されている。

㉚ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五四頁）に画像が紹介されている。小池藤五郎『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年 四七四頁）「西鶴筆の自画賛物。画技の基礎の作品」には、「この絵については、写真のみで、

実物を見ないからわからないが、非西鶴的のものがある。」とある。

㉛ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（解題 一三頁）で紹介されている。

㉜ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五七頁）に画像が紹介されている。

㉝ 小池藤五郎『新資料による西鶴の研究』（四七三頁）で紹介されている。

㉞ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（一五三頁）に画像が紹介されている。

㉟ 『西鶴』（五頁）に画像が紹介されている。

㊱ 『西鶴』（二三三頁）に画像が紹介されている。

㊲ 『西鶴』（二三四頁）に画像が紹介されている。

㊳ 『西鶴』（二三六頁）に画像が紹介されている。

㊴ 頼原退蔵・暉峻康隆・野間光辰『定本西鶴全集』第一三卷（中央公論社 一九五〇年 口絵）に画像が紹介されている。

㊵ 制作年については、柿衛文庫ホームページによると、西山宗因（慶長一〇年（一六〇五年）～天和二年（一六八二年））の句（なかもとて花にもいたし首の骨）は、明暦三年（一六五七年）刊『牛飼』第一巻が初出だが、筆跡は晩年のものであるとしている。柿衛文庫ホームページに画像が紹介されている。この画賛が井原西鶴画とされた経緯については、岡田利兵衛 岡田利兵衛著作集Ⅲ『西鶴・近松・伊丹』（八木書店 一九九七年 三三頁）「西鶴の二つの遺墨」に、「さてこの画は無款であるが、何人の筆であろうか。狩野の手法を基調とし、加うるにやささか洒脱の趣がある。宗因の画はきわめて稀有である。もし画を巧みにえがいたとすると触目することが多いはずである。わずかに当柿衛文庫に蔵する「楊梅自画賛」（きわめて小品）の一点があるが、それと比べても本点が宗因の自画とは考えられないのである。私がこの一幅を得てから間もない一日、天理図書館を訪れた。それは天理図書館が編集する図録『西鶴』に掲載する柿衛

文庫蔵の西鶴遺墨類を撮影のためであった。たまたま本幅をも携行したので、野間光辰教授はじめ編集員諸氏に見せた。その場で数多の西鶴筆の絵画・小説挿絵などと精細に対照検討した結果、この画の作者は西鶴であると衆議一決したのである。」とある。

㉔ 天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』(一〇五―一四八頁) に画像が紹介されている。

㉕ 岸得蔵「挿絵から見た西鶴文学の二性格」『近世文藝』第二号(日本近世文学会 一九五五年一〇月一頁) には、「自註百韻」の絵が直接彼(筆者注・井原西鶴のこと)の手に成つたとは私は素直に信じ難い。しかしそれらは今問わない。」とあり、野間光辰『西鶴』解説(九六頁)には、「本巻(筆者注・『西鶴独吟百韻自註絵巻』のこと)は従来西鶴画とされてゐるが、その技法の余りにも優れてゐる所から、西鶴画たることを疑ふ説もある。確かに画中人物の姿態・顔貌に、他の西鶴筆の画中の人物と相通するものがあり、その特色を示してゐる。(中略)『西鶴独吟百韻自註絵巻』の文字の筆者と画家は必ずしも同一人たるを要しない。むしろ別人たることを思はせるものがあり、西鶴画の疑はれる理由も大いに存するわけである。要するに積極的に西鶴画たることを証する根拠も乏しいが、さりとて他にその画者として比定すべき人物の手がかりもない。ただ西鶴画作の現存するものの殆どすべて俳画風の淡彩画にて、かかる密画の作あることを知らず、現在においては、なほいづれとも決しかねる。」とあり、頼原退蔵・暉峻康隆・野間光辰『定本西鶴全集』第二卷(中央公論社 一九七〇年二九頁)によると、この絵巻には、藤井乙男氏による「松寿軒西鶴書画俳諧百韻」という題簽があるが、「本巻は、百韻自註の部分と絵の部分は別々に執筆せられ、後に卷子として仕立てられた形跡が歴然として残つてゐる。従来本巻は西鶴の自画自筆に成るものと信じられてゐたが、もし文字も絵も西鶴の一筆であるとすれば、その製作の過程にいささか疑問を抱かざるを得ない。何となれば、本巻の姿からいへば、文字の筆者と画の書

き手とは必ずしも同一人たることを要しないからである。しかしまた、画中人物の姿態・顔貌等、他の西鶴画作のそれと相通するものがあつて、遽かに西鶴画でないとも決することは出来ない。藤井博士が「西鶴書画」の四字を排して、わざわざ「自註絵巻」の四字を選ばれた真意も、或はその辺にあつたのではなかつたかと思はれる。画は確かに俳画と趣を異にする町狩野の風であるが、西鶴の画については猶今後の研究に俟ちたい。」とあり、岡田利兵衛 岡田利兵衛著作集Ⅲ『西鶴・近松・伊丹』(二五頁)「西鶴の絵画―俳諧関係―」には、「独吟百韻自註絵巻」は西鶴の独吟百韻とその自註と挿画十から構成される。挿画が極彩色であまりに精緻なため、プロ画家の筆かと疑点を抱かせるが、人物の風姿や松などの樹木の描写―「松上の鶴」は「門松画賛」の鶴ときわめて近似する―などから、やはり西鶴の自画とするのが妥当である。」とある。一方、現在では、佐上圭太「やまとの名品」44 西鶴独吟百韻自註絵巻 西鶴自筆「陽気」第七三六号(養徳社 二〇一〇年八月三・四頁) には、「従来、挿絵も西鶴画とされていたが、極彩色であまりに精緻な筆さばきは、狩野派の町絵師が描いた可能性が高い。」とあり、天理大学附属天理図書館 新天理図書館善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』(解題 一〇頁) には、「『西鶴独吟百韻自註絵巻』は挿画を「伝西鶴画」とするが、精密な描写や色遣いなどから専門絵師の手になると考えられている。」とある。

㉖ 苗村丈伯については拙稿「苗村丈伯の著作について」『三田國文』第六七号(三田國文の会 二〇二二年一月)を参照。また、吉田半兵衛については拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年一月)を参照。

㉗ 『近世文芸叢書』第七卷(国書刊行会 一九二一年 三六三・三六四頁) 所収。

㉘ 星野錫『美術画報』一三編第五卷(画報社 一九〇八年六月一頁) に北峯正甫画の「菊に鶉図」(北峯正甫画)が紹介されている。

第五章 居初つなの著作と画業について

一、はじめに

吉田半兵衛は、江戸時代前期の京都の絵師である。貞享三年（一六八六年）刊の、『訓蒙図彙』を模倣し、当時の好色風俗について挿絵入りで解説した浮世草子である『好色訓蒙図彙』や、貞享四年（一六八七年）刊の、『訓蒙図彙』を模倣し、女性のための知識について挿絵入りで解説した往来物である『女用訓蒙図彙』などに署名があることからその名が知られており、当時は、浮世絵を創始した人物として有名な菱川師宣と並び称されていた人物である^{⑧⑨}。また、貞享三年（一六八六年）刊の『好色五人女』『好色一代女』や、貞享四年（一六八七年）刊の『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている^⑩。吉田半兵衛は、その他にも多くの作家と関わりがあるので、江戸時代の出版界を知る上で重要な人物であるといえる。吉田半兵衛については、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第二一五号（慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年十二月）に詳しく述べている。

一方、居初つなは、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である。居初つなは、当時としては珍しい女性作家であっただけでなく、自身の作品の挿絵を描く絵師でもあり、主に女性用の往来物を著している。居初つなに関する先行研究としては、居初つな作の往来物を紹介し、それぞれの内容についての概要を述べた、小泉吉

永氏の「居初津奈の女用文章」『江戸期おんな考』第八号（桂文庫一九九七年九月）や、居初つな作の往来物について考察し、居初つなの経歴を明らかにした、石川透氏の「居初つなの往来物『藝文研究』第九五号（慶應義塾大学藝文学会 二〇〇八年十二月）などがある。また、往来物作家である居初つなが、多くの奈良絵本・絵巻を書写していたことが、同じく石川透氏の『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）で明らかにされている^⑪。居初つなは、版本においては吉田半兵衛に似た画風の絵を描いており^⑫、写本においてはかわいらしい絵を描いている^⑬。つまり、居初つなは、世界初の女性絵本作家ともいえる人物なのである^⑭。

吉田半兵衛は、宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に、「半兵衛は三年めに。寺町通へ出て。弟子あまたかゝへ」とあるように、多くの弟子がいたとされている。そして、居初つなは、宮武外骨氏の「居初津奈女」『此花』第一三枝（雅俗文庫 一九二一年一月）に、「画風によつて鑑定を下すと、吉田半兵衛の門人であらうと思ふ、そして其筆力は師に劣らないものと見る」とあり、また、青木平七氏の「吉田半兵衛の挿絵とその遺風」『古本屋』第八号（荒木伊兵衛書店 一九二九年十二月）に、画風が吉田半兵衛式であることから「半兵衛が遺髪を継いだ門人であらうと思はれる」とあり、井上和雄氏の『浮世絵師伝』（渡辺版画店 一九三一年）「津奈女」項には、画風が半兵衛流であることから「吉田半兵衛門人歟」とある。さらに、日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会『原色浮世絵大百科事典』第二巻（大修館書店 一九八二年）「つなじよ いそめ 居初 津奈女」項に、「**5画系** 吉田半兵衛風」

とあるように、吉田半兵衛の門人の一人と考えられている。

もし、先行研究で指摘されている通りに、吉田半兵衛と居初つなが師弟であった場合には、吉田半兵衛は、女性も弟子としていた当時としては珍しい人物であったといえる。また、江戸時代における写本と版本の制作背景が、より具体的に明らかになると考えられるが、吉田半兵衛と居初つなに、実際に直接的な関係があったかについては、未だに明らかにされていない。そこで、本稿では、吉田半兵衛と居初つなが師弟であった可能性について考察し、二人の関係をより具体的に明らかにしてみたい。

二、居初つなの経歴

まず、居初つなの経歴を整理する。居初つなの経歴を知る上で参考となる資料として、先に紹介した先行研究により、以下のようなものが指摘されている。

万治三年（一六六〇年）刊の、『初学文章抄』を模倣し、女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女初学文章』（和田悦^⑧）作^⑨・窪田やす書^⑩の刊記に「江州大津住窪田宗保息女やす」とある一方で、貞享四年（一六八七年）刊の、『今川状』を模倣し、女性のための教訓を簡条書きで記した往来物である『女今川』（居初つな書）の刊記に「江州大津住窪田宗保孫つな筆」とあり、延宝八年（一六八〇年）写の『平家物語』の奥書に「大津住居初宗閑息女つな」とある^⑪。

また、元禄三年（一六九〇年）刊の、『書翰初学抄』を模倣し、一二ヶ月における女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物であ

る『女書翰初学抄』の序で、居初つなが、自身の経歴について、以下のように述べている。

天降る日那に生なる葛の葉のうらむる事は宿世のえにしぞかし其道々のことわざを露しらまほしきには且恋しきは都なめり僕壮年の比隙ある身となれりよりて日比の本意こゝなりと八重の汐路をしのぎて今此九重にいたりぬ住事二十とせに及べりつゝに思ふ道／＼をたどりて其かたはしをうかゞひ我身には足れりと是をたのしみ隙行駒のあしなみを草のとざしにかぞへ和国の風雅を味ふならし爰にしれる人一人の女子をもてり是がために女文章のしるべならん事を書いてよと望める事数多度なり辞するに詞なくて終に二札の文を書いてあたへぬ彼人よるこびて女文章鑑と名付りそれもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へり今一人の女子ありて又此書を望めりよつてつたなき詞を綴て女書翰初学抄と名付これ偏に初心のためなりといふ事しかり

居初氏女都音書之

さらに、享保十一年（一七二六年）刊の、女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女筆琵琶海辺』^⑫の跋に、以下のような記述がある。

琵琶の海は洛西隠士居初氏幼より文筆に心をよせ自筆を染て寿梓したしき女童にあたへられしをいって乞ひ求め今世にひろむるものならんかし

なお、『女筆琵琶海辺』の刊行年については、石川透氏が、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）で、「享保十一年の刊記を持つ『琵琶の海』は、一つだけ離れた年号であること、刊記が別筆であることを考えると、再版である可能性の方が高いと思われる。」

と述べている。

以上の資料により推定できる居初つなの経歴は、以下の通りである。居初つなは、寛永一七年（一六四〇年）頃に、近江国（現在の滋賀県）大津に住んでいた居初宗閑と、窪田宗保の娘であり、万治二年（一六五九年）以前(303)刊の、『庭訓往来』を模倣し、一二ヶ月における女性のための知識を往復の手紙形式でまとめた教訓書である『女庭訓』(304)や、万治三年（一六六〇年）刊の『女初学文章』の本文を清書した書家であった窪田やすの娘として生まれ、壮年の頃に京都に上り、二〇年以上住んだ。それ以来、多くの写本や版本を制作している。居初つなが多く著した往来物は、寺子屋の教科書として使用されていた書物であることから、石川謙氏の『女子用往来物分類目録』（講談社 一九四六年）では、居初つなは寺子屋の女師匠であったとも考えられている。そして、その後に、京都の西の郊外に隠棲した。

ちなみに、享保一四年（一七二九年）刊の『書籍目録』第四卷の「女書并手本類」項に「一女今川姫鑑 窪田つる」とあり、明和元年（一七六四年）刊の、女性のための知識をまとめた大江玄圃作の往来物である『女学範』上巻の「書学」項に「窪田氏津留の人大津」「女今川姫鑑つる書」とある、宝暦一三年（一七六三年）刊の『女今川姫鏡』(305)の筆耕である窪田つるという人物について、居初つなの母方の姓や名前との類似から、小泉吉永氏の『稀観往来物集成』第一三卷（大空社 一九九七年）では、窪田やす・居初つな・窪田つるの三人は親族であった可能性が指摘されているが、『女今川姫鑑』は、貞享四年（一六八七年）刊の『女今川』（居初つな書）の、巻頭・巻末の付録や本文の頭注・挿絵などを増補した改題本であり、本書の

中心はあくまで『女今川』の本文なので、『書籍目録』や『女学範』は、『女今川姫鑑』の筆耕について、『女今川』の刊記に「江州大津住窪田宗保孫つな筆」とあるのを参照したが、「つな」の「な」（字母は「奈こ」を「る」（字母は「累こ」と見間違えたと考えられる。つまり、窪田つるという人物が存在していたわけではなく、「窪田（宗保孫）つな」と「窪田つる」は同一人物、つまり、居初つなのことを指しているのだろう。

一方、吉田半兵衛は京都に住んでいた人物である。生没年は不明だが、寛永年間（一六二四年～一六四四年）頃に生まれたと推定される(306)。また、同時代の資料により、享保四年（一七一九年）までは生存していたと考えられる(307)。

このことから、吉田半兵衛と居初つなは、ほぼ同世代の人物であると考えられるので、吉田半兵衛と居初つなが師弟であったと考えても、年齢的には不自然ではない。

三、居初つなの作品

次に、居初つなの作品についてである。小泉吉永氏の「居初津奈の女用文章」『江戸期おんな考』第八号（桂文庫 一九九七年九月）などによると、現在確認されている、居初つなの署名がある版本は、【表一】に記載したように、貞享四年（一六八七年）刊『女今川』、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』『女文章鑑』、元禄三年（一六九〇年）刊『女書翰初学抄』、元禄七年（一六九四年）刊『女教訓文章』、元禄八年（一六九五五年）刊『女実語教』、享保一一年（一七二六年）以前刊『女筆琵琶海辺』の七作品である。なお、そのうち、

挿絵がある作品は、『女百人一首』『女教訓文章』『女実語教』『女筆琵琶海辺』の四作品である。

本文の筆跡はいずれも同筆であるが、『女文章鑑』については、石川透氏が、『奈良絵本・絵巻の制作者、居初つな』『奈良絵本・絵巻研究』第六号（奈良絵本・絵巻国際会議 二〇〇八年九月）で、『女文章鑑』という本だけは少し疑問の字もある」と述べている。ただし、『女文章鑑』の作者については、『女書翰初学抄』（居初つな書序に、「爰にしれる人一人の女子をもてり是がために女文章のしるべならん事を書いてよと望める事数多度なり辞するに詞なくて終に二札の文を書いてあたへぬ彼人よろこびて女文章鑑と名付りそれもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へり」とあり、『女書翰初学抄』下巻第二〇章「文かきやうの指南十ヶ条」に、「一 女文はいかにもやさしくあるべし我先の書にいひたるごとく女性の文は詞をこゑにつかはず読にてつかひ給ふべし縦ばきのふといふを昨日といへばこゑ也今日をけふ一昨日をおとつひかやうに有べし書物さうしなどよみ給はんも此心なり」(203)とあるのは、『女文章鑑』「一 女文章はとかく音にてよむやうにはずいぶんかゝぬがよし 縦ば こんにち みやうにち せんどは せん月 去年 当年 来年 びんぎ など／＼はかたき詞にて聞にくし けふ あす あさて きのふ いつそや さきのつき こそ ことし くる春 あけのはる たより など はやはらかにて聞よしかやうの事あまた有心をつけへし」のことを指していると考えられることから、『女書翰初学抄』と同一人物であると考えられる。また、石川透氏の『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）などで紹介されている、居初つなの署名がある写本は一〇点

以上ある。なお、先行研究では指摘されていないが、貞享四年（一六八七年）写の「女百人一首」（宮内庁書陵部蔵）は、奥書に「貞享四丁卯年中冬書之 居初氏女都音」とあり、居初つなは、翌年の貞享五年（一六八八年）に、『女百人一首』（刊記に「執筆 居初氏女都音」という署名がある）という同名の版本を刊行しているので、居初つなは、写本の制作時期は延宝・貞享年間、版本の制作時期は貞享・元禄年間が中心であったと考えられる(206)。

一方、現在確認されている、吉田半兵衛画であるという署名がある版本は八作品であるが、その他にも、吉田半兵衛画と考えられる版本は二二〇作品以上ある。署名がある最初の作品は延宝九年（一六八一年）刊で、最後の作品は正徳二年（一七一二）刊であり、貞享年間（一六八四年～一六八八年）を中心に活動した。

このことから、吉田半兵衛と居初つなは、ほぼ同時期に活動した人物であることがわかる。

四、吉田半兵衛と居初つなの関係

次に、吉田半兵衛と居初つなの関係について考察する。

まず、吉田半兵衛と居初つなの版本の挿絵の比較を行ったところ、以下のような結果となった。貞享五年（一六八八年）刊の、一〇〇人の女性歌人の和歌を一人一首ずつ選んだ歌集である『女百人一首』の挿絵は、吉田半兵衛の挿絵とは類似しておらず、写本でよく見られる絵に類似しており、『女百人一首』上巻第四図の、画面左を向き、右手を顔の下に添え、着物の袖が垂れている采女の絵は、江戸時代前期頃写の『はちかづき』（石川透氏蔵）第〇巻第〇図の、

画面左を向き、右手を顔の下に添え、着物の袖が垂れているはちかづき姫の絵(100)と類似している。一方、元禄七年(一六九四年)刊の、『鑑草』を習字手本用に改めた往来物である『女教訓文章』以降は、吉田半兵衛の挿絵と類似している。例えば、『女教訓文章』上巻第七図の、座っている女性の絵は、元禄五年(一六九二年)刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』(苗村丈伯作・「吉田半兵衛」画(101))第一巻第一図の、様々な身分の女性が描かれている中の、画面左を向いて立っている町人の絵と類似している。また、元禄八年(一六九五年)刊の、『実語教』『童子教』を模倣し、女性のための教訓を簡条書きで記した教訓書である『女実語教』下巻第一図の、画面左を向き、髪をまとめた元結の先が二本上を向いており、右足を少し上げている女性の絵は、『女重宝記』第一巻第二図の、画面右を向き、髪をまとめた元結の先が二本上を向いており、左足を少し上げている火車婆の絵と類似しており、『女実語教』下巻第二図の、顔は画面右を向き、身体は画面左に向けて、右手で着物の裾を掴み上げ、左手は下げており、右足を少し上げている女性の絵は、『女重宝記』第一巻第二図の、顔は画面左を向き、身体は画面右に向けて、左手で着物の裾を掴み上げ、右手は下げており、左足を少し上げている傾城の絵と類似しており(102)、『女実語教』下巻第八図の黒雲と雷は、貞享四年(一六八七年)刊の、諺の由来について記した浮世草子である『籠耳』(苗村丈伯作・「吉田半兵衛」画)第三巻第二図の、黒雲と雷の描き方と類似している。その他にも、『女百人一首』上巻第五図、『女教訓文章』上巻第三図、『女実語教』上巻第六図には、画面右下を向き、琴を弾く女性が描かれているが、貞享四年(一六八七年)刊の『女用訓蒙図彙』(奥田松柏軒作・吉田半

兵衛画)第三巻第四図や、『女重宝記』第一巻第三図・第五巻第一図にも類似した絵が描かれている。特に、『女実語教』上巻第六図と『女重宝記』第五巻第一図は、女性の向きは異なるものの、下髪を一つにまとめた元結の先が二本上を向いており、亀甲柄の着物を着た女性が琴を弾いている点が共通している。このように、吉田半兵衛と居初つなの版本の挿絵には類似点が数多く見受けられるが、吉田半兵衛の方が、やや形式的な描線であり、居初つなの方が、柔らかく丸みを帯びた描線であると指摘できる。

このようにして見ると、居初つなは、吉田半兵衛画の作品の中でも、特に、『女重宝記』などの、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯の作品の挿絵を参考にして、自身の版本の挿絵を描いていたのではないかと思われるのである。苗村丈伯は、井上和雄氏の「女重宝記『浮世絵』第一六号(浮世絵社 一九一六年九月)に、「(彼筆者注・苗村丈伯)の著述中の挿画のある分は、皆悉く同一の筆意である」と指摘されているように、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品のうち、挿絵のある作品は一六作品であるが、そのうち一作品に吉田半兵衛の署名があり(103)、一五作品が私見では吉田半兵衛画なので、吉田半兵衛と関係の深い作家であると考えられる。そこで、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品の挿絵と比較した結果、『女筆琵琶海辺』五〇丁ウの頭書部分の挿絵は、元禄二年(一六九八年)刊の、『徒然草』の注釈書である『つれつれ草』(苗村松軒(丈伯)(104)作・「吉田半兵衛」画)上巻第一図と、画面左にいる兼好が、画面右を向き、文台に左肘を乗せ、右手を立てた右膝の上に乗せて座っているだけでなく、背景の草庵の形や縁側の角度、手水桶とその上に置かれた柄杓の形、門の形、画面上を流れる川の流

線まで一致していた。『つれつれ草』では、兼好が、武士のように眉の曲がった無骨な顔に描かれているのに対して、『女筆琵琶海辺』では、かわいらしい顔に描かれているという違いはあるものの、これは、居初つなが、吉田半兵衛の挿絵を確実に参照した一例として指摘できるものである。

ちなみに、『女筆琵琶海辺』の口絵は画風が異なっており、これについて、小泉吉永氏は、『往来物解題辞典』（大空社 二〇〇一年）の補遺である「往来物倶楽部 新発見の往来物」^{①②}の「琵琶の海」項で、「『女筆琵琶海辺』の」巻頭口絵に描かれた上流階級邸内での女子の物読み・貝合の図は居初津奈の自画である。」としているが、『女筆琵琶海辺』の版元が大坂であることを考えると、これは江戸時代中期の大坂の絵師である寺井重信^③に似た画風なので、大坂で刊行される際に追加されたものであり、『女筆琵琶海辺』の目録に「居初氏女津奈書画」とあるのは、それ以降の本文の頭書部分の挿絵のことであると考えられる。また、『女筆琵琶海辺』の跋の内容から、この口絵に描かれている、女子たちを教育している人物は、居初つなではないかと考えられる。よって、居初つなは、京都の上流階級の女子を教育する教育者であった可能性を指摘したい。

このことから、居初つなが、吉田半兵衛から直接絵を学んでいたかは現在のところ不明だが、少なくとも、苗村丈伯の作品などに描かれた吉田半兵衛の挿絵を参考にして、版本の挿絵を描いていたことは間違いないと考えられる。

また、苗村丈伯と居初つなの作品の本文を比較すると、類似する箇所が複数指摘できる。例えば、元禄三年（一六九〇年）刊の『女書翰初学抄』上巻第一章「正月初て遣文之事」の「めてたくかくし」

の語注に、「女文のおくに不吉ならぬ事はいつにてもかくのことし昔はあなかしこと書ける也中比よりかやうに書事也 昔恙と云虫人をさしてなやます間或人此虫を穴へをひ入穴を閉ふさきて殺ゆへに虫たえてなくなりぬ人みな悦穴賢無^レ恙なりぬと云心也此故に文のをくにあなかしこと書留ること也又何事もなき事をつゝかなしと云も此義也下学集にみゆ」^{④⑤}とあるのは、『籠耳』（苗村丈伯作）第一巻第五話「穴賢無^レ恙」に、「地に穴をほりてすまゐしける時地のなかに恙といふ虫ありて人を蟄けると也是よりして 書状の文体に。人の無事なる事をとふに。無^レ恙候哉とかくこと也下学集に見えたり。又上代の文のおほりに。穴賢と書も。地の穴を。かしこくとぢふさぎて恙虫にさゝれぬやうにとの心也今女の文のをはりにかくしと書は。あなかしこといふを略してかしこと書なり」とある記述と類似している。また、『女実語教』上巻に、「一 女は地獄の使なりよく仏の種子をたつ 一面は菩薩に似たりといへ共心は夜叉のごとしと説給へり」とあるのは、『女重宝記』（苗村丈伯作）第一巻第一話「女は人のはじまりの事」に、「女人は地ごくのつかひなり仏のたねを断ち外面は菩薩にゝて内心は夜叉のごとしと釈迦も経にとき」とある記述と類似している。さらに、『女実語教』下巻に、「一 女は三界に家なし夫の家を家とする也」とあるのは、『女重宝記』第二巻第一話「しうげんの次第」に、「女は父母の家を家とせず夫の家をわがすみかとするゆへに夫の家に帰^{かへ}るといふ義にて帰^{とく}ともいふなり」とある記述と類似している。

このことから、居初つなは、苗村丈伯の作品の本文と挿絵の両方

を参考にして、版本を著していた可能性があるといえる。

苗村丈伯と居初つな関係は、他にも指摘できる。『女書翰初学抄』には、本文以外の部分を改変した改題本がいくつか存在する⁽¹¹⁾。そのうちの、元禄十一年（一六九八年）刊の『女用文章綱目』と、その翌年である元禄十二年（一六九九年）刊の『増益女教文章』は、『女書翰初学抄』の本文以外の部分が居初つな以外の筆跡で増補されており、これまでは作者不明であったが、以下に述べる理由により、苗村丈伯作であり、『増益女教文章』は、『女用文章綱目』の改編本であると考えられる。

まず一つ目に、作品の構成についてである。『女用文章綱目』と『増益女教文章』は、いずれも三巻三冊である。また、現在、苗村丈伯作であると考えられる二四作品中一四作品が、本文を二段に分け、上段に注釈、下段に本文などを載せたものであるという特徴があるが、『女用文章綱目』は、本文を二段に分け、上段に女性のための知識を載せ、下段に『女書翰初学抄』の本文（下巻第一章「とふらい文遣事」を除く）を載せた作品であり、『増益女教文章』は、本文を二段に分け、上段に、慶安三年（一六五〇年）刊の、女性の生活全般についての教訓を記した作者不明の往来物である『女鏡秘伝書』の本文を載せ、下段に『女書翰初学抄』の本文（下巻第一章「とふらい文遣事」を除く）を載せた作品であるという点が共通している。

二つ目に、作品の内容についてである。『女用文章綱目』と『増益女教文章』は、上中下巻における、目録の体裁や、『女書翰初学抄』の本文が共通している。また、『女用文章綱目』は、上巻目録に「御厨子図・黒棚図」、下巻末尾付録に「小笠原流万包様折形の図」「女

中節用字尽」「文かきやうの指南十ヶ条」「目録折紙かきやうの事」（このうち、「女中節用字尽」「文かきやうの指南十ヶ条」「目録折紙かきやうの事」は『女書翰初学抄』からの引用である。ただし、『女書翰初学抄』では「女中道具字尽并衣類」という名前であった項が、『女用文章綱目』では同じ筆跡で「女中節用字尽」に変更されている。）があり、『増益女教文章』は、上巻目録に「柿本の太夫人麿歌之像」、下巻一七丁ウ以下に「小笠原流万包様折形の図」「御厨子図・黒棚図」「文かきやうの指南十ヶ条」「女節用字尽」「女中詞遣字尽」「目録のかみかきやうの事」「尼名字尽」「女中名字尽」（このうち、「文かきやうの指南十ヶ条」「女節用字尽」「女中詞遣字尽」「目録のかみかきやうの事」「尼名字尽」「女中名字尽」は『女書翰初学抄』からの抄出だが筆跡が異なる）がある。このことから、『増益女教文章』は、『女用文章綱目』に「柿本の太夫人麿歌之像」「女中詞遣字尽」「尼名字尽」「女中名字尽」項を加えたものであり、作品名の意味から考えても、『増益女教文章』は、『女用文章綱目』の「増益」版であると考えられる。

三つ目に、筆跡についてである。私見では、『女用文章綱目』と『増益女教文章』は、苗村丈伯の作品と筆跡が同じである⁽¹²⁾。

四つ目に、挿絵についてである。『女用文章綱目』下巻一丁才と、『増益女教文章』中巻目録には、諸芸を嗜む女性たちの絵が載っているが、これは、『女重宝記』（苗村丈伯作・〔吉田半兵衛〕画）第一巻第三図からの転載である⁽¹³⁾。また、『女用文章綱目』上巻目録・下巻末尾付録と、『増益女教文章』下巻一七丁ウ・一八丁には、「御厨子図・黒棚図」「小笠原流万包様折形の図」が載っているが、これは、『女重宝記』（苗村丈伯作・〔吉田半兵衛〕画）第二巻一二丁才の

「御厨子之図・黒棚之図」、第五卷一八丁ウ〜二〇丁ウの「小笠原流万包様折形の図」からの転載である。また、『増益女教文章』第一巻目録には、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」の三二文字で描かれた「柿本の大夫人麿歌之像」が載っているが、これは、元禄一〇年（一六九七年）刊の、『伊勢物語』などの注釈書である『伊勢物語大成』（苗村松軒（丈伯）作・吉田半兵衛画）第一巻裏表紙見返し）の「柿本人麿」図からの転載である。

以上の検討により、『女用文章綱目』と『増益女教文章』は、いずれも苗村丈伯作であると考えられ、いずれも、他の苗村丈伯の作品と同様に、吉田半兵衛の画風に似た挿絵があることから、吉田半兵衛画であると考えても差し支えないと思われる。

なお、現在、苗村丈伯と居初つなに直接的な関係があったことがわかる資料などは見つかっていないが、居初つなは、近江国（現在の滋賀県）出身で、京都で活動した人物であり、苗村丈伯も、苗村姓は近江国が発祥であることから近江国出身であると考えられ、その後京都で活動している。また、居初つなは、貞享・元禄年間を中心に活動しており、苗村丈伯は、延宝〜宝永年間（一六七三年〜一七二一年）、特に元禄年間（一六八八年〜一七〇四年）を中心に活動しているので、活動時期もほぼ同じである。さらに、江戸時代中期以降の「居初家天然図画亭記」（居初家蔵）（200）に、「六如僧正なつて天然図画亭とよひし」とあることから、江戸時代中期の近江国の医師であった苗村道益の孫である六如（ろく）が、現在の滋賀県大津市堅田にある居初氏庭園内の書院に「天然図画亭」と名付けたことがわかるので、苗村家と居初家には当時から親交があったことがわかる。

次に「雛形絵巻」の存在についてである。貞享〜元禄年間頃作の、着物を着た女性たちと、衣紋掛けに掛けられた着物を描いた「雛形絵巻」一卷（紙本着色・奈良県立美術館蔵）（201）は、伝居初つな書画であり、石川透氏の「居初つなと『雛形絵巻』」（奈良絵本・絵巻研究）第七号（奈良絵本・絵巻国際会議 二〇〇九年九月）によると、「少なくとも『雛形絵巻』の文字の部分は、居初つなの手になるものなのである。」とある。この「雛形絵巻」は、小林忠氏の『肉筆浮世絵大観』第九巻 奈良県立美術館・京都府立総合資料館（講談社 一九九六年）などによると、『女用訓蒙図彙』（奥田松柏軒作・吉田半兵衛画）第三巻の、着物を着た女性の姿を描くことで着物の意匠を見せる絵や、第四巻の、着物の意匠図と性質が類似しているので、吉田半兵衛の流れを汲む人物の作である可能性が指摘されている。また、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）で吉田半兵衛画とされている、元禄四年（一六九一年）刊の、作者不明の図案書である『としの花』（202）という作品も、当時における伊達な模様の衣装を京都・大坂の歌舞伎役者に着せた雛形絵なので、吉田半兵衛は『女用訓蒙図彙』『としの花』、居初つなは『女実語教』などのように、両者とも、女性教育用の往来物や、雛形絵の性質を持った作品に関わっているという共通点がある。なお、長崎巖氏の「奈良県立美術館所蔵『雛形絵巻』について——描かれた風俗の観点から——」（『MUSEUM』第五五〇号（東京国立博物館 一九九七年一〇月））などでは、「雛形絵巻」は、卷子本形式でありながら、肉筆風俗画の特徴も示し、江戸時代前期から中期にかけての一般の肉筆浮世絵とは一線を画するものであり、絵画史上位置づけが比較的難しい作品であることが指摘されている。このことから、もし、奈良絵

本・絵巻を制作していた居初つな、後の浮世絵の祖となった吉田半兵衛に師事していた場合、吉田半兵衛は、室町時代後期から江戸時代前期にかけて制作された奈良絵本・絵巻と、江戸時代中期から後期にかけて制作された浮世絵の橋渡しとなった人物として位置付けることができるだろう。そこで、「雛形絵巻」と吉田半兵衛の絵を比較すると、「雛形絵巻」第二図の、顔を画面左に向け、身体は画面右に向けて、右手に丸い団扇を持ち、左手で着物の裾を掴み上げている女性の絵は、『としの花』（吉田半兵衛）画）第三図の、顔を画面左に向け、身体は画面右に向けて、右手に扇子を持ち、左手で着物の裾を掴み上げている役者の絵と類似していた。

この「雛形絵巻」について、より深く理解するために参考となる存在として浮上したのが、吉田光義という人物である。正徳五年（一七一五年）刊の、着物の意匠などが描かれた図案書である『雛形都商人』の序に「御小袖墨絵師 寺町御池上ル町 吉田光義」という署名があるが、宝永六年（一七〇九年）刊の『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」には、吉田半兵衛の半生が記されており、これによると、吉田半兵衛は、京都で人気の絵師になった後、寺町通に出店したとあるのが、「寺町御池上ル町」（寺町通と御池通が交差する付近）に住んでいた、吉田光義という人物は、吉田半兵衛の跡継ぎであった可能性がある^(註)。ちなみに、『子孫大黒柱』には、吉田半兵衛が、絵師の仕事として、「屏風の押絵。図の極りたる草花尽鳥づくし仙人唐子など。版下の絵に書。ひそかに板行にほらせて唐紙に摺。其うわ絵をそれぐの絵の具にて。彩色ける」などのことをしていたとあるが、『雛形都商人』には、草・花・鳥・七賢人・唐子などの絵が載っているの、小説である『子孫大

黒柱』の記述に、より信憑性が増すと考えられる。このようにして考えると、吉田半兵衛の跡継ぎであると考えられる人物が、小袖絵師の仕事をしていたということになるので、その初代である吉田半兵衛も、版本の挿絵だけでなく、着物の制作にも少なからず関わっていたと考えることができるだろう。例えば、雛形本は江戸時代初期から刊行されており、代表的なものに、菱川師宣が描いた、天和二年（一六八二年）刊の『小袖のすがたみ』や、江戸時代前期の京都の扇絵師であり、後に雛形本を著した宮崎友禅が描いた、元禄五年（一六九二年）刊の『余勢ひいなかた』などがある。このように、雛形本は、当初は小袖絵を専門としない浮世絵師が描いていたものである。また、『女用訓蒙図彙』第四巻には、この巻に載っている着物の絵について、「浮世絵の逸物吉田氏が筆をかりて粗かゝしむる也」とあるが、それに続く文で、当時の着物の図案作成の方法について、「夫模やうの好といふは雛形の図をみてそれを左を右に右をひだりに上を下になすにて其様異やうにかはれり」と説明されている。さらに、天和二年（一六八二年）頃刊の、四季における着物の見本としてつくられた作者不明の図案書である『四季模様諸礼絵鑑』二六・二七図には、呉服屋の商人が、女性たちに着物と雛形本を見せている図が描かれていることから、当時は、絵師が描いた雛形絵を参考にして、好みの着物の図案を作成していたと考えられる。したがって、吉田半兵衛の門人の一人であるとされている居初つなも、このような背景から、「雛形絵巻」を制作したのではないかと。

最後に、江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛についてである。貞享五年（一六八八年）刊の、手紙ごとに、不適切な例文と適切な例文の二通りを示し、女性らしい言葉遣いを指南した往来物

である『女文章鑑』(「居初つな」作(序のみ中村孫兵衛書か⁽²³⁾)の版元は、中村孫兵衛である。中村孫兵衛は、貞享三年(一六八六年)刊の『好色訓蒙図彙』(坂内直頼作・吉田半兵衛画)の版元でもあり⁽²⁴⁾、江戸時代中期の僧である玄璠の漢文集である『雲堆雜著』(国立国会図書館蔵)「白慧法師墓誌」に、「洛陽の書賈仲邨富平(筆者注・中村孫兵衛のこと⁽²⁵⁾・画工吉田孝賢(筆者注・吉田半兵衛のこと⁽²⁶⁾)」が「多年法師(筆者注・江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼のこと)の顧盼を獲」たので、玄璠に墓誌の撰文を依頼したことが記されているように、吉田半兵衛と親交があった人物である。このように、中村孫兵衛の書肆で、吉田半兵衛画や居初つな作の作品が刊行されていることは、この二人が、当時、同じ生活圏にいた傍証の一つであるといえる。

五、おわりに

本稿では、吉田半兵衛と居初つなが師弟であった可能性についてより具体的に明らかにするため、まず、居初つなに関する新資料である、貞享四年(一六八七年)写の「女百人一首」(宮内庁書陵部蔵)などを参考として、居初つなの経歴と作品を整理し、居初つなは、近江国(現在の滋賀県)から京都に上って諸芸を学び、京都の上流階級の女子を教育する教育者をしていた人物である可能性を指摘した。また、吉田半兵衛と居初つなの挿絵には、構図が全く同一である、元禄十一年(一六九八年)刊の『つれつれ草』(苗村丈伯作・吉田半兵衛画)上巻第一図と、『女筆琵琶海辺』(居初つな書・画)五〇丁ウの頭書部分の挿絵を始めとして、数多くの類似点があるの

で、居初つなは、吉田半兵衛の挿絵を参照していた可能性が高いことを指摘した。また、居初つなは、貞享〓元禄年間頃に「雛形絵巻」(奈良県立美術館蔵)を制作しているが、正徳五年(一七一五年)に『雛形都商人』を刊行した、江戸時代中期の京都の小袖絵師である吉田光義は、吉田半兵衛の跡継ぎであると考えられるので、居初つなは、実際に吉田半兵衛の周辺で絵を学んでいた可能性も高いといえるだろう。さらに、居初つなは、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯作の、貞享四年(一六八七年)刊の『籠耳』や、元禄五年(一六九二年)刊の『女重宝記』の本文や挿絵を参照していたと考えられるが、その一方で、苗村丈伯も、元禄三年(一六九〇年)刊の『女書翰初学抄』(居初つな書)の改題本を二作品刊行していることも指摘した。苗村丈伯の作品は、ほとんどが吉田半兵衛画であるという特徴があるので、この三人の関係が注目される。ちなみに、吉田半兵衛の妻⁽²⁷⁾、居初つな、苗村丈伯の三人は、いずれも近江国出身であるという共通点があるというのも興味深い。

以上の考察により、奈良絵本・絵巻を制作していた居初つなが、後の浮世絵の祖となった吉田半兵衛の挿絵を参照していたことが明らかになったことで、吉田半兵衛は、室町時代後期から江戸時代前期にかけて制作された奈良絵本・絵巻と、江戸時代中期から後期にかけて制作された浮世絵の橋渡しとなった人物として、新たに位置付けることができるのではないだろうか。

今後も江戸時代前期の出版界について、より具体的に明らかにしていきたい。

【表一】居初つな作の版本一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
貞享四年（一六八七年）	六月	『女今川』	往来物	刊記「江州大津住窪田宗保孫つな筆」	挿絵なし	福森三郎兵衛板
貞享五年（一六八八年）	三月	『女百人一首』	歌集	刊記「執筆 居初氏女都音」	〔居初つな〕画	江戸 西村半兵衛・京 万屋庄兵衛
		『女文章鑑』	往来物	署名なし	挿絵なし	高辻通雁金町 中村孫兵衛梓
元禄三年（一六九〇年）	一月	『女書翰初学抄』	往来物	序「居初氏女都音書之」	挿絵なし	堀河通本園寺前 小佐治半右衛門板
元禄七年（一六九四年）	三月	『女教訓文章』	往来物	「平安 居初女 津奈筆」	〔居初つな〕画	文台屋治郎兵衛蔵板
元禄八年（一六九五年）	三月	『女実語教』	往来物	刊記「居初氏 女津奈書画之」	居初つな画	文台屋治郎兵衛蔵板
享保十一年（一七二六年）	九月	『女筆琵琶海辺』	往来物	目録末尾「居初氏女津奈書画」	居初つな画	大坂心斎橋筋 書林 大塚屋宗兵衛

注

- ⑤ 吉田半兵衛と菱川師宣が対比されている例は、貞享三・四年（一六八六・一六八七年）頃刊『好色諸国此比覚帳』第一巻第一話「艶男は女の目の毒」における「当世ぬれ絵かきの名人お江戸のひしかわ京の吉田半兵衛も筆をなげつべし」、宝永七年（一七一〇年）刊『寛濶平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」における「板行の浮世絵をみるにつけても、むかしの庄五郎が流を、吉田半兵衛まなびながら、一流つゞまやかに書出しければ、京大坂の草子は半兵衛一人にさだまりぬ、江戸には菱川、大和絵師の開山とて、坂東坂西此ふたりの図を写しける」、元禄八年（一六九五）刊『好色とし男』第二巻第一話「是は絵にかきし姿」における「菱川吉田が浮世枕絵有程ひろげて愛な男はかつかうよりもち物がちいさいの」など。
- ⑥ 水谷不倒『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）「吉田半兵衛」項を参照。
- ⑦ 居初つなは、写本の本文および絵を書いている例は、江戸時代前期頃写『はちかづき』（石川透氏蔵、上巻末尾に「居初氏女書画」とある）などである。一方、版本の本文および挿絵を書いている例は、元禄八年（一六九五）刊『女実語教』（刊記に「居初氏女津奈書画之」とある）などである。
- ⑧ 例えば、元禄八年（一六九五）刊『女実語教』（居初つな画）上巻第六図と、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』（吉田半兵衛画）第三巻第四図は、琴を弾く女性の姿が類似している。
- ⑨ 石川透『西行物語』の版本の制作者について『西行学』第四号（西行学会二〇一三年八月 四八頁）にも、「居初つなは、版本の挿絵は、京都の版本によく見られる吉田半兵衛風の絵を描き、奈良絵本・絵巻の場合には、彩色が施されることもあって、かなり個性的な、俗に言うかわいらしい絵を描いていたのであろう。」とある。
- ⑩ 石川透『西行物語』の版本の制作者について『西行学』第四号（四九頁）にも、「居初つなは」おそらくは、日本で最初の女流

絵本作家といった存在となるであろう」とある。

⑪ 和田以悦は、江戸時代前期の京都の歌人である。文政一二年（一八二九年）刊『続諸家人物誌』下巻「和田一華堂」項に、以下のような記述がある。

名ハ以悦字ハ宗翁一華堂ト号ス京ノ人和歌ヲヨクシ典故ヲ松永貞徳ニ受儒学ヲ藤惺窩ニウク嵯峨広沢ニ隠居シテ仕ヲ好ス延宝中歳七十二シテ歿ス弟宗允字子成ハ儒ヲ以テ聞ユ

著述

大和物語集注 伊勢物語集注 源氏綱目
源氏弁引抄 藤河百首抄 堀河百首抄
童子訓 女庭訓

⑫ この作品自体に作者の署名はないが、寛文一〇年（一六七〇年）刊『書籍目録 作者付大意』第二巻「女書」項に、「三冊 女初学文章 右（一花堂）之作・右（大津のやす女）之筆」とある。

⑬ 石川透「奈良絵本・絵巻の研究と収集5——居初つな筆本の絵画——」『日本古書通信』第一〇八七号（日本古書通信社 二〇二〇年 二月 一二頁）を参照。

⑭ 享保一四年（一七二九年）刊『書籍目録』第四巻「女書并手本類」項に「三同（女筆）琵琶海辺」とあるので、それ以前に刊行されたと考えられる。

⑮ この作品に刊記はないが、万治二年（一六五九年）刊『書籍目録』「往来物并手本」項に「三冊 女庭訓」とあるので、それ以前に刊行されたと考えられる。

⑯ この作品自体に作者等の署名はないが、寛文一〇年（一六七〇年）刊『書籍目録 作者付大意』第二巻「女書」項に「三冊 女庭訓 一花堂作・大津のやす女筆」とある。

(104) この作品自体には作者の署名はない。絵師は、刊記に「画師 西川祐信」とある。

(105) 当時、菱川師宣と並び称されていたことや、吉田半兵衛の半生について記されている宝永六年（一七〇九年）刊『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に、京都の大宮通に住んでいた絵師の半兵衛は、絵所で一五年間奉公したが、奉公先の絵師の死後に入夫したところ多額の借金を抱えてしまった。しかし、版画を流行させ、三年後に寺町通に出店して多くの弟子を抱えたところから、署名がある最初の作品が刊行された延宝九年（一六八一年）には四〇歳頃、最後の作品が刊行された正徳二年（一七一二）年には七〇歳頃であつたと推定される。

(106) 江戸時代中期頃写「雲堆雜著」（国立国会図書館蔵）「白慧法師墓誌」に、「洛陽の書賈仲邨富平・画工吉田孝賢」が「多年法師（筆者注：江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼のこと）の顧盼を獲」たので、江戸時代中期の僧である玄璠に墓誌の撰文を依頼したことが記されており、享保四年（一七一九年）の奥書がある。

(107) 『女書翰初学抄』の改題本である、元禄十一年（一六九八年）刊『女用文章綱目』（苗村丈伯）作と、元禄十二年（一六九九年）刊『増益女教文章』（苗村丈伯）作では、「我先の書にいひたる」とく女性の」という部分が削除されている。

(108) 石川透「奈良絵本・絵巻の研究と収集5——居初つな筆本の絵画——『日本古書通信』第一〇八七号（二二頁）に、「奈良絵本・絵巻には年号は記されないの、一概には言えないが、その活躍期は延宝・貞享・元禄前半期であることが分かる。」とある。

(109) 石川透『奈良絵本・絵巻の展開』（四一頁）に画像が紹介されている。

(110) この作品に吉田半兵衛画であるという署名はないが、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯の作品は、挿絵が全て同じ画風であるという特徴があり、それらは、吉田半兵衛の画風と類似してい

る。

(111) これらの絵は、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』（吉田半兵衛画）第三巻第一七図の、画面右を向いて立っている女性や、第二一図の、顔は画面右下を向き、身体は画面左に向けて、右手で着物の裾を掴み上げ、左手は下げており、左足を少し後ろに出している傾国の絵とも類似しているの、居初つなは、吉田半兵衛の絵を参考にしていたと考えられる。

(112) 現在確認されている、吉田半兵衛の署名がある作品は八作品である。詳しくは、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学藝文学会二〇一八年十二月）を参照。

(113) 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第四巻（岩波書店一九八四年）「苗村丈伯」項では、苗村丈伯と苗村松軒は別人と考えられているが、両者の作品の本文の比較により、同一人物であると考えられる。詳細は、拙稿「苗村丈伯の著作について」『三田國文』第六七号（三田國文の会二〇二二年十二月）を参照。

(114) 「往来物俱樂部 新発見の往来物」

（http://www.bekkoame.ne.jp/hata_rsinhaken_index.htm）を参照。

(115) 『女筆琵琶海辺』の改題本である、延享四年（一七四七年）刊『女文章都織』は、『女筆琵琶海辺』の口絵・目録・刊記を削除して、新しい口絵・付録・挿絵・刊記を追加した内容だが、その刊記に「画工寺井重信図」とあり、『女筆琵琶海辺』の口絵と画風が類似している。

(116) 小泉吉永「居初津奈の女用文章」『江戸期おんな考』第八号（桂文庫一九九七年九月五九頁）には、『女書翰初学抄』の語注について、『下学集』のような典拠の紹介は女子用往来では特異である。」とある。

(117) 小泉吉永「居初津奈の女用文章」『江戸期おんな考』第八号、小泉吉永『往来物解題辞典』解題編（大空社二〇〇一年）などによ

ると、『女書翰初学抄』の改題本は、元禄一〇年（一六九七年）刊『女万用集』、元禄一一年（一六九八年）刊『女用文章綱目』、元禄一二年（一六九九年）刊『増益女教文章』、享保六年（一七二一年）刊『女文庫高時絵』、元文三年（一七三八年）刊『女文林宝袋』、宝暦五年（一七五五年）刊『女通用文袋』の六作品である。

(118) 私見では、『女用文章綱目』と『増益女教文章』は、元禄一〇年（一六九七年）刊の『伊勢物語大成』（苗村松軒編）などの作品と筆跡が類似している。

(119) ちなみに、元禄一一年（一六九八年）刊『女用文章綱目』下巻一丁「女諸芸の事并多抄・同じが物語」は、元禄五年（一六九二年）刊『女重宝記』（苗村丈伯作）第一巻第四話「女しが物がたりならびに諸げいの事」からの抄出である。このことから、『女文章綱目』は、苗村丈伯作であると考えられる。

(120) 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系22』江戸初期の庭9（社会思想社 一九七三年 二一三―二一四頁）に翻刻が掲載されている。

(121) 江戸時代後期頃写『日本医譜』第三巻「苗村介洞」項に、「六如和尚ハコノ道益ノ孫也」とある。

(122) 小林忠『肉筆浮世絵大観』第九巻 奈良県立美術館・京都府立総合資料館（講談社 一九九六年）に画像が紹介されている。

(123) 中村幸彦・日野竜夫『新編稀書複製会叢書』第三五巻（臨川書店 一九九一年）に影印が紹介されている。

(124) 宝永六年（一七〇九年）刊『子孫大黒柱』に、「半兵衛は三年めに。寺町通へ出て。」とある。

(125) 宝永六年（一七〇九年）刊『子孫大黒柱』によると、吉田半兵衛は奉公先の絵師の死後に入夫し、継娘と三人家族であったとあるので、吉田光義は跡継ぎであっても子孫ではない可能性がある。

(126) 『女文章鑑』序は、『女書翰初学抄』序に、「それ（筆者注：『女文章鑑』のこと）もいっしか書林（筆者注：『女文章鑑』の書肆であ

る中村孫兵衛のこと）の手に渡りて梓に彫て世に行へり」とある刊行経緯や、元禄二年（一六八九年）刊『諸宗宝鑑』序（「昌陽軒叙」という署名があり、昌陽軒は中村孫兵衛の号である）などと筆跡が類似していることから、中村孫兵衛書である可能性がある。

(127) 貞享三年（一六八六年）刊『好色訓蒙図彙』刊記に「花洛銅駝坊 三右衛門・高辻 昌陽軒 開板」とあり、昌陽軒は中村孫兵衛の号である。

(128) 宝永七年（一七一〇年）刊『辨疑書目録』（中村孫兵衛作）は、序に「中村富平謹書」とあり、刊記に「洛陽高辻通雁金町 中村孫兵衛 寿梓」とある。

(129) 吉田孝賢が吉田半兵衛の実名であるということについては、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号で考察している。

(130) 宝永六年（一七〇九年）刊『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に、「（吉田半兵衛が、奉公先の絵師の死後に婿入りした）後家親元近江の在所より。式人扶持の合力。皆あとかたもなきいっはり。」とある。

第六章 坂内直頼の著作について

一、はじめに

坂内直頼は、正保三年（一六四六年）～享保二年（一七一七年）の京都の作家である。号は山雲子など。作品中では、何の何氏・洛下の野人・弾松軒・葉山之隠士などの号を用いている。法名は白慧。寛永十九年（一六四二年）～元禄六年（一六九三年）の大坂の作家である井原西鶴とは同世代であり、貞享三年（一六八六年）刊の、『訓蒙図彙』を模倣し、当時の好色風俗について挿絵入りで解説した浮世草子である『好色訓蒙図彙』などの様々なジャンルの作品を著したが、後述するように、作品の署名に匿名を用いることが多かった。近年まで、好色本を著していた業績などが知られていなかった。

また、坂内直頼は、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二二号（人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部二〇〇〇年九月）によると、江戸時代中期頃写の、延宝四年（一六七六年）～寛延四年（一七五一年）の京都円光寺の五世住職である玄璠⁽¹³³⁾の漢文集である「雲堆雜著」の「白慧法師墓誌」に、「洛陽の書賈仲邨富平⁽¹³⁴⁾・画工吉田孝賢⁽¹³⁵⁾」が「多年法師（筆者注…坂内直頼のこと）の顧盼を獲」たので、坂内直頼の墓誌の撰文を玄璠に依頼したことが記されており、江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛や、江戸時代前期の京都の絵師であ

る吉田半兵衛と関係が深かったことがわかる⁽¹³⁶⁾。そのうち、吉田半兵衛は、『好色訓蒙図彙』などに署名があることからその名が知られており⁽¹³⁷⁾、貞享三年（一六八六年）刊の『好色五人女』『好色一代女』、貞享四年（一六八七年）刊の『男色大鑑』などの、井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている人物である⁽¹³⁸⁾。吉田半兵衛については、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学藝文学会二〇一八年十二月）に詳しく述べている。

坂内直頼についての主な先行研究は、以下の通りである。坂内直頼の墓誌と墓所を紹介し、その経歴と作品について考察した、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二二号、貞享三年（一六八六年）刊の『好色訓蒙図彙』、貞享四年（一六八七年）刊の『好色貝合』、貞享五年（一六八八年）刊の『人倫系屑』などが、新たに坂内直頼作であることを、筆跡によって明らかにした、塩村耕氏の「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』第九六三号（日本古書通信二〇〇九年一〇月）、延宝九年（一六八一年）刊の遊女評判記である『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』の三作品が、新たに坂内直頼作であることを、本文の内容や他の作品との署名の類似によって明らかにした、陳羿秀氏の「山雲子と遊女評判記」『人間文化創成科学論叢』第一六号（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科二〇一三年三月）、延宝九年（一六八一年）刊の『名女情比』、天和二年（一六八二年）刊の『好色袖鑑』、貞享四年（一六八七年）刊の『男色十寸鏡』の三作品が、新たに坂内直頼作であることを、署名の類似・作品の構成・本文中の表現・他作品からの引用部分などによって明らかにした、陳羿秀氏の「山雲子の著作について」『近世文藝』第九九号（日

本近世文学会二〇一四年一月)、『名女情比』『好色袖鑑』と、天和三年(一六八三年)刊の『和歌詞林抄』が、作者の「情」に関する考えや本文中の表現の類似により、三部作であると指摘した、陳翠秀氏の『和歌詞林抄』と『名女情比』『好色袖鑑』三作に見られる山雲子の「情」論を中心に、『国文』第二二三号(お茶の水女子大学国語国文学会二〇一五年七月)などである。しかし、筆者の調査の結果、先行研究で指摘されている以外にも、坂内直頼の作品はまだ存在すると考えられる。そこで、本稿では、坂内直頼の経歴と作品について整理し、坂内直頼作であると考えられるものを新たに三作品指摘したい。

二、坂内直頼の経歴

まず、坂内直頼の経歴を整理する。坂内直頼の経歴については、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号で詳しく考察されているが、坂内直頼の経歴について記されている同時代の主な資料は、以下の二点である。

まず一点目は、正徳元年(一七一一年)刊の、京都の名所旧跡を調査した地誌である『山州名蹟志』の後叙である。以下にその部分を引用する。

山州名跡志僧白慧之所撰也。慧字雪庭又号如是相。山雲子。姓坂内代々以武芸鳴矣。慧亦在人家時繼其箕裘之業。一。壮歳来洛下一寓棲数十年。于茲篤婦依於仏乗喪母後遂為僧。曾愛山州風土之秀。足迹遍二州。其言曰雖二人

之相去數百歳。有若下因其詞想其風。因其境想其人。杖履並遊几案親接相与言上者古人遺名之地乎。故到处問二塔廟興廢水石旧名無不能為言者。言レ之往往襲繆失。今而歎二図誌之不詳。何況後世湮泐蕪没而恐二人之無レ知焉。於是因下国史所載前人所詠。神仏家之所レ記。雖二深岩幽谷躬自親到。遂得二窮探極觀。一水一石無レ遺者。一。成レ書無慮二十二卷。以二余相識之久。而知二撰述之勤。故称歎以為此語。披レ卷而欣然以謂。大凡一州之地八郡之境。雖二尔屋丁橋一詳レ難二其審。雖二祈寒隆暑一不レ憚二其遠。且村落広狭。山川勝状。与二逸人達士風騷。墨客之遺趾。碑刻歌什。好事之人。豈レ不レ嘉レ之哉。此地皇都千歳。而山林郊野。為二仏氏一所レ盧惟夥。然論二古昔広大壯麗之興建於今日。則何啻存二十一於千百一而已哉。他日難染之徒。見二此書一披二荒艸一。訪二遺塵一有再繼二興修之志一是亦因二樵子徑一。到二葛洪家一之類乎。因叙

于時

宝永初元鴻賓月中

丹水奇岩之隱士 碩星題

碩星之印

二点目は、江戸時代中期頃写の「雲堆雜著」の「白慧法師墓誌」である。以下にその部分を引用する。

法師名白慧字雪庭別号如是相又称山雲子釋其世系則往昔有伊勢守坂内直清者法師曾祖也仕太閤豐臣公恩遇尤渥祖直親称与五右衛門適雲州仕堀尾家食禄六百石父某称久右衛門以善騎射之術著名于時雲主一變而後居于但之出石娶某氏生法師々々少年在家与父適備之前州仕少将光政父歿後雖紹其業有故一旦辞禄而游洛陽事母孝恒恐違其意惟有出塵之志不肯娶妻喪母後益皈仏乘遂抵伏見投于求厭上人室薙染修浄土專念之宗寓棲于洛之西山無住禪師之旧廬暮齡又往伏見僑居欣浄寺蓋追慕其師遺蹤也法師天性剛直雖処貧窶固無艱色非義施糸髮不取其潔也如冰壺玉鑑纖塵不汚居常閱本朝旧史愛古人嘯傲烟霞之趣有尚友千載之意一時拊髀嘆曰此山城州河山景象冠於天下從 延曆帝定万世之皇都諸民輻湊永沐 至化至若神廟仏刹前後相接先哲奇蹤異跡藪布乎其間古來雖有所紀述未嘗無脱漏間其来由則差舛尚多是為慊耳於是欲窮尽其鉅細裏糧躡屨一州之間靡不備歷一々操觚編次参考旧記興廢併舉初不借侘人之手既涉二十余寒暑其劳可知矣編成曰山州名跡志志子祭酒林信篤為之序今盛行于世矣外所著書說法要歌集鈔諸社一覽護国編三国往生伝九相詩諺解官職書鈔連歌指南之類余不尽載其書多不拘文藻唯用国諺雖然条理明白不可無功于世矣石川備之中州刺史鎮城南聞法師之風相迎聆清言則纚然如貫珠刺史嘉嘆不已自時厥后接待猶篤不幾日染微恙遂不起享保二年乙酉六月十八日寂享年七十二欣浄主席某瘞遺骸於寺之傍粵洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼不堪攀慕今夏来山中請余曰勒行実於石可以垂之不朽余知法師最久故每想瞻昔盡然有所感且古人曰有善而不聞於来世後死者之責也因徇其請不敢辞乃歷序其所識而

繫之以銘曰

維山雲子 志氣堅剛 青山不變
白雲飛颺 塵滓之外 逍遙徜徉
毘嵐攪動 幻夢一場 令名千載
薦此石章

享保四年歲舍己亥六月日四明西麓沙門

某書

以上の資料などから考えられる、坂内直頼の経歴は以下の通りである。坂内直頼は、字は雪庭。号は山雲子・如是相。法名は白慧。坂内家は、代々武芸に優れた家であつたとされ、室町時代に伊勢守であつた北畠家の一族のことであるとも考えられる^{〔註〕}。曾祖父は、豊臣秀吉に仕えた伊勢守の坂内直清（伝未詳）である。祖父は、北畠家が滅んだ後に、出雲国（現在の島根県）に行き、関ヶ原の戦いにおける功績により松江藩主になつた堀尾家に仕えた坂内直親（与五右衛門）（伝未詳）^{〔註〕}である。父は、騎射の名手であつた坂内久右衛門（伝未詳）で、寛永一〇年（一六三三年）に堀尾家が断絶してから、但馬国（現在の兵庫県）の出石藩に住み^{〔註〕}、妻帯して、正保三年（一六四六年）に直頼が生まれた。直頼が幼少の頃に備前国（現在の岡山県）に行き、岡山藩主である池田光政に仕えた。慶安五年（一六五二年）頃に父が没し^{〔註〕}、家業を継いだが、故あつて致仕し^{〔註〕}、壮年の頃（延宝二年（一六七四年）頃か）に上京した^{〔註〕}。若い頃から仏教に帰依して出家願望があり、妻帯しなかつた。母によく孝行し、母の死を契機として、元禄元年（一六八八年）以前に、江戸時代前期の江戸の僧であり、当時は京都の伏見に住ん

でいた求厭こゝろのもとに行く。元禄四年（一六九一年）以降は、葉山之隠士という号を用いていることから、円光寺がある京都の一乗寺葉山に住んでいたと考えられること。また元禄七年（一六九四年）以降は、（または元禄四年（一六九一年）以降は、「竹の葉山」と呼ばれる京都の伏見にある深草に住んだこと。元禄末年頃に出家しこと、浄土宗に帰依すると、元禄一五年（一七〇二年）以降は、京都の西にある、鎌倉時代後期の僧である無住の旧庵（神護寺の迎接院か）や、伏見にある欣浄寺に住んだ。生活は貧しかったが、性格は剛直かつ高潔であり、多様なジャンルの作品を著した。晩年に、江戸時代前期の京都の旗本である石川総乗しゅうじょうの知遇を得たが、わずか数日後に病気になり、享保二年（一七一七年）六月一八日に七二歳で没した。墓は欣浄寺にある。

三、坂内直頼の作品

次に、坂内直頼の作品についてである。現在、作品中に署名があったり、先行研究によって坂内直頼作であることが明らかにされたりしている作品は、延宝二年（一六七四年）刊『伊勢物語抄』『山城四季物語』、延宝八年（一六八〇年）刊『軽口大わらひ』『けらわらひ』、延宝九年（一六八一年）刊『朱雀遠目鏡』『名女情比』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』、天和二年（一六八二年）刊『好色袖鑑』『書札初心抄』、天和三年（一六八三年）刊『和歌詞林抄』『歌仙金玉抄』、貞享元年（一六八四年）刊『有職袖中鈔』、貞享二年（一六八五年）刊『本朝諸社一覽』、貞享三年（一六八六年）刊『諸芸小鏡』『好色訓蒙図彙』、貞享四年（一六八七年）刊『愚迷発心集和談抄』『男色十

寸鏡』『好色貝合』、貞享五年（一六八八年）刊『人倫糸屑』、元禄二年（一六八九年）刊『浅井三代軍記』『浄土勸化往生伝』、元禄四年（一六九一年）刊『説法用歌集諺註』『肖柏千首』、元禄五年（一六九二年）刊『字鑑用文章』『善光寺縁起』、元禄七年（一六九四年）刊『九想詩諺解』『連歌世々之指南』、正徳元年（一七一一年）刊『山州名蹟志』、正徳六年（一七一六年）刊『唯信鈔註解』（「雲堆雜著」の「白慧法師墓誌」で坂内直頼作とされている『護国編』は未見）の三一作品である。なお、享和三年（一八〇三年）刊の、全国の地誌である『日本風土記』は坂内直頼作・秋里離島補であり、これを含めると三二作品である。

これらの作品を刊行年順に整理すると、坂内直頼は、元禄元年（一六八八年）以降は、好色本を著さなくなったという特徴がある。これについて、陳羿秀氏は「山雲子の著作について『近世文藝』第九号で、同年に求厭が没したことが原因であると考察されているが、『山州名蹟志』の後序に、「于^レ茲^レ篤^レ婦^レニ依^レ於^レ仏乗^ニ喪^レ母後遂^ニ為^レ僧^ト。」とあり、「雲堆雜著」の「白慧法師墓誌」に、「喪母後益^ニ皈^ニ仏乗^ニ遂^ニ抵^ニ伏見^ニ投^ニ于^ニ求厭上人室^ニ難染修浄土専念之宗」とあるように、それ以前に、母の死をきっかけとして、仏教への信仰心がますます篤くなったことも重要な原因であると考えられる。

四、坂内直頼作と考えられる新たな作品について

一つ目に、貞享四年（一六八七年）刊の、京都島原の遊女評判記である『朱雀信夫摺』についてである。先行研究では指摘されていないが、この作品は、坂内直頼が制作に関わっていた可能性が高い

と考えられる。その理由は以下の通りである。

まず、構成についてである。陳羿秀氏の「山雲子と遊女評判記」『人間文化創成科学論叢』第一六号において、坂内直頼は、延宝九年（一六八一年）刊の『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』という京都島原の遊女評判記を著していたことが明らかにされているが、このうち、『朱雀遠目鏡』『朱雀諸分鑑』とは作品名の付け方や、二巻二冊である点が共通している。また、このうち、『朱雀遠目鏡』の内題は「嶋原松梅の評判 朱雀遠目鏡」であり、京都島原の遊女を松・梅に分類してそれぞれの評判を記しているが、『朱雀信夫摺』も同じく京都島原の遊女を松・梅に分類してそれぞれの評判を記している点が共通している。

次に、署名についてである。『朱雀信夫摺』の序には「評判 好色軒・文法 南花軒」という署名があるが、これは、坂内直頼の作品における、延宝九年（一六八一年）刊の『名女情比』序の「落葉堂の好色軒に筆を綾とり侍ぬ」、天和二年（一六八二年）刊の『好色袖鑑』序の「花洛の好色堂にして何の何氏謹而書也」、貞享四年（一六八七年）刊の『好色貝合』下巻末尾の「好色菴考也」などの署名と類似している。「南花軒」という人物については不明だが、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第二版 第一〇巻（小学館 二〇〇一年）の「南花」項によると、「とり」ともめないことをいう者や変人、うそつき。また転じて、江戸初期上方の遊郭などで、愚鈍な者やうつけ者をいう。」という意味であり、後述する序の内容から、好色軒が遊女の評判を、南花軒が序と本文の文章を作成したことがわかる。

次に、内容についてである。本文は、坂内直頼の他の作品と署名

が類似している好色軒ではなく、南花軒という人物が文章を作成しているためか、坂内直頼の他の作品と類似する表現や、坂内直頼の作品の特徴である『徒然草』からの引用部分などが見られず、本文の比較だけでは、坂内直頼が関与した作品であるかは判断し難い。

しかし、『朱雀遠目鏡』の序に、「然るに此評判昔より島原集難波物語の先例にまかせて。わるざれの大匠編集して。朱雀遠目鏡と名づけり。夫遠目鏡は。遠境を引よせてみするもの也。あながらに彼地の諸わけをみるがゆえにかくは名付たり。」とあり、『朱雀信夫摺』の序に、「這書は好色軒のなにがし。先例に准じて当世女郎の品を論じていまだのぞきをくれざる衆生に是を結縁す。貞享此年の春より。諸大匠とこれを論談し。同中秋のすゑに功終れり。予にみせて。序并に書中の文体をつくらしむ。予も又好のいたす処。達人の笑を忘れて名付て朱雀信夫摺といふ是意ありがほなれど氣もなし。みちのくしのぶもぢずりたれゆへにみだれそめにしわれならなくにといふ歌のこゝろばへなり」とあるように、「いまだのぞきをくれざる」という表現が遠眼鏡を連想させることや、以下のように、『朱雀信夫摺』には、『朱雀遠目鏡』を先書として紹介する記述があることから、『朱雀信夫摺』は、『朱雀遠目鏡』の続編として著されたものであると考えられる。

『朱雀遠目鏡』上巻「金太夫」「奥州」

ながるゝ／＼枕ながるゝぬれのわけ。くびだけしつむうたかたの。あはれ恋ちの思ひだね。宛転たる御容色諸体の見事さ。女郎花の露をふくみたるがごとく。清らかなるありさまは。桜のさきみだれしにたとへてもまだ不足なり。面体いづくに難なし。

につとゑめるめもと世界の伽羅なり。さてふり出らるゝ道中のかゝり座敷つき残る所なし。御床入よし。されは月には村雲めがでくさる。花にはにくき風あり。おがくずも。いへばいはるゝとかや。何やつが此人を難じたるといの。御茶のあたりはふくらかに。饅頭をあざむくごとくなるこそよけれ。肝心の所に肉なくこけたるやうなり。是はこゝでの事。それはく。ぎやうさんしわき御人なり。又此君に似合ぬ物は。鹿子のおびに中入のおゝく入たると。びろうどの帯なり。柳をあざむく御こしに心なき藤こぶのまとへるがごとし

花の顔やそこでなげうつ金太夫

みちのくの。千引の石と我恋と。いづれくらべん思ひたねと。しばしたちより詠申に。面体難なし。とつとりはつなるゆへ。新造とはみえず。功齡へたる上らうにも。是ほどになきが侍り。猶行末や。なにしおふ。奥州おくゆかしき上らう也。又例のわるじやれめがぬかす事には。心たでほめられず。太平なりとて。よもの上臆つきあひにもしかると申候。申まではなけれど御たしなみかんやうく

おくゆかし名におふしうはつばむ花

『朱雀信夫摺』上巻「金太夫」「奥州」

面色もとより清らに座配よし。余は遠眼鏡に申かごとし。つとめ星霜積て時代遙也。年齢中につもりてもしれた事なれど。人魚を食をし御かたなれはいつも若い風あり。酒よくきこしめすゆへか近比はふとりがついて縑蟬翅をさへ噫重い事やとの給ひ

し糸萩のすがたのてづよふみゆるも波志風あり。随分無病な女郎也。御茶むかしにかはらず吉髪のかゝりよし。油拳が御好物なり難云此人にうるさきはつき物の金作と遣師の靄なり此者なくは。太夫壺人に二人分だしてあふてからが。おしいたはなし。因果な者どもの手にまします事は三界の苦患なるへし

我恋は行衛もしらずはてもなし。あふをかぎりの奥州かはす枕は秋の夜の。千夜をひと夜に准ても。いかな。あく事あらじ面体御大夫なり。むつちりと肥給ひし処。唐土殿に少分てやりたし。清らに肥あぶらづきたる脛のこゝちに候にのぞきをくれて。目くれし仙人さへあるを。まして羅綾の蒲団上にて四十四の節々に御えんをなし。四十九院の奥院様までに凡人の身として。はしたなき手をふるゝに。臘色塗の大仏餅をいらふやうなるこゝちよさ。ゆら／＼玉茎に露をそぐ。銀でならぬ事なき浮世といひながら。扱もがたしけなふ空おそろしく。手跡見事。文章意有ておくゆかし

○難に云口もと吸領には吉。口の広きいかならず分の立所がひろしといふ世話有。努々虚云にあらず。扱又先書遠目鏡にしるし侍るごとく。一文字屋の風にて此の女郎床入かはりもの也。此君の床入又になる物なし。こゝ地よい事。好が蕎麦切くふくち音にたとへてもまだ及ず。是につたて思ひだしたり。喰物に御達者にて。亭主のためかたじけなし

ちなみに、『朱雀信夫摺』上巻「奥州」の「扱又先書遠目鏡にしるし侍るごとく。一文字屋の風にて此の女郎床入かはりもの也。」という

記述は、『朱雀遠目鏡』上巻「唐土（一文字屋七郎兵衛内の遊女）」の「それゆへ一文字屋のふうにて。どの傍輩いづれも床入よの上臈にはかはり物也。」のことを指していると思われる。坂内直頼の作品で、作品内に自身の他の作品の紹介がある例としては、他に、『和歌詞林抄』の「うらなき」の「伊勢物語抄に委し」や、『好色訓蒙図彙』の上巻「妾・臥座直」の「妾は風俗鑑にかきたればくどし」などがあり、ここで紹介されている『伊勢物語抄』『都風俗鑑』は、いずれも坂内直頼の作品である。

次に、筆跡についてである。『朱雀信夫摺』の附録には「好色軒述也」という署名があるが、この部分の筆跡は、坂内直頼の他の作品の筆跡と類似している。

次に、挿絵についてである。現在、坂内直頼作であると考えられている三二作品中一三作品に吉田半兵衛画であると考えられる挿絵があるが、『朱雀信夫摺』の挿絵も吉田半兵衛の画風と類似している。

このように、『朱雀信夫摺』は、本文の文章こそ別人によつて作成されているものの、先行研究で坂内直頼作であることが明らかにされた『朱雀遠目鏡』の続編であると考えられ、坂内直頼の他の作品との類似点があるので、坂内直頼が制作に関わっていた可能性が高いと考えられるのである。

二つ目に、貞享五年（一六八八年）刊の、『清明通変占』を模倣し、安倍晴明作の算盤占を好色的な内容にした浮世草子である『好色通変占』についてである。『好色通変占』は、西鶴学会近世文芸資料第一〇『好色物草子集』（古典文庫 一九六八年）に翻刻が掲載されており、同書に翻刻が掲載されている『好色訓蒙図彙』『人倫糸屑』などとの類似から、それらと同一人物（吉田半兵衛）作である可能

性が同書で指摘されていた。しかし、先行研究において、『好色訓蒙図彙』『人倫糸屑』が坂内直頼作であると明らかにされたように、『好色通変占』も、坂内直頼作であると考えられる。その理由は以下の通りである。

まず、構成についてである。元禄五年（一六九二年）刊の『書籍目録』によると、『好色通変占』は三巻三冊であるが（現存するのは二巻二冊である）、同じく元禄五年（一六九二年）刊の『書籍目録』によると、坂内直頼作であり、後述するように『好色通変占』との類似点が見られる『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』も三巻三冊である（このうち、『人倫糸屑』は現存するのは二巻二冊である）。次に、署名についてである。陳羿秀氏の「山雲子の著作について」

『近世文藝』第九九号では、坂内直頼の作品には、「何之何氏」「洛下の野人」などの署名が用いられていることが指摘されているが、『好色通変占』は、序に「自書」とあるのみで署名がない。しかし、『好色通変占』が刊行された貞享五年・元禄元年（一六八八年）頃は、坂内直頼が、母の死をきっかけとして仏教への信仰心がますます篤くなった時期と重なるので、好色本にたとえ匿名であっても署名をすることが憚られるような、何らかの事情があつたのではないか。

次に、内容についてである。『好色通変占』の序には、「さらばかれに改名せんとて浮上瓢と筆をとりて好色通変と云事萌侍る」という記述があるが、『好色訓蒙図彙』の序にも、「むかしや昔第一昔。天と成地とわかれしとき。其真中に浮上瓢と萌たる物ありて」という記述があり、表現が類似している。また、陳羿秀氏の「山雲子と遊女評判記」「人間文化創成科学論叢」第一六号では、坂内直頼の作

品の本文中には、遊興で金銭を使い果たした者を、死んだ鯰が浮き上がってぬめりを失うことにとえていう「あがりなまず」という語が用いられていることが指摘されており、『朱雀遠目鏡』と『都風俗鑑』が坂内直頼作であるとする根拠の一つになっている。例えば、『朱雀遠目鏡』序の「ちら／＼としてあがり鯰になる事は。是大きなはまりさうなり。」や、『都風俗鑑』巻一第四話「月なるかひての事」の「かのわかうきげんに乗じてかれらが馬鹿めんぎんをうれしがりてめつたとつかひすてゝ程なくあがり鯰と成なり。」や、『好色貝合』中巻「挙鯰」や、『人倫糸屑』「大気者」の「ほとなくあがり鯰になつてのける」などであるが、『好色通変占』下巻にも、「大臣金性 沢山の金也」の「太夫と出るとあがりなまず」となる、「大臣土性 古壁の土也」の「それにふはとのつておよがるゝは、あがりなまずの地下なり」という記述がある。その他にも、坂内直頼の作品と『好色通変占』には、内容の類似がある。例えば、『人倫糸屑』上巻「小気者」の「井の内の蛙が心に此水ほどひろくとした所なしと思へばこそ住はすれ」は、『好色通変占』序の「少人笑ひて井のうちの蛙大海をしらすと云」と類似しており、『朱雀遠目鏡』上巻「唐土」「いかなるむめき成大臣も。一服でころり山持みそ。」や、『好色訓蒙図彙』中巻「大姪」の「みるがうちに親父殿ころり山升みそ」や、『人倫糸屑』下巻「徒女」の「さしも強い親仁さへもいつの間にかほうげたをゆがませ。ころり山升みそと。」は、『好色通変占』上巻「濡者」の「やほてんみるよりころりさんせうみそ恋になるなり」と類似しており、『都風俗鑑』第三巻「僧俗野郎にうちこむ事」の「男に男の恋慕は石部金吉かたまじはりなり。」や、『人倫糸屑』下巻「片意地」の「生得の石部金吉。」は、『好色通変占』上巻「妾者」

の「いしべきんきちかたし」と類似している。さらに、陳羿秀氏の「山雲子の著作について」『近世文藝』第九号では、坂内直頼は、作品中に、『徒然草』の本文をよく引用することが指摘されている。例えば、『徒然草』第三段の、「親のいさめ、世のそしりをつつむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。」という記述が、『名女情比』序の「親の諫世のそしりをふせぐに心のいとまなく。おうさきるさに思ひみだれ。あるはあはぬつらさをかこちては。ひとりねがちなる」や、『都風俗鑑』第三巻第四話「女小娘并若後家若比丘尼野郎に心をうかす事」の「親のみるめあるじのすきまをかぞふるに心のいとまなく」「おふさきるさに思ひみだれたり」、第四巻第三話「京よりしもく丁通ひの事」の「親のいさめ世の目をしのごやから。」や、『好色袖鑑』下巻第二話「恋はすべきものなりすまじきものなり」の「親のいさめ世のそしり」や、『好色貝合』中巻「挙鯰」の「親のあけん他人のいさめは。」などに引用されているが、『好色通変占』下巻「大臣土性 古壁の土也」にも、「親の異見世のそしりも心にいとまなく」という記述がある。

次に、筆跡についてである。坂内直頼の作品はほぼ全て同じ筆跡だが、『好色通変占』の筆跡は、坂内直頼の他の作品の筆跡と類似している。例えば、『好色訓蒙図彙』の序における「序」「貞享」という字と、『好色通変占』の序における同字が類似している。

次に、挿絵についてである。坂内直頼作の『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』と、『好色通変占』の挿絵は、いずれも同じ意匠の枠の中に題が書かれている。また、『好色通変占』の上巻の挿絵は、以下に指摘するように、貞享三年（一六八六年）刊の『清明通変占』

（『吉田半兵衛』画）、同年刊の『好色訓蒙図彙』（吉田半兵衛画）、貞享四年（一六八七年）刊の『好色貝合』（吉田半兵衛）画）の挿絵を流用したものであることから、吉田半兵衛画であると考えられる。

『好色通変占』上巻第一図 占いをする人物の絵 『清明通変占』上巻第一図 占いをする人物の絵

『好色通変占』上巻第二図「貞女」 『好色訓蒙図彙』上巻第六図「嬖子」

『好色通変占』上巻第三図「太夫」 『好色訓蒙図彙』上巻第一〇図「天神・格子」

『好色通変占』上巻第四図「濡者」 『好色訓蒙図彙』中巻第一図「濡者科者」

『好色通変占』上巻第五図「野郎」 『好色訓蒙図彙』中巻第一〇図「野郎」

『好色通変占』上巻第六図「妾者」 『好色訓蒙図彙』上巻第七図「妾・臥座直」

『好色通変占』上巻第七図「牙婆」 不明
『好色通変占』上巻第八図「後家」 『好色貝合』上巻第六図「濡後家」

『好色通変占』上巻第九図「浮女」 『好色貝合』上巻第五図「浮女」

『好色通変占』上巻第一〇図「想娥」 『好色訓蒙図彙』上巻第一八図「想嫁・想与女・売女・夜発」（構図の類似のみ）

『好色通変占』上巻第一一図「舞子」 『好色貝合』第中巻第九図「舞子」

『好色通変占』上巻第二二図「竹釘」 『好色訓蒙図彙』上巻第一七図「比丘尼・丸女」

『好色通変占』上巻第二三図「椿女郎」 『好色訓蒙図彙』上巻第一一図「鹿恋・椿」

『好色通変占』上巻第一四図「御物」 『好色訓蒙図彙』上巻第四図「殿」

『好色通変占』上巻第一五図「大黒」 『好色貝合』上巻第九図「大黒」

『好色通変占』上巻第一六図「茶屋」 『好色訓蒙図彙』上巻第一六図「茶屋」

『好色通変占』上巻第一七図「御物師」 不明
なお、『好色通変占』の下巻の五図は新しく描かれたものだが、これらも吉田半兵衛の画風と類似している。

このように、『好色通変占』には、坂内直頼の作品との類似点が多くあるので、『好色通変占』は、坂内直頼作であると考えられる。

三つ目に、延宝九年（一六八一年）刊の、古今の情け深い女性を紹介した仮名草子である『名女情比』についてである。この『名女情比』は、先行研究において、坂内直頼作とする説と山本八左衛門作とする説の二通りが存在する。まず、陳羿秀氏の「山雲子の著作について」『近世文藝』第九九号および『和歌詞林抄』と『名女情比』『好色袖鑑』三作に見られる山雲子の「情」論を中心に『国文』第一二三号において、坂内直頼の作品との構成・署名・内容などの類似から、坂内直頼作であると考察された数年後に、マリア・L・ブーニョ氏の『名女情比』と『源氏御色遊』攷「国語と国文学」一一一九号（明治書院二〇一七年二月）において、延宝九年（一六

八一年)刊の、『名女情比』の内容を好色的に改変した浮世草子である『源氏御色遊』(跋に「物語の作者 書林やまのやつ」とある)との構成・内容の類似から、江戸時代前期の京都の書肆である山本八左衛門作であるとする反対意見が出されたのである。そこで、筆者が坂内直頼および山本八左衛門についての先行研究を詳細に再検討した結果、構成・署名・内容・筆跡などの類似から、『名女情比』が坂内直頼作であることを積極的に疑うべき理由はなかった。よって、『名女情比』は坂内直頼作であり、坂内直頼と山本八左衛門は、彼らより少し後の時代の作家である江島其磧と書肆である八文字屋自笑のように、現代というゴーストライターのような関係であったと考えられる。その理由は以下の通りである。

まず、山本八左衛門の概要について述べる。山本八左衛門は、江戸時代前期の京都の書肆であり作家である。屋号は和泉屋で、筆名は山八である。生没年などは未詳だが、延宝(元禄年間(一六七三年(一七〇四年)に活動した³⁰)。【表二】に記載した通り、医学・漢学書などを出版する傍ら、作家としては、延宝九年(一六八一年)刊『源氏御色遊』、天和二年(一六八二年)刊『恋慕水鏡』、天和三年(一六八三年)刊『風流嵯峨紅葉』、貞享四年(一六八七年)刊『野郎立役舞台大鏡』、貞享三・四年(一六八六・一六八七年)頃刊『諸国此頃好色覚帳』、元禄二年(一六八九年)刊『好色床談義』などを著している³¹。商人らしく、天和二年(一六八二年)に刊行された『好色一代男』の流行を察知して好色本を著し、よく売れたという。

マリア・L・ブーニョ氏が、『名女情比』の作者を山本八左衛門とする主な理由は、元禄二年(一六八九年)刊の、好色に関する当時

の様々な知識を記した浮世草子である『好色床談義』の山本八左衛門自序で、自身が著した本として『源氏御色遊』の名が挙げられているからである。現在、『好色床談義』の序を持つ伝本は、神谷勝弘氏旧蔵本のみであり³²、同氏によると、現在はこの本は手放しており所在不明であるとのことである。しかし、マリア・L・ブーニョ氏の『名女情比』と『源氏御色遊』攷『国語と国文学』一一一九号に、その翻刻が掲載されている。

来しかたを案ずるに予恋慕水鏡を作して八百部摺其後源氏色遊を作して序の心になひ千部すり又嵯峨紅葉を述して七百部すりちかくは旅枕和佐大八の通矢にひとし。そのうち役者大評判を作して二千部すり。又好色覚帳を述作して七百部に及べりされはさのみ臆病風もおこさぬがよし運は天にあり版行はその身の果報に有と例のもとをらぬ口にてこまがきし床談義と名付ゑりおこなふこま書は大様に絵の所に気をつけてみなんやつさ。

于時めでたき年のめでたき日 書林山の八自序

ただし、これは序の後半部分のみの翻刻であり、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店 一九八四年)の「山雲子」項(野間光辰氏解説)には、「山雲子に述作刊行の機会を提供したのは、京都の本屋山本(和泉屋)八左衛門こと山の八^(やまのやつ)であった。元禄二年(一六八九)刊の『好色床談義』の山の八自序に、「平といふ男」に頼んで『頭書いせ物語』を書かせたとあるのがそれである。ところがそれに続く五年間、彼の消息はぱったりと杜絶える。そして延宝八年に至って、『軽口大わらひ』という軽口本を

出している。これは彼の全著作から見ると突然変異のような作品で、あるいはこの期間中他にも、本屋としての山の八との関係から、「何の何氏」「洛下野人」などの匿名に隠れて、この種の戯作に従事していたのではないか。」とあり、長谷川強氏の『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（笠間書院 二〇一七年）「好色床談義」項には、「上方版の序には『頭書伊勢物語』（延宝二年）『人倫糸屑』（貞享五年）の作者が「平平」という道心者（坂内直頼）であること、「書林嘯松子（西村市郎右衛門）」や上京間もない「団水」に言及があり、また『恋慕水鏡』八〇〇部、『源氏色遊』千部、『嵯峨紅葉』七〇〇部、『旅枕』八〇〇部余、『役者大評判』二千部、『好色覚帳』七〇〇部等と、自作・自店の好色本・役者評判記の発行部数が記され興味深い。」とあるように、序の前半には、延宝二年（一六七四年）刊の、『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語抄』^{（二）}や、貞享五年（一六八八年）刊の、当時の風俗について挿絵入りで解説した浮世草子である『人倫糸屑』の作者である坂内直頼の話題が出ているのである。この「平といふ男」「平平」というのは、貞享四年（一六八七年）以前刊の、好色に関する当時の様々な知識を記し、携行することを目的とした浮世草子である『好色旅枕』序に「好色軒在原の業平自序す」、元禄二年（一六八九年）刊の『好色床談義』角書に「なり平正筆」とある人物のことであると考えられ、これを架空の人物あるいは山本八左衛門のことであるとする意見^{（三）}もあるが、野間光辰氏のように、坂内直頼のことであると考えるべきである。また、そのことから、『好色旅枕』の作者は、坂内直頼であると

考えることができる。その理由は以下の通りである。

まず、署名についてである。「好色軒在原の業平」という署名は、坂内直頼の作品における、延宝九年（一六八一年）刊の『名女情比』序の「落葉堂の好色軒に筆を縋とり侍ぬ」、天和二年（一六八二年）刊の『好色袖鑑』序の「花洛の好色堂にして何の何氏謹而書也」、貞享四年（一六八七年）刊の『好色貝合』下巻末尾の「好色菴考也」などの署名と類似している。また、坂内直頼は、『名女情比』『源氏業平恋の評判』で、光源氏よりも在原業平の方が情け深い人物であると評している。

次に、内容についてである。『好色旅枕』の序は、好色軒在原の業平による自序と書林（山本八左衛門）による笑序の二つがあり、わざわざ序を二つに分けていることから、両者が同一人物であるとは考えにくい。また、『好色旅枕』には、貞享四年（一六八七年）以前刊の京都版と、元禄八年（一六九五五年）刊の江戸版があるが、この二版は内容も挿絵も書肆も異なり^{（四）}、特に江戸版の本文に関しては、『日本古典文学大辞典』第二巻（岩波書店 一九八四年）「好色旅枕」項（吉田幸一氏解題）には、「貞享版『好色訓蒙図彙』の一部をも取り入れてある。」、山崎麓氏の、書誌書目シリーズ六『改訂日本小説書目年表』（ゆまに書房 一九七七年）には、「貞享三年版『好色訓蒙図彙』に、所々江戸の事を書き加へ、翻刻したもの。」と指摘されているように、『好色訓蒙図彙』から多くが流用されている。その一例を以下に挙げる。

『好色訓蒙図彙』中巻「濡者科者」

さて世にいふなる品ものとはいか成をかいふぞといへば風俗しやんとしたつつかず物いひすまゐおびのしやう衣装ふみのもんごんにいたるまでこまかに心をつけて為心かけたゞ打ふすとてもすがたやさしく。ひとり有とても物のすきまなどより人のかひまみん事もやとこゝろびまなく、たしなみ人の心をくむ事。見どをしの清明そのけにてやさしきを品物といふ也

『好色旅枕』（江戸版）「科物ぬれもの」

さて世にいふなる品ものとは、いか成るをかいふぞといへば、風俗しやんとしたつつかず、物いひいすまゐ、おびのしやう、衣裳、ふみのもんごんにいたるまで、こまかに心をつけて為心をかき、たゞ打ふすとても、すがたやさしく、ひとり有とても物のすきまなどより、人のかひまみん事もと、こゝろひまなく、たしなみ人の心をくむ事見どおしの清明そのけにてやさしきを品物といふ也。

また、京都版の本文にも、以下のように、坂内直頼の作品との類似点が見られる。

『男色十寸鏡』

序

- ① 日本にては弘法大師這道の御開基たり。
- ② 抑通者の大師此道を弘め給ふ事は。凡夫元本の無明いまだつ

きざれば。たとひ髪をば剃ても意はすれぬみちなれば。血氣さかりの僧下性のきざしをやはらげずんばあられじとて。末世の僧にこれを許をかれし也

- ③ 無我清浄の意気地界に帰入し。

下巻第二話「身持たしなみの事」

- ④ それと目にたゝぬやうに。うす化粧よし。めしつかひの者をも恥て。寝顔ながらみらるゝ事有べからず先早朝に手水しまひて鏡にむかひ。顔色を見口中を見て。楊枝つかひ手足の爪を見。

下巻第三話「伊達風流心得の事」

- ⑤ 伊達風俗。第一衣装の模様ちらしがたなどに分て意得有べし。下巻第一七話「万食物心得の事」

- ⑥ はしたなき若衆のくせに。大食して菓子あらし酒のみさななくひちらし。男にこはざれて。のかれぬ首尾のときに。くどきかゝられてはちや／＼とはづすなり。第一のたしなみは喰物成べし

下巻第一八話「匂ひをとむる事」

- ⑦ 夏は夕暮には。かならず髪にそらだき有べし。

『好色旅枕』「衆道ゆるしの巻 付り身持心いきの諸礼」

① 弘法大師のたまはく（中略）③ いきちのたのもしづくにてねんごろし（中略）④ 若衆たる人のたしなみはずいぶん湯をつかひとぎみがきを第一と心へうがひなどにねんを入口中のたしなみ⑦ かみかしらにもにほひをとめ⑤ 風りうをきやしやにもち少だてなるもよしさあればとてあまりだてすぎたるはいかさまにもうりものゝやうにみへてみにくきものなればよきかげんが

んよう也男とおとこの恋ぢなれば身もちのたしなみ第一なりな
にほだたいせつにおもふ若衆といへ共よくのふかきはけうのさ
めるもの也^⑥物をくふともくひすぎざるやうにたしなみ給ふべ
し又あまりくはぬも初心にみへてみにくきものなれば是もよき
かげんをはからひ給ふべしがひにねんごろをしては女道より
もおもしろく若衆をたいせつにおもふものなれとも若衆のとし
もたけむかふがみをも取る折からにはしうぢやくのねんきるゝ
により女とかはりつみあさきがゆへ出家沙門にこれを^⑦ゆるす
しかしたとひむかふかみはとり候ともたのもしづくのいきぢを
わするゝは道にあらぬひがごと成べし此道理をよく／＼がてん
しておこなひ給ふ人は衆道の達人と云物也

まず、貞享四年（一六八七年）刊の、男色の心得について記した浮
世草子である『男色十寸鏡』の序には、日本の男色は空海が始めた
こと、男色においては意気地が大切であること、僧に男色が許され
ていることなどが記されているが、『好色旅枕』傍線部①②③にも同
じ語が用いられている。また、『男色十寸鏡』の下巻は、主に若衆の
心得について記されているが、『男色十寸鏡』下巻第二話「身持たし
なみの事」に相当する内容が、『好色旅枕』の傍線部④に、『男色十
寸鏡』下巻第三話「伊達風流心得の事」に相当する内容が、『好色旅
枕』の傍線部⑤に、『男色十寸鏡』下巻第一七話「万食物心得の事」
に相当する内容が、『好色旅枕』の傍線部⑥に、『男色十寸鏡』下巻
第一八話「匂ひをとむる事」に相当する内容が、『好色旅枕』の傍線
部⑦に記されている。また、坂内直頼の作品の特徴である、『徒然草』
からの引用があるか確認したところ、『好色旅枕』の序に、「つれ／

ゝなるまゝに日くらしすぢりにむかひ心にうつりゆく好色の一大事
伝授」という記述があった。

次に、筆跡についてである。『好色旅枕』の筆跡は、坂内直頼の他
の作品の筆跡と類似している。

次に、挿絵についてである。『好色旅枕』「なりひら五法の大事」
「なり平八ケのみだれ」の挿絵は、『好色訓蒙図彙』の扉と同じ意匠
の枠の中に題が書かれており、『好色訓蒙図彙』と同じく吉田半兵衛
に似た画風である。また、現在、坂内直頼作であると考えられている
三二作品中一三作品に吉田半兵衛画であると考えられる挿絵があり、
表に記載した山本八左衛門の出版物一四作品中七作品に吉田半
兵衛画と考えられる挿絵がある（そのうち、山本八左衛門作と考え
られる六作品には全て吉田半兵衛画と考えられる挿絵がある）など、
両者とも吉田半兵衛と関係が深かったという共通点がある。吉田半
兵衛は好色本の絵師として有名だったが^⑧、吉田半兵衛の全作品
を概観すると、好色本においては、特に、『好色訓蒙図彙』や、『好
色旅枕』などの山本八左衛門の出版物が代表作であったと考えられ
る。吉田半兵衛が、坂内直頼の墓誌の撰文を依頼したほど両者の関
係が深かったということは、『好色訓蒙図彙』以外にも、『好色旅枕』
などの作品によって、坂内直頼と関係があったと考えた方がより自
然である。

次に、書肆についてである。『好色旅枕』は山本八左衛門板だが、
もし『好色旅枕』が坂内直頼作ではないと考えた場合、坂内直頼の
作品で、山本八左衛門の一族の書肆で刊行されたのは、延宝二年（一
六七四年）刊の『伊勢物語抄』（山本七郎兵衛板）のみであり、山本
八左衛門の書肆で刊行された作品で、坂内直頼作である作品は一つ

もないことになってしまう。このことから、『好色旅枕』は坂内直頼作であると考えた方がより自然である。

このように、『好色旅枕』には、坂内直頼の作品との類似点が複数あるので、『好色旅枕』は、坂内直頼作の可能性があるのである。特に、『好色旅枕』の江戸版が、『好色訓蒙図彙』の内容を多く流用したものであることは、注目すべきだろう。江戸版の書肆が、『好色旅枕』の内容を改変する際に、全く異なる作家の作品を組み合わせたとは考えにくく、『好色旅枕』が、『好色訓蒙図彙』と同一人物作であると知っていた上で改変が行われたのではないか。少なくとも、坂内直頼と山本八左衛門に何らかの関係があったことは疑いないだろう。

話を『名女情比』に戻すと、坂内直頼は、作品の署名に匿名を用いることが多かったので、先行研究において、署名の比較により作者の類推がされてきたという経緯がある。もし、『名女情比』が坂内直頼作ではなく山本八左衛門作であると考えた場合、『落葉堂の好色軒に筆を綾とり侍ぬ』と署名が類似している作品、さらには、現在、坂内直頼作であるとされているほとんどの作品が、山本八左衛門作であるということになってしまうという問題点がある。

今後、坂内直頼の作品と山本八左衛門の作品の内容についてのより詳細な比較が必要だが、以上の考察により、『名女情比』と『源氏御色遊』の構成・内容の類似だけで、『名女情比』を山本八左衛門作であるとするには首肯できず、『源氏御色遊』は、坂内直頼作である『名女情比』の内容を、彼と関係の深い書肆である山本八左衛門が、より商業的に売れるようにより好色的に改変し、自身の作であると主張したものであると考える方が妥当ではないか。

ちなみに、前述のように、坂内直頼は元禄元年（一六八八年）頃に好色本を著さなくなったという特徴があるが、その影響からか、元禄元年（一六八八年）頃から、山本八左衛門が刊行する本は少なくなり、その跡継ぎであると考えられる和泉屋三郎兵衛が中心的に活動するようになっていく。

五、おわりに

最後に、改めて本稿の結論を述べると、以下の通りである。一つ目に、貞享四年（一六八七年）刊の『朱雀信夫摺』は、坂内直頼の他の作品との構成・署名・筆跡・挿絵の類似や、本文中に、坂内直頼作である『朱雀遠目鏡』についての記述があることなどから、坂内直頼が制作に関わった可能性が高いと考えられる。二つ目に、貞享五年（一六八八年）刊の『好色通変占』は、作品中に署名はないものの、坂内直頼の他の作品との構成・署名・内容・筆跡・挿絵の類似から、坂内直頼作であると考えられる。三つ目に、延宝九年（一六八一年）刊の『名女情比』は、先行研究において、坂内直頼作とする説と山本八左衛門作とする説の二通りが存在するが、『名女情比』と構成・内容が類似する『源氏御色遊』は、山本八左衛門が、坂内直頼作である『名女情比』の内容を好色的に改変したものであると考えられるので、坂内直頼作であると考えられる方が妥当である。よって、現在、坂内直頼作であると考えられる作品は、【表一】に記載した通り、三四作品である。

今後も、江戸時代の作家および絵師について、より具体的に明らかにしていきたい。

【表一】坂内直頼の作品一覧表（太字は坂内直頼の署名がある作品）

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
延宝二年（一六七四年）	五月	『伊勢物語抄』	注釈	序「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作せる所なり」	不明	書林堂 大坂御堂前 雛屋六兵衛・京 両替や半兵衛・京 山本七郎兵衛
延宝二年（一六七四年）	九月	『山城四季物語』	年中行事	序「坂内氏山雲子みづから序」	〔吉田半兵衛〕画	書林 本間長兵衛・大角八郎兵衛 開板
延宝八年（一六八〇年）	一月	『軽口大わらひ』	咄本	序「何の何氏 山雲子記」	不明	書林 小林久左衛門・大角八郎兵衛
延宝八年（一六八〇年）	不明	『けらわらひ』	咄本	序「山雲子」	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
延宝九年（一六八一年）	一月	『朱雀遠目鏡』	評判記	署名なし	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
延宝九年（一六八一年）	一月	『名女情比』	仮名草子	序「落葉堂の好色軒に筆を綾とり侍ぬ」	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書林 瀬尾源兵衛・本田次兵衛 開板
延宝九年（一六八一年）	三月	『都風俗鑑』	評判記	序「花洛の遊民何之何氏拙者書」	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
延宝九年（一六八一年）	四月	『朱雀諸分鑑』	評判記	跋「朱雀野人書」	〔吉田半兵衛〕画	万屋庄兵衛・丸屋源兵衛
天和二年（一六八二年）	二月	『好色袖鑑』	浮世草子	序「花洛の好色堂にして何の何氏謹而書也」	〔吉田半兵衛〕画	丸屋源兵衛 開板

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
天和二年（一六八二年）	九月	『書札初心抄』	往来物	序「洛之散人」山雲子撰	不明	丸屋源兵衛板行
天和三年（一六八三年）	一月	『和歌詞林抄』	和歌	序「洛陽散人」坂内氏山雲子集	不明	江戸本町三丁目 西村源六・京堀川錦上ル町 西村市郎右衛門梓
天和三年（一六八三年）	五月	『歌仙金玉抄』	注釈	大意「洛陽散人」山雲子謹書	〔吉田半兵衛〕画	金屋半右衛門 板行
貞享元年（一六八四年）	八月	『有職袖中鈔』	有職故実	序「洛下散人」山雲子（印）	挿絵なし	皇都 小佐治半左右衛門・小佐治半右衛門 板
貞享二年（一六八五年）	八月	『本朝諸社一覽』	神社	跋「坂内氏直頼謹撰」「坂内氏（印）」「山雲子（印）」	不明	帝都堀川通本國寺前 小佐治半衛門・江府新革屋両替町 西村半兵衛 板行
貞享三年（一六八六年）	二月	『諸芸小鏡』	諸芸	序「洛下之隠士」彈松軒、跋「洛下野人」彈松軒撰	不明	京 高辻通雁金町 中村孫兵衛・江戸 青物町 本屋清兵衛・大坂 心齋橋筋吳服町角 岡田三郎右兵衛 板行
貞享三年（一六八六年）	閏三月	『好色訓蒙図彙』	子 浮世草	序「洛下の野人作書」	吉田半兵衛画	花洛 銅駝坊 三右衛門・高辻 昌陽軒 開板
貞享四年（一六八七年）	二月	『愚迷癡心集和談抄』	仏教	序「隠士」彈松軒述	挿絵なし	華洛 中村孫兵衛・江府 本屋清兵衛 梓行
貞享四年（一六八七年）	七月	『男色十寸鏡』	子 浮世草	序「洛陽之野人」三夕軒好若処士述	〔吉田半兵衛〕画	〔金屋平兵衛〕

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
貞享四年（一六八七年）	九月	『好色貝合』	浮世草子	序「洛下散人何之何氏謹撰」下巻末尾「好色龍考也」	〔吉田半兵衛〕画	書林 清兵衛・三右衛門 開板
貞享四年（一六八七年）	九月	『朱雀信夫摺』	評判記	序「評判好色軒・文法南花軒」付録「好色軒述也」	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
貞享五年（一六八八年）	三月	『好色通変占』	浮世草子	序「自書」	〔吉田半兵衛〕画	京 帳屋 崑兵衛・藤屋彦三郎・江戸日本橋青物町 伏見屋兵左衛門
貞享五年（一六八八年）	四月	『人倫糸屑』	浮世草子	序「洛下之野人撰」	〔吉田半兵衛〕画	不明（伝本は上巻のみ）
元禄二年（一六八九年）	一月	『淺井三代軍記』	戦記	序「山雲子書」「山雲子（印）」	挿絵なし	江戸 富野治右衛門寿梓
元禄二年（一六八九年）	三月	『浄土勸化往生伝』	浄土	署名なし（墓誌を参照）	挿絵なし	堀川通仏光寺上ル町 中野九右兵衛・堀川通本国寺前 小佐治半右衛門・醒井通五条上ル町 杉生五郎左衛門
元禄四年（一六九一年）	四月	『説法用歌集謄註』	浄土	跋「鳳城京極六字堂萬居集山隠論山雲子坂内直頼述」「直頼（印）」	挿絵なし	洛陽 高辻通雁金町 中村孫兵衛富平・江戸大伝馬町三丁目 西村理右衛門
元禄四年（一六九一年）	十一月	『宵柏千首』	和歌	跋「葉山之隠士山雲子書」	挿絵なし	高辻通雁金町 永原屋中村孫兵衛梓
元禄五年（一六九二年）	一月	『字鑑用文章』	往来物	跋「葉山之散人弾松軒編」	未見	不明（伝本は上巻のみ）

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
元禄五年（一六九二年）	一〇月	『善光寺縁起』	寺院	序「 <u>葉山之隠士</u> 草」	不明	京御幸町通御池下ル町 菱屋孫兵衛 板
元禄七年（一六九四年）	二月	『九想詩諺解』	漢詩注 積	序「 <u>葉山之隠士</u> 山雲子著」 「坂内氏（印）」「直頼（印）」	〔吉田半兵衛〕画	洛陽錦小路通新町西入町 書林 永田調兵衛藏板
元禄七年（一六九四年）	八月	『連歌世々之指南』	連歌	序「 <u>竹葉山草</u> 夫書」	挿絵なし	京極通松原下町 山岡市兵衛板
正徳元年（七一一年）	七月	『山州名蹟志』	地誌	序「沙門白慧執筆於西山無住老禪之旧廬」 「山雲（印）」 「白慧（印）」、第一巻頭「 <u>伽林隠士</u> 如是相白慧撰」	不明	京都書肆 出雲寺和泉掾・小佐治半右衛門・中村孫兵衛・杉生五郎左衛門・小山伊兵衛・嶋村八兵衛
正徳六年（七一六年）	五月	『唯信鈔註解』	真宗	内題「増註 野釈無名子考」、跋「六字活計客書」（享保一四年刊『書籍目録』に「白慧註」とある）	未見	皇都 秋田屋五郎兵衛藏板
享和三年（一八〇三年）	八月	『日本風土記』	地誌	序「坂内直頼（後に秋里籬島が増補）」	不明	東都書林 須原屋茂兵衛 摂陽書林 上田宇兵衛・森本太助・中川玉兵衛
未見	未見	『護国編』	未見	未見（墓誌を参照）	未見	未見

【表二】山本八左衛門の出版物一覧表（太字は山本八左衛門作）

刊行年	刊行月	作品名	分類	作者	絵師	書肆
延宝四（一六七六年）	三月	『衆方規矩』	医学	永原了的	挿絵なし	書林 山本八左衛門・文台屋次良兵衛
延宝七年（一六七九年）	二月	『詩法授幼抄』	漢詩	榊原篁洲	挿絵なし	青木勝兵衛・山本八左衛門
延宝七年（一六七九年）	未見	『宗因連歌千句』	連歌	西山宗因	未見	永田長兵衛・山本八左衛門
延宝八年（一六八〇年）	一月	『仄声略韻』	漢詩	不明	挿絵なし	山本八左衛門・本屋弥兵衛 蔵版
延宝九（一六八一年）	一月	『老子経診解大成』	漢学	山本洞雲	挿絵なし	道德書堂 文台屋治郎兵衛・大和屋善兵衛・敦賀屋弥兵衛・和泉屋八左衛門
延宝九年（一六八一年）	二月	『源氏御色遊』	浮世草子	跋「物語の作者 書林やまのやつ」	吉田半兵衛画	刊記なし
天和二年（一六八二年）	一月	『恋慕水鏡』	浮世草子	第一巻冒頭「作者 山八」	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし（元禄九年刊『書籍目録大全』によると「文台や」）
天和三年（一六八三年）	二月	『風流嵯峨紅葉』	浮世草子	第一巻冒頭「作者 山八」	〔吉田半兵衛〕画	敦賀屋弥兵衛板行（元禄九年刊『書籍目録大全』によると山本八左衛門）
貞享二年（一六八五年）	九月	『衆方規矩大全』	医学	南川道竹	挿絵なし	書堂 文台屋治郎兵衛・和泉屋八左衛門

刊行年	刊行月	作品名	分類	作者	絵師	書肆
貞享四年（一六八七年）	一月	『野郎立役舞台大鏡』	役者評判記	山本八左衛門（『好色床談義』序より）	〔吉田半兵衛〕画	第一図「板本山人」、刊記「京出水通大宮西へ入町 和泉屋八左衛門 板行」
貞享五年（一六八八年）	一月	『二休咄』	浮世草子	竜耳軒	絵師不明	江戸神田新革屋町 西村半兵衛・洛陽錦小路 永田長兵衛・同出水大宮 山本八左衛門
元禄二年（一六八九年）	三月 （推定）	『好色床談義』	浮世草子	山本八左衛門（『好色床談義』序より）	〔吉田半兵衛〕画	出水通大宮西二入ル町 和泉屋三郎兵衛板行
〔貞享四年（一六八七年）以前〕 （推定）	不明	『好色旅枕』	浮世草子	序「好色軒在原の業平自序す」、なり平八ヶのみだれ 〔好色軒〕在原業平	〔吉田半兵衛〕画	「役者十六つがひの絵合」第二図「板本 山の八」
〔貞享三・四年〕	不明	『諸国此頃好色覚帳』	浮世草子	山本八左衛門（『好色床談義』序より）	〔吉田半兵衛〕画	刊記「和泉屋八左衛門 板行」

注

(132) 栗野秀穂『臨濟瑞巖山円光禪寺小史』(円光寺尼僧堂 一九三四年)を参照。

(133) 江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛。名は富平。屋号は永原屋。京都の高辻通雁金町に店を構えていたので、井上和雄『慶長以来書賈集覧』(彙文堂書店 一九一六年 六四頁)「永原屋孫兵衛」項に、「好色訓蒙図彙(貞享二(筆者注:正しくは貞享三)の奥書中に『高辻昆陽軒(筆者注:正しくは昌陽軒)』とあるは此の店の家号に非るか」とある。

(134) 江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛。この人物の名が孝賢であるということについては、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年十二月)で考察している。

(135) 【表一】に記載した通り、現在、坂内直頼作で吉田半兵衛画と考えられる挿絵のある作品は一五作品であり、坂内直頼作で中村孫兵衛の書肆で刊行された作品は六作品である。

(136) 貞享三年(一六八六年)刊『好色訓蒙図彙』の序には「無色軒 三白居士みづから序」とあり、上巻扉には「絵師 洛陽 吉田半兵衛 図」とあり、下巻扉には「図 無色軒筆」「図画 無色軒筆」とあるの
で、『好色訓蒙図彙』は吉田半兵衛序である可能性がある。

(137) 水谷不倒『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年)「吉田半兵衛」項を参照。

(138) 太田亮『姓氏家系大辞典』第二卷(姓氏家系大辞典刊行会 一九三五年 二四九七〜二四九八頁)「坂内 サカウチ」項を参照。

(139) 元禄七年(一六九四年)刊『連歌世々之指南』の序によると、江戸時代前期の京都の連歌師である里村昌琢の門人であり、別号は舎翠軒清閑であった。

(140) 当時の出石藩主であった小出吉英に仕えたか。

(141) 藤井駿『池田光政日記』(国書刊行会 一九八三年 一七七頁)

慶安五年(一六五二年)一〇月三日条に、「一松田寛右衛門跡、又之丞二無相違申付、一坂内久右衛門跡、善右衛門(筆者注:善兵衛の誤りか)二百五十石上ル、一大所助右衛門跡、加増ハ召上ル、」とある。

(142) 『池田家履歴略記』上巻(日本文教出版 一九六三年 二九七頁)の「寛文二年(一六六二年)壬寅 放坂内久右エ門」項に、「中小性坂内久右エ門か親善兵衛と云者出奔しけれども此旨早々家老にも申さず遅滞しければ八月十四日久右エ門を改易し給ふ是一家に養育しなから立退をも知らず疎略の至り其上其旨を家老にも申さず所在をも尋ねず打捨置けるゆへ御とかめありしなり 按るに今の善兵衛父なから故有りて久右エ門に養はれ居りしにや但し詳ならねとも今の世を以ておしはかるにあるましき事なり」とあり、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号によると、この善兵衛は直頼の養父であり、久右衛門は、実父と同じ名を名乗った直頼のことである。

(143) 延宝二年(一六七四年)刊『山城四季物語』の跋に、「山雲は大和の学に心をけりその考学のひま／＼山城国にとしのうちに行める諺の由来を集しるして十の余ふた巻となし四季にわかれて四季物がたりと号せり」とある。また、天和三年(一六八三年)刊『和歌詞林抄』の序に「洛陽大炊御門を下さまになかるゝ京極川の辺に賤水くきを染てしるし侍る」とあることから、上京した当初は現在の京都府京都市中京区周辺に住んでいたか。ちなみに、正徳元年(一七一年)刊『山州名蹟志』の序にも、「予生三陋邦^{スルコトニ}。盛年^{シテ}来^ニ于洛下^ニ。棲遲久矣。」とある。

(144) 鷲尾順敬『日本仏家人名辞書』増訂版(光融館 一九一一年 三

二二頁）を参照。

(145) 元禄四年（一六九一年）刊『説法用歌集諺註』の序を書いた無底籃水は円光寺の僧であり、跋には「鳳城京極六字堂寓居葉山隠淪山雲子坂内直頼述」とあるので、この「葉山」は、円光寺がある京都の一乗寺葉山のことか。

(146) 元禄七年（一六九四年）刊『連歌世々之指南』の序に「竹葉山草夫書」とあり、正徳元年（一七一一年）刊『山州名蹟志』第一二巻に「○竹葉山在右橋西二町余一古ハ小山也。今平地トナシ。形ニス纔存（以下略）」とある。

(147) 元禄四年（一六九一年）刊『説法用歌集諺註』の序に、「于レ茲有ニ善士ニ自称ニ山雲子ニ天性甘ニ枯澹ニ形雖レ処レ俗心不異レ僧レ寄ニ身於選仏場ニ傾ニ耳於説法門ニ」とあるので、この当時はまだ出家していない。また、元禄七年（一六九四年）刊『九想詩諺解』の序に「葉山之隠士山雲子著」「坂内氏（印）」「直頼（印）」とあり、坂内氏が用いられているので、元禄七年以降に出家したか。

(148) 堀田正敦新訂『寛政重修諸家譜』第三巻（続群書類従完成会一九六四年一三頁）を参照。

(149) 鷺尾順敬『日本仏家人名辞書』増訂版（三二二頁）に、「ゲン求厭（二二四八）（生没年は皇紀による表記）とある。

(150) 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第六巻（岩波書店一九八五年）、市古貞次『国書人名辞典』第四巻（岩波書店一九九八年）、長谷川強『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』（笠間書院二〇一七年）などでは本名は弘之とされているが、刊記に「下立売通大宮西江入ル町 和泉屋弘之刊」とある『好色産毛』が刊行された当時（元禄九年（一六九六年）頃）は、跡継ぎであると考えられる長左衛門が主に活動していたので、八左衛門

の本名であるかは不明である。

(151) 元禄二年（一六八九年）以降も刊記に山本八左衛門の名が記載された作品はあるが、元禄年間以降はその跡継ぎであると考えられる和泉屋三郎衛門などが中心的に活動しているので、ここでは確実に山本八左衛門が刊行したと考えられる元禄二年以前の作品を記載している。山本八左衛門およびその跡継ぎであると考えられる三郎兵衛・長左衛門の出版物（主に好色本）では、以下のように特徴的な方法で刊行年月が表記されることがある。例えば、貞享四年（一六八七年）以前刊『好色旅枕』（山本八左衛門板）笑序「于時めでたい年のめでたい日 書林序す」、貞享年間頃刊『好色重宝記』（和泉屋三郎兵衛板）刊記「于時めでたき年のめでたき日」、元禄二年（一六八九年）刊『好色床談義』（和泉屋三郎兵衛板）序「于時めでたき年のめでたき日 書林山の八自序」、元禄三年（一六九〇年）刊『好色四季咄』（和泉屋三郎兵衛板）刊記「于時めでたい年のめでたき日」、元禄六年（一六九三年）刊『男色子鑑』（和泉屋三郎兵衛板）刊記「于時めでたき年のめでたき日」、元禄九年（一六九五年）以前刊『好色産毛』（和泉屋弘之板）「于時めでたき年の目出たき日」、元禄十一年（一六九八年）頃刊『女中野郎むすび』（和泉屋長左衛門板）刊記「于時めでたき年のめでたき月日」などである。このことから、これら三人が、延宝（元禄年間（一六七三年～一七〇四年））に和泉屋を営んでいたことが推測できる。ちなみに、元禄八年（一六九五年）刊『好色旅枕』（山本八左衛門板）および元禄十一年（一六九八年）頃刊『女中野郎むすび』（和泉屋長左衛門板）には、「床上紅葉丹」という薬の広告が掲載されており、その広告の内容から、和泉屋長左衛門は本だけでなく薬の販売も手掛けていたと考えられる。なお、『好色床談義』の扉の「好色重宝記 好色旅枕 此床談義 右の三部を引あはせみる時は好色一道におゐてくらき事なしさるによつて此三部を合て好色三部の書共名付申候」、「好色旅枕」（江戸版）の表紙見返しの「好色床談義、好色重宝記、此旅まくら、合て好色三部の書

共名付」という記述から、貞享年間頃刊『好色重宝記』を山本八左衛門作とする説があるが、『好色重宝記』中巻第一話「業平好色問答附り女の上手は物わらぬが重宝」には、『好色旅枕』は好色軒在原の業平作、『好色床談義』は好色和尚作とされており、『好色重宝記』はさらに別作者であると思われる記述がある。

(57) マリア・L・ブーニョ『名女情比』と『源氏御色遊』攷『国語と国文学』一一一九号(六四頁)にも、『源氏御色遊』同様に『好色床談義』も希少本で、特に序文を持つ本は、管見の限り、神谷勝広氏所蔵本のみである。」とある。

(58) 書肆のうちの一人が、山本八左衛門の先代であると考えられる山本七郎兵衛(名は弘貞)である。

(59) マリア・L・ブーニョ『名女情比』と『源氏御色遊』攷『国語と国文学』一一一九号の表に、「好色軒在原乃業平(山八)」とある。

(60) 高橋鉄『日本性典大鑑』(日本生活心理学会 一九五四年 五九頁)によると、刊記に「大和絵師 古山太郎兵衛・長谷川町 利兵衛 開板」とある。

(61) 貞享三・四年(一六八六・一六八七年)頃刊『諸国此頃好色覚帳』第一巻第一話「艶男は女の目の毒」には「当世ぬれ絵かきの名人お江戸のひしかわ京の吉田半兵衛も筆をなげつべし」、元禄八年(一六九五)刊『好色とし男』第二巻第一話「是は絵にかきし姿」には「菱川吉田が浮世枕絵有程ひろげて爰な男はかつかうよりもち物がちいさいの」などの記述がある。

(62) 貞享四年(一六八七年)刊『野郎立役舞台大鏡』の全一一図中九図が、『好色旅枕』「役者十六つがひの絵合」からの流用である。

(63) 采微庵主人『元禄文学資料』(二頁)によると、「故藤村作博士蔵本には元禄二年三月の刊記があると云はれる。」とある。

第七章 苗村丈伯の著作について

一、はじめに

苗村丈伯は、江戸時代前期の京都^{きょうと}の作家である。元禄五年（一六九二年）刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、辞書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・暦・医学・往来物・武家故実・年中行事などの様々な分野の作品を著した。この人物は現在ではあまり知られていないが、代表作である『女重宝記』は、その続編ともいえる、元禄六年（一六九三年）刊の、男性の教養のための辞書である『男重宝記』序に、「書林某来りて嘆美して曰余が嚮に作れる女重宝記五冊は世の重宝として梓に鏤め摺写する事いとまなし希は是に對して男重宝記を作れと」とあるように、当時よく売れ、それ以降、多くの作家によって様々な重宝記が著される契機となった¹⁾。また、苗村丈伯の特徴として、井上和雄氏の「女重宝記『浮世絵』第一六号（浮世絵社一九一六年九月）に、「彼（筆者注…苗村丈伯）の著述中の挿画のある分は、皆悉く同一の筆意である」とあるように、彼の作品の挿絵は、全て同じ絵師によって描かれたものであることが挙げられる。具体的には、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品のうち、挿絵がある作品は一六作品（挿絵がごく小型かつ少数であり絵師不明の三作品を除く）であるが、そのうち一作品に、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛の署名があり²⁾、一五作品が、私見では吉田半兵衛画である。この

ことから、苗村丈伯は、吉田半兵衛と関係の深い作家であると考えられるが、吉田半兵衛は、その他にも、江戸時代前期の作家である井原西鶴などの多くの作家と関わりがあるので、苗村丈伯についての研究は、江戸時代前期の出版界を知る上で意義のあることであるといえる。

苗村丈伯についての主な先行研究は、前半で、苗村丈伯に関する文献を紹介し、後半で、方言研究の観点から、『男重宝記』と、貞享五年（一六八八年）刊の、当時の正しい京都弁の使い方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共通点を指摘した、大田栄太郎氏の「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一九九号（明治書院一九四〇年十一月）、同じく、元禄七年（一六九四年）刊の、武士の礼儀作法について記載した故実書である『武家重宝記』などの、苗村丈伯作であると考えられる作品を複数紹介した、大田栄太郎氏の「重宝記類と苗村丈伯（道益）―武家重宝記の発見など―」『書物展望』第一一三号（書物展望社一九四〇年十一月）、寛文七年（一六六七年）刊の、和漢の有名な問答を集めた仮名草子である『理屈物語』の作者は苗村丈伯であるかと考察した、市古夏生氏の『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―『国文白百合』第六号（白百合女子大学国語国文学会一九七五年三月）などであるが、現在、苗村丈伯についての最も新しい見解が示されているのは、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第四卷（岩波書店一九八四年）「苗村丈伯」項（市古夏生氏解題）である。以下に、その部分を引用する。

苗村丈伯 なむらじ ようはく 仮名草子作者。字は三徑、号は林庵・苗斎・艸田斎（子）・寸木子（女）。径山子など。丈伯は通称。生没年未詳。

元禄七年（一六九四）に最後の著書が出版されているので、それ以後の没。【事蹟】丈伯の一族であるという宇津木昆台著『日本医譜』によれば、近江国彦根の人で、彦根藩井伊侯の侍医であったが、故あって致仕し、同国野洲郡落合村に隠栖したという。ただし彦根藩の記録による確認はできない。隠栖したというも、元禄年間は京都に住し、盛んに執筆を続けている。寛文七年（一六六七）に径山子の号で仮名草子『理屈物語』を述作刊行しているが、以後は文学性のない実用書・俗解書を専ら公けにしている。丈伯は言葉に関して特に興味を持っていて、諺やその語源について記した『籠耳』（貞享四年（一六八七）刊）や女房詞をも収めている『女重宝記』（元禄五年刊）、方言について一項を設けている『男重宝記』（元禄六年刊）があり、節用集類に『頭書大益節用集綱目』（元禄三年刊）、『世話用文章（世話字節用集）』（同五年刊）、『篆字和玉篇綱目』（同六年刊）などがある。一種の便利帳とでもいえるべき重宝記類には前記二書の外に『武家重宝記』（元禄七年刊）と『年中重宝記』（同年刊）がある。古典の俗解書としては、『徒然草絵抄』（元禄四年刊）、『伊勢物語絵抄』（同六年刊）などがあるが、本文の行間に読みくせと簡単な注を挿み込み、頭書部分に挿絵と注釈を半々に施したもので、あまり注目すべき書ではない。その絵は丈伯自ら描いている。他に医学方面では『医学正伝或問』の注釈書『正伝或問増補頭書』（天和二年（一六八二）刊）と『万病回春』の俗解書『俗解襲方集』（元禄六年序刊）、漢詩の関係では『聚分韻略』改編本（延宝四年（一六七六）刊）と『錦繡段訓解』（元禄五年刊）、手形の文例集『万案紙手形鑑』（元禄六年刊）など

がある。【付記】浮世草子『御伽人形』（宝永二年（一七〇五）刊）や『伊勢物語大成』（元禄十年刊）、『首書徒然草』（同十一年刊）を執筆している苗村松軒は、『伊勢物語』の両注釈書を比較した結果、本文の読点の打ち方や在原業平の伝記の記事に相違する点が少なからず認められるので、丈伯と別人と考える方が妥当であろう。

しかし、後述するように、苗村丈伯については、「苗村」という名字が比較的珍しいこともあり、現在、名字や号が同一または類似した複数の別人と混同されており、その経歴が正しく整理されていないという問題点がある。そこで、本稿では、苗村丈伯についての再検討を行い、その経歴と作品をより明らかにしてみたい。第二節では、苗村丈伯（三径）と径山子について、第三節では、苗村丈伯と苗村介洞について、第四節では、苗村丈伯と苗村松軒について比較し、それぞれの節で、苗村丈伯と同一人物であるかを検討する。

二、苗村丈伯（三径）と径山子

まず、苗村丈伯（号は三径）と、寛文七年（一六六七）刊の、『理屈物語』を著した径山子は同一人物かという問題についてである。『理屈物語』は、序に「径山子序」とあり、元禄五年（一六九二年）刊『書籍目録』第四巻「仮名和書」項では、「六 理屈物語 苗村丈伯作」と記されていることから、当時から、『理屈物語』の作者である径山子は、苗村丈伯のことであると考えられていたことがわかる。これについて、大田栄太郎氏の「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一一九号には、「『男重宝

記』序の)三径と云ふ名も理屈物語の径山子と関係のものではないかと考へる。」とあり、市古夏生氏の『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―『国文白百合』第六号では、書目・作者像・書肆・筆跡等の検討により、苗村丈伯のことであるとしている。一方で、鈴木行三氏の『戯曲小説近世作家大観』第一卷(中文館書店 一九三三年)「艸田子(63)」項には、「諸書(63)に径山子と署名せる『理窟物語』を丈伯の作とせるは、元禄の『書籍目録』の作者附に抛りたるならんも『書籍目録』は必しも信ずべからず、径山子が丈伯の別号なるや否やも確証なし。」とあり、近世文学書誌研究会 近世文学資料類従 参考文献編9『世話用文章』(勉誠社 一九七六年)の小林祥次郎氏による解題には、「径山子」は「三径」に似ているが、別人であると考えるべきであろう。」とある。ちなみに、その理由については明記されていない。

先に紹介した先行研究の中で、市古夏生氏の『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―『国文白百合』第六号は、『理屈物語』の作者について、延宝二年(一六七四年)刊『書籍題林』第二卷「仮字和書」項では、「六 理屈物語 山本三径」とあるのに対して、『書籍目録』第四卷「仮名和書」項では、「六 理屈物語 苗村丈伯作」とあることから、山本泰順(号は三径)と苗村丈伯(号は三径)のいずれかであるという仮定に基づいて、苗村丈伯のことであると結論付けており、『理屈物語』の作者である径山子が、山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない可能性については言及されていないという問題点がある。しかし、山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない可能性についても検討するべきであると考えられるので、筆者が改めてこの問題について検討した結果、『理屈物語』の作者である径山子と苗

村丈伯は、別人である可能性があることが分かった。その理由は以下の通りである。

まず、号についてである。三径と径山子は、「径」の一字しか共通しておらず、それぞれの意味も、日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第二版 第四卷・第六卷(小学館 二〇〇一年)「三径」項には、「漢の蔣詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞれの小道に植えたという故事から)庭園内の三すじのこみち。転じて、隠者の門庭、または、住居。」とあり、「径山」項には、「中国五山の一つ。浙江省北部、杭州西方の臨安県にある天目山の東北峰。」、「山径」項には「山中のこみち。やまみち。」、「子」項には、「自分の名の下に添えて、謙遜の意を表わす。」とあるように、特に関連性はない。

次に、筆跡についてである。市古夏生氏の『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―『国文白百合』第六号では、『理屈物語』の序文は、かなり特徴のある書体である。版下は当然、作者が書いたものである。私見では、この書体は詳細にみると、丈伯作『世話用文章』(元禄五年刊、佐野九兵衛板)序文の筆跡と幾分かよっていることが認められる。」とある。苗村丈伯の作品の筆跡については別稿に譲るが、私見では、苗村丈伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっている。

次に、挿絵についてである。前述の通り、現在、苗村丈伯作であると考えられる二四作品のうち、挿絵がある一六作品は、いずれも吉田半兵衛画と考えられるが、『理屈物語』の挿絵は、私見では別人画である(註)。

次に、苗村丈伯と径山子の作品の内容についてである。現在確認

されている、径山子という号の作者が著した作品は『理屈物語』のみであるが、『理屈物語』の本文と、苗村丈伯の作品の本文を詳細に比較した結果、明らかに一致する箇所などは確認できなかった。ただし、先に引用した、『日本古典文学大辞典』第四卷「苗村丈伯」項でも指摘されているように、苗村丈伯は言葉に関して特に興味を持っていたが、『理屈物語』にも、和漢の有名な諺の語源についての話が載っているという共通点がある。しかし、これだけで『理屈物語』が苗村丈伯作であると断定することは難しい。

このことから、苗村丈伯と径山子は、別人である可能性があるといえる。

三、苗村丈伯と苗村介洞

次に、苗村丈伯と、延宝二年（一六七四年）～寛延元年（一七四八年）の近江国の医師である苗村介洞は同一人物かという問題についてである。『日本古典文学大辞典』第四卷では、苗村丈伯と苗村介洞は混同されておらず、鈴木行三氏の『戯曲小説近世作家大観』第一卷「艸田子」項でも、『諸家著述目録』『大日本人名辞書』等には、常伯を苗村介洞と混同し、常伯の歿年を寛延元年とすれど、常伯と介洞とは親戚なるが如きも全く別人にして、寛延元年に歿したるは介洞にして丈伯にあらず。介洞（せう）は近江八幡の人にして、委しくは『近世畸人伝』卷之四に出でたり。」と指摘し、さらに、同じく、鈴木行三氏の「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号（書物展望社 一九四一年一月）によって、苗村丈伯と苗村介洞が混同された経緯について、中根肅治氏の『慶長以来諸家著述目録』和学家之部（青山堂支店 一八九四年）「苗村常伯」項で、「苗村常伯（一作丈伯号介洞）とされたことが原因であると考察されているが、中根肅治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部（せう）、東京経済雑誌

社『大日本人名辞書』（東京経済雑誌社 一九一七年）（せう）、滋賀県教育会『近江人物志』（文泉堂 一九一七年）、滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八卷（蒲生郡 一九二二年）（せう）、関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』（東洋図書刊行会 一九四一年）（せう）、大田栄太郎「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一一九号、大田栄太郎「重宝記類と苗村丈伯（道益）」『武家重宝記の発見など』『書物展望』第一一三号などでは、苗村丈伯と苗村介洞が混同されている。これは、いずれも「苗村」という名字であることや、苗村丈伯は医学書を著しており、苗村介洞は医者であったことなどが原因であると考えられる。しかし、鈴木行三氏が『戯曲小説近世作家大観』第一卷および「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号で指摘している通り、苗村丈伯と苗村介洞は、別人であると考えられる。ここに改めて理由を述べると、以下の通りである。

まず、当時の文献における記述についてである。苗村介洞についての最も古い記述である、天明八年（一七八八年）刊『近世畸人伝』第四卷「苗村介洞 附 妻女」項（せう）には、苗村介洞が医師であり作家でもあったという記述はなく、文化一五年（一八一八年）写の、古今の儒学者についての伝記である『芸苑古今儒林伝』や、江戸時代後期頃写の、日本の医者についての伝記である『日本医譜』（せう）では、苗村丈伯と苗村介洞は別項で説明されており、特に、『芸苑古今儒林伝』では、第二卷「苗村丈伯」項には、

苗村丈伯 京師人師不詳

節用集頭書 三

理屈物語 六

貞永式目首書 一

俗解襲方集 八

女調法記 五

庭訓往来首書 二

正伝或問首書 三

年代記絵抄 七

絶句熟字訓解 一

とあり、第三卷「苗村介洞」項には、

苗村介洞 苗村氏名道益号介洞近江八幡人世々医ヲ業トス弱冠ノ時伊藤仁斎東涯ノ二先生ニ学ブヨク文ヲ属ス比日ノ事務ヲモ漢文ヲ以テ筆記ス性豪爽ニシテ物ニ拘泥セス旁ラ和歌ヲ好メリ寛延元年戊辰十月二十三日卒ス年七十五六如和尚ハコノ道益ノ孫也

とあるように、苗村丈伯は京都の作家、苗村介洞は近江国の医師として説明されている。

次に、没年についてである。『近世畸人伝』第四卷「苗村介洞附妻女」項には、苗村介洞の没年と当時の年齢について、「寿七十有五、寛延元年戊辰歳、十月廿三日也、」と記されている。寛延元年（一七八八年）に七五歳であったということは、延宝二年（一六七四年）（寛延元年（一七八八年）に生きた人物であると考えられる。もし、苗村丈伯と苗村介洞が同一人物であった場合には、現在確認されている、苗村丈伯の署名がある作品の中で、最も刊行年が早い作品である『聚分韻略』が刊行された延宝四年（一六七六年）には三歳であったということになるので、適切な年齢ではない。

このことから、苗村丈伯と苗村介洞は、別人であると考えられる。

四、苗村丈伯と苗村松軒

次に、苗村丈伯と、江戸時代前期の京都の作家であり、元禄一〇年（一六九七年）刊の、『伊勢物語』などの注釈書である『伊勢物語大成』元禄十一年（一六九八年）刊の、『徒然草』の注釈書で

ある『つれつれ草』宝永二年（一七〇五年）刊の、怪談を集めた浮世草子である『御伽人形』の三作品を著した苗村松軒は同一人物かという問題についてである。

『日本古典文学大辞典』第四卷「苗村丈伯」項では、先に引用したように、苗村丈伯と苗村松軒は別人であるとされているが、この二人は、同一人物であると考えられる。その理由は以下の通りである。

まず、作品名についてである。苗村丈伯の作品には、元禄五年（一六九二年）刊『女重宝記』の改題本である、宝永八年（一七一一年）刊『女重宝記大成』や、元禄六年（一六九三年）刊『男重宝記』の改題本である、江戸時代前期頃刊『男重宝記大成』がある。一方、苗村松軒の作品にも『伊勢物語大成』があり、作品名の付け方が類似している。

次に、署名についてである。『女重宝記』は、序に「艸田寸木子叙」という署名があることから苗村丈伯作とされているが、その改題本である『女重宝記大成』には、序の署名が「森林軒」という、「松軒」に類似した号に変更されている伝本¹⁾が存在する。

次に、筆跡についてである。西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベースの、江戸時代前期頃刊『廻国一夜宿』（『御伽人形』（苗村松軒作）の改題本）項によると、「版下筆蹟は苗村丈伯（艸田斎寸木子）本に類似する」とある。

次に、挿絵についてである。前述の通り、苗村丈伯の特徴として、彼の作品の挿絵は、全て吉田半兵衛画であると考えられることが挙げられるが、苗村松軒の作品の挿絵についても、いずれも吉田半兵衛画であると考えられる。具体的には、『伊勢物語大成』は、貞享二

年（一六八五年）刊の、『伊勢物語』の読み方を示した挿絵入りの注釈書である『伊勢物語絵入読曲』^{〔註〕}（刊記に「絵師 京 吉田定吉」という署名がある）と、元禄六年（一六九三年）刊の、『百人一首』の挿絵入りの注釈書である『百人一首絵抄』（刊記に「京極四条 吉田半兵衛」という署名がある）の挿絵が全て収録されていることから吉田半兵衛画であるといえ、『つれづれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半兵衛画である。

次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の構成についてである。苗村丈伯の作品には注釈書が多く、現在、苗村丈伯作と考えられる二四作品中一四作品が、本文を二段に分け、上段に注釈、下段に本文などを載せたものであるという特徴があるが、苗村松軒の作品である、『伊勢物語大成』は、本文を二段に分け、上段に『百人一首』の本文・挿絵・注釈を載せ、下段に『伊勢物語』などの本文・挿絵を載せた注釈書であり、『つれづれ草』（外題は「頭書絵抄つれづれ草」）は、本文を二段に分け、上段に『徒然草』の注釈を載せ、下段に本文・挿絵を載せた注釈書であるという点が共通している。

次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の内容についてである。『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項には、先に引用したように、「浮世草子『御伽人形』（宝永二年（一七〇五）刊）や『伊勢物語大成』（元禄十年刊）、『首書徒然草』（同十一年刊）を執筆している苗村松軒は、『伊勢物語』の両注釈書を比較した結果、本文の読点の打ち方や在原業平の伝記の記事に相違する点が少なからず認められるので、丈伯と別人と考える方が妥当であろう。」とある。この『伊勢物語』の両注釈書」というのは、元禄六年（一六九三年）刊の『伊勢物語絵抄』（苗村丈伯編）と、『伊勢物語大成』（苗村松軒編）のこ

とであると考えられる。そこで、『伊勢物語絵抄』と『伊勢物語大成』の本文の比較を行ったところ、『伊勢物語』の本文の句点の打ち方については、市古夏生氏が指摘した通りに異なっていた。例えば、『伊勢物語絵抄』における、『伊勢物語』第一段の部分（第一巻三丁オ・ウ）は、

むかし。男うみかうふりしてならの京
かすがの里にしるよしゝて。かりにい
にけり。その里にいとなまめいたる女。はら
からすみけり。此男かいまみてげり。おも
ほへず。ふる里にいとほしたなくて有ければ
心ちまどひにけり。男のきたりけるかり
ぎぬのすそをきりて。歌をかきてやる。其
男しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける
かすが野のわかむらさきのすり衣
しのぶのみだれかぎりしられず
となん。おいつきていひやりける。つゐでお
もしろきことゝもやおもひけん

みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに
みだれそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は。かくい
ちはやきみやびをなんしける

という句点の打ち方であるのに対し、『伊勢物語大成』における、『伊勢物語』第一段の部分（第一巻二丁オ・ウ）は、

むかし。男。うみかうふりして。ならの京。かす
がの里に。しるよしゝてかりにいにけり。其さとに

いとなまめいたる。女はらから。すみけり。此男。かい
まみてけり。おもほえずふるさとにいとほした
なくて有ければ。こゝちまどひにけり。男の。きた
りける。かり衣のすそをきりて。歌をかきてやる。
其男。しのぶずりの。かりぎぬをなん。きたりける

かすがのゝ。わかむらさきのすりころも。

しのぶのみだれかぎりしられず

となん。をいつきて。いひやりけるついでおもし
ろきことどもや。おもひけん

みちのくの。しのぶもぢずりたれゆへに。

みだれそめにしわれならなくに

といふ。歌の心ばへなり。むかし人はかくいちはや

きみやびをなんしける

という句点の打ち方であった。しかし、『伊勢物語』の本文以外の部分
〔『伊勢物語絵抄』「伊勢物語作者之説」(第一卷二丁才)・在原業
平と伊勢の伝記(第一卷二丁ウ)と、『伊勢物語大成』序(第一卷一
丁才)・「伊勢御伝記」(第二卷裏表紙見返し)・「在原なりひら伝記」
(第三卷表紙見返し)〕については、本文の内容が一致または類似し
ていた。例えば、『伊勢物語絵抄』の「伊勢物語作者之説」(第一卷
一丁才)には、

いせ物語は伊勢の御の筆作せるゆへにいせ物かたりと云といへ
どもなを説々有

て決し難しと定家卿の奥書にもみえたり其ゆへは此物語に謙退
比興の詞と

て歌はよまざりけれど元より歌の事はしらざりければさる歌の

きたなげさよなど

いへる事ありこれみな卑下の詞にてみづからの書作といふ事し
られたり又心中の

秘密とて二条后に來りかよひ齋宮にあひたりし事などをしるせ
りこれらの事

他人の推してしるしがたき事なれば業平の自記なるべし其うへ
朱雀院の

ぬりごめになり平自筆のいせ物かたりあるといふ説もあるをや
しかれども

此物かたりの中に仁和の帝の芹河の行幸の事ありこれ業平かく
れ給ひ

てのちの事兄の行平の歌をかけりかつ又此ものかたり業平の歌
のみにあら

ず万葉集の歌など書まじへたる所々あまたなり其外にも古歌を
かきて

作りものかたりとみゆる所もあれば又なりひらの自記のみに
あるべからず

されば古人の御説にもまづ業平自記の双紙ありしうへに伊勢さ
ま／＼の事を書そへて作り物語となして宇多院の皇宮七条のき
さき

温子のかたへ奉りしといふに決せり

と記されており、在原業平と伊勢の伝記(第一卷二丁ウ)には、

○業平は平城天皇の御孫阿保親王の五男なり母君は伊登内親王
と申桓武

天皇の御むすめ也淳和天皇の天長二年八月七日に生れ給ひて同

三年に阿保親王

表をとりて在原朝臣の姓を給ふ陽成院の元慶元年に右近衛権中將に任ず在

原にて五男なるゆへ在五中將といへり又閑麗翁ともいへり仁明天皇承和七年三月

十一日に十六歳にて元服せり家は三条法門のみなみ高倉の西に有その家づくりち

まき柱といふ物のよし鴨長明が無名抄にみえたり元慶四年五月廿八日に五十六歳にて

卒すと三代実録に有菩提所は大和の国石上の在原寺なり本朝神仙伝にはなりひら

一旦よし野の河上にのぼりて行がたなきよししるせり賀茂の岩本の宮になり平

をいはひて月をめて花をながめし古のやさしき人はこゝに在原と慈鎮の歌有

○伊勢は右大臣内膳の末孫前大和守従五位上藤原繼蔭のむすめ日野の元祖真

夏の玄孫にて七条后温子に宮つかへの女房也宇多帝の寵愛を得て行明親王

をうめりよつて伊勢の御息所ともいふ也伊勢の御といふも女御といふ事也家は二条

東洞院に有墓は津の国能因が旧跡の古曾部といふ所のうへに伊勢寺とて有

と記されている。一方、『伊勢物語大成』序（第一卷一丁オ）には、
▲此物がたりは伊勢の御の筆作せるゆへに題号をもかくいへりと

いへど猶其こんげん決し

がたきよし定家卿の御おくがきにみゆ又なりひら自作かとみればすでに死後の事のせら

れたりひつきやう其作者をいろ／＼とせんさくにをよばずたゞ其ことばつぎのをもしろき所をたふとみぶんほうの手本ともせよかしと定家卿の御説はしゆしやうの事なるべし（以下略）

と記されており、「伊勢御伝記」（第二卷裏表紙見返し）には、

伊勢は右大臣内膳の末孫前大和守従五位藤原繼蔭

のむすめ日野の元祖真夏の玄孫にて七条后温子に

宮つかへの女房也宇多の帝のてうあひを得て行明親王

をうめりよつて伊勢の御息所といふ也伊勢の御といふも

女御といふ事也家は二条東洞院に有墓は津のくに

能因法師が旧跡の古曾部といふ所のうへに伊勢寺

とて有
と記されており、「在原なりひら伝記」（第三卷表紙見返し）には、

▲業平は平城天皇の御まごにて阿呆親王の五男也仁王

五十三代淳和天皇天長二年四月一日ならの京にて生れり

元服は五十四代仁明天皇承和
七年三月十一日年十六才也

と記されている。傍線部が一致している箇所であるが、特に、伊勢の伝記については、ほぼ完全に一致していた。

また、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』（苗村丈伯作）と、『つれつれ草』（苗村松軒作）の本文を比較したところ、『徒然草』序段の本文の句点の打ち方については異なっていたが、兼好の伝記については、『徒然草絵抄』の序（第一巻一丁オ）では、「観応元年四月八日に歳六十八にて終焉せられぬ存命の時より山背国双の岡といふ所にかねて墓をもうけかたはらに桜をうへ辞世の歌をよみをかれたりちぎりおく花とならびの岡のべにあわれいく世の春を過さんと家集にみたり位牌は高野山西光院又坂本の西教寺に有」と記されており、『つれつれ草』の序（第一巻一丁オ・ウ）では、「観応元年四月八日に六十八歳にして為果したりといへり今におみて高野山西光院に位牌有墓はならびの岡に有べし家集にならびのをかに無常所をまふけてかたはらに桜をうへさけてちぎりをく花とならびの岡のべにあわれいく世の春を過さんとよめり」と記されているなど、本文の内容に類似点があった。

このことから、苗村丈伯と苗村松軒は、同一人物であると考えられ、【表一】に記載したように、苗村丈伯の最後の作品『武家重宝記』は元禄七年（一六九四年）刊であり、苗村松軒の最初の作品『伊勢物語大成』は元禄一〇年（一六九七年）刊であることから、苗村丈伯は、元禄一〇年（一六九七年）以降は、松軒という号を用いていたと考えられる。

最後に、苗村丈伯は作家であり絵師でもあったかという問題につ

いて考察してみたい。『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項では、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三徑 図讃」、元禄六年（一六九三年）刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子三徑 図讃」とあることから、「その絵は丈伯自ら描いている。」としている。しかし、【表一】に記載した、現在、苗村丈伯作であると考えられる他の作品には、挿絵に苗村丈伯画であるという署名があるものはなく、『徒然草絵抄』と『伊勢物語絵抄』は、私見では吉田半兵衛画である。また、「図讃」という語については、『日本国語大辞典』第二版 第三巻（小学館 二〇〇一年）に、「図讃」と類似した「画讃」という語について、「画の余白に、内容を補うように書き添える文章、詩歌。讃。」と説明されており、絵を描く人物とその画賛を書く人物が同一人物であるという意味を表すものではないといえる。よって、苗村丈伯はあくまで作家であり、作家であり絵師でもあったとする先行研究は誤りであると指摘したい。

五、おわりに

本稿では、まず、苗村丈伯（号は三徑）は、先行研究において、「苗村」という名字が比較的珍しいこともあり、名字や号が同一または類似した複数の別人と混同されており、現在、径山子・苗村介洞・苗村松軒と同一人物あるいは別人と考えられていることを確認した。そして、苗村丈伯は、径山子・苗村介洞とは別人であり、苗村松軒とは同一人物であるという可能性を指摘した。以上の検討により、苗村丈伯の概要を改めて整理すると以下の通りである。苗村

丈伯は、江戸時代前期の京都の作家。号は三径・松軒など。元禄五年（一六九二年）刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、辞書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・暦・医学・往来物・武家故実・年中行事などの様々な分野において、【表一】に記載したような二四作品を著した。

また、苗村丈伯については、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三径 図讃」、元禄六年（一六九三年）刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子 三径 図讃」とあり、「処士」という語は、『日本国語大辞典』第二版 第七卷（小学館二〇〇一年）では、「民間にあつて仕官しない人。在野の人。浪士。浪人。処子。」と説明されているので、生活のために文筆活動をしていた浪人であつたと考えられる。江戸時代前期において、何らかの事情があつて浪人になつたが、その教養によつて数多くの書物を著し、民衆の啓蒙に貢献した作家としては、他にも、仮名草子作家の浅井了意や、好色本作家の坂内直頼などが存在する（註）。このことから、苗村丈伯も、当時における作家のあり方の一例として捉えることができるだろう。

今後江戸時代前期の作家について、より具体的に明らかにしていきたい。

（本稿は、拙稿「苗村丈伯の著作について」『三田國文』第六七号（三田國文の会二〇二二年十二月）を一部加筆し修正したものである。）

【表一】 苗村丈伯の作品一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
延宝四年（一六七六年）	一二月	『聚分韻略』	辞書	跋「林菴 苗村丈伯識」「三徑」「林印苗齋」	挿絵なし	書肆八尾勘兵衛彫刻
貞享四年（一六八七年）	六月	『籠耳』	浮世草子	序「艸田斎書」	〔吉田半兵衛〕画	書林 田中庄兵衛・万屋庄兵衛 同梓
貞享五年（一六八八年）	三月	『庭訓往来図讃』	注釈	署名なし『書籍目録』によると苗村丈伯作	〔吉田半兵衛〕画	書林 山崎屋市兵衛・丸屋半兵衛 同梓
	五月	『庭訓往来絵抄』(1688)	注釈	署名なし『書籍目録』によると苗村丈伯作	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸日本橋南一丁目 利倉屋喜兵衛
元禄三年（一六九〇年）	四月	『頭書大益節用集綱目』	節用集	跋「苗村丈伯跋」	絵師不明	書堂 津田氏宗智・山本五兵衛 同梓
元禄四年（一六九一年）	一月	『徒然草絵抄』	注釈	刊記「洛陽処士 艸田斎寸木子三徑 図讃」	〔吉田半兵衛〕画	書林 万屋庄兵衛・大文字屋七郎兵衛 同梓
元禄五年（一六九二年）	四月	『年代記大絵抄』	年代記	署名なし(『芸苑古今 儒林伝』によると苗村丈伯作)	第一巻〜第三巻は別人画、第四巻〜第六巻は〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 伏見屋兵左衛門・大坂梶木町 伊丹屋太良右衛門・京御幸町 伊賀屋久兵衛・京寺町 吉野屋次郎兵衛 合梓
	五月	『女重宝記』	辞書	序「艸田寸木子叙」	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸青物町 万屋清兵衛・大坂梶木町 伊丹屋太郎右衛門・京寺町 吉野屋次郎兵衛 板行
	七月	『世話用文章』	節用集	序「艸田子識」	〔吉田半兵衛〕画	書林 貞節軒 烏丸通七観音町 佐野九兵衛 梓

刊行年	元禄五年（一六九二年）							元禄六年（一六九三年）						
刊行月	九月	一二月	一月	二月	三月	五月	五月	六月	七月	分類	作品名	刊行月	五月	五月
『古暦便覧備考』	『錦繡段訓解 仮名付』(U7)	『伊勢物語絵抄』	『俗解囊方集』	『百人一首絵抄』	『小篆増字和玉篇綱目』	『万案紙手形鑑』	『男重宝記』	『御成敗式目絵抄』	『御成敗式目絵抄』	暦	注釈	注釈	辞書	往來物
序「苗村丈伯三徑識」〔林印苗斎〕	刊記「苗村 丈伯 三徑考」	刊記「洛陽処士 艸田子三徑 図讀」	序「苗村丈伯三徑 序」〔三徑〕〔林印苗斎〕	署名なし(U7a)	序「苗村丈伯 識」	序「艸田子」	序「艸田子 三徑 題」	署名なし『近代著述目録』などによると苗村丈伯作	署名なし『近代著述目録』などによると苗村丈伯作	絵師不明	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし
書林 大坂 伊丹屋太郎右衛門・京 吉野家次郎兵衛・大和屋勘七郎 梓	五条橋通万寿寺町舁屋 川勝五郎右衛門	江戸芝神明前 井筒屋忠左衛門・大坂真斎橋筋 秋田屋市兵衛・京 押小路橋町 大文字屋七郎兵衛	刊記なし	江戸青物町 万屋清兵衛・大坂心斎橋筋 本屋平兵衛・京寺町松原 菊屋七郎兵衛	書林 丸屋彦三郎刊	京極五条橋詰町 田中庄兵衛梓	三条坊門通御所八幡之町 中川彦三郎・四条通東洞院東工入町 大和屋勘七良 同梓	書肆 万屋庄兵衛板行	書肆 万屋庄兵衛板行	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
元禄七年（一六九四年）	一月	『年中重宝記』	年中行事	序「洛下 艸田子 書」	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
	一月	『武家重宝記』	武家故実	序「洛下 艸田子 識」	〔吉田半兵衛〕画	京島丸通六角下ル七親音町 佐野九兵衛・大坂真斎橋筋上人町 雁金屋庄兵衛板
元禄一〇年（一六九七年）	五月	『伊勢物語大成』	注釈	序「苗村恣軒」	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書堂 吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛
元禄一一年（一六九八年）	六月	『つれつれ草』	注釈	序「苗村恣軒」	〔吉田半兵衛〕画	万屋庄兵衛板
宝永二年（一七〇五年）	三月	『御伽人形』	浮世草子	序「苗村氏松軒子。或時予か茅店を叩て序をせよと荀て書を投込ぬ。是を披てみるに。恣軒子が茶吞がてら。耳に聞目に見し怪談を記録し。御伽人形と題号す。」	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋南老町目 桝屋五郎右衛門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛
〔元禄五年（一六九二年）以前〕	不明	『正伝或問増補頭書』(28)	医学	伝本なし（元禄五年（一六九二年）刊『書籍目録』によると苗村丈伯作）		金や半右・せにや義

注

(158) 元禄四年(一六九一年)刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三徑 図讃」、元禄六年(一六九三年)刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子三徑 図讃」、元禄七年(一六九四年)刊『武家重宝記』の序に「洛下 艸田子 識」、元禄七年(一六九四年)刊『年中重宝記』の序に「洛下 艸田子 書」とあることから、苗村丈伯は、京都の作家であったと考えられる。

(159) 元禄一五年(一七〇二年)刊の、当時の文化について批評した浮世草子である『元禄大平記』第一巻第二話「京と大坂に本替の沙汰」に、「当世はたゞかたひ書物を取り置て。あきなひの勝手には。好色本か重宝記の類が増じやといへば」とあり、当時、重宝記がよく売れていたことがわかる。

(160) 現在確認されている、吉田半兵衛の署名がある作品は八作品である。詳しくは、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年十二月)を参照。

(161) 井上和雄「元禄版『女重宝記』『書物展望』第五九号(書物展望社 一九三六年五月 四五八頁)には、苗村丈伯の号について、「艸田寸木は、他に類例もある通り、二字を四字に分割したものである。即ち、艸田は苗、寸木は村であつて、苗村といふ姓の人が匿名に使つたものである。」と説明されている。

(162) 苗村丈伯の号。

(163) 寛文七年(一六六七年)刊『理屈物語』を苗村丈伯作であるとしている書籍は、江戸時代以前では、文化八年(一八一一年)刊『近代著述目録』、文化一五年(一八一八年)写『芸苑古今儒林伝』、江戸時代後期頃写『日本医譜』があり、明治時代以降では、中根肅治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部(青山堂支店 一八九三年)、東京経済雑誌社『大日本人名辞書』(東京経済雑誌社 一九一七年)、滋賀県教育会『近江人物志』(文泉堂 一九一七年)、滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八卷(蒲生郡 一九二三年)、関儀一郎・関義直『近

世漢学者著述目録大成』(東洋図書刊行会 一九四一年)などである。

(164) 水谷不倒『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年)によると吉田半兵衛画である。

(165) 「径」は誤植か。

(166) 中根肅治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部(一六五頁)「苗村常伯」項

苗村常伯

一作丈伯号介洞

庭訓往来頭書^三

理窟物語^六

正伝或問増補頭書^二

錦繡段熟字訓解^一

貞永式目頭書^一

女重宝記^五

俗解襲方集^八

(167) 東京経済雑誌社『大日本人名辞書』(一二六一頁)「苗村常伯」項

一に丈伯と云ふ近江八幡の医なり通称は道益名は常伯三友又介洞と号す世々医を業とす儒を伊藤仁斎に学ぶ寛延元年十月廿三日歿す年七十五、家訓往来頭書、貞永式目頭書、理窟物語、女重宝記等の著あり(諸家著述目録、皇国名医伝(筆者注…正しくは『日本医譜』か)

(168) 滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八卷(八五五・八五六頁)「苗村道益」項(滋賀県教育会『近江人物志』(四四九・四五〇頁)「苗村介洞」項は、ほぼ同内容だが出典を『近世畸人伝』『大日本人名辞書』とする)

苗村道益は八幡町の人なり諱は常伯^{一作丈伯}三友又介洞と号す家世々医を業とす、道益若くして伊藤仁斎の門に入り学を修す平常其日記は漢文にて書せり、性豪邁にして無我なり一日近里の病者を往診す、農夫水田に挿苗す道益言を交へずして過ぐ農夫之を罵る帰路農夫を呼で曰く先に我を罵りしが汝が田を植ゆるも業なれば予が往診も亦業なり、予が汝を慰めば汝も予を慰むべき

なり如何と農夫謝して去る、一日重態の病者を往診して帰らんとす病家の入薬を請ひしかば道益曰く門を出て、数百歩の客に饗を設くるが如し事既に遅しと与へずして去る、寛延元年十月二十二日（筆者注：「二十三日」の誤植か）歿す年七十五、著す所、家訓往来頭書、貞永式目頭書、理屈物語、女重宝記等あり、室駒井氏辺幅を修めずして真率なること道益に過ぐ、老後薙髮して貞信といへど世人妙雷と呼ぶ、これ其声四隣を圧し心の思ふまゝなればなり、性文雅を好み歌を能くす歿年詳ならず歳八十六辞世の歌に、

あま小舟八十の湊を漕き過きて彼の岸近くなるそ嬉しき。

〔69〕 関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』（三二二頁）「苗村介洞」項

名は常伯、一に丈伯、字は三友、道益と称し、介洞は其号なり。近江の人。医を業とす。兼て伊藤仁斎に師事し、経術の造詣深し。寛延元年十月朔日没す、年七十二（筆者注：七十五の誤植）。（近江人物志）

著述

家訓往来頭書

貞永式目頭書

理窟物語

女重宝記

〔70〕 天明八年（一七八八年）刊『近世畸人伝』第四卷「苗村介洞附妻女」項

○介洞は苗村氏、通名道益、世々医を業として近江八幡に住す、若き時は堀川伊藤氏に学ひて文学あり、日々の事務をも漢文に筆記す、性豪にして物にものとせられず、しかも無我なれば人憎ず、其一二をいはず、近村へ医療に行路程、農人の早苗を運び植るにあふ、世のならはしに、苗うゝるときは、行人労を慰して過るを、此老翁さもせねば、農夫等つふやきて、彼れ八幡の道益礼なしと誚る、老人これを聞ながら行過て、帰るさに又こゝを経る時、田にある人をこまねこす、さすがにしる人なれ

は、田を出て来るに、曰、さきにわれをそしれり、子よくおもふへし、子か苗うゝるも業也、吾医療に通ふも業也、われもし子を慰勞せは、子もまた吾をしかすべし、いかにと、農人得答へず頭を搔て退く、又或家の請に応して、病人を診て速に去んとす、あるじ薬をこひしかは、曰、既に門を出て数百歩行たる客のために、饗をまうくるが如し、不可及と、終に出去る、これらにて、常の趣知べし、其口号も氣象を見るへきものなれはこゝに挙、

悪蚤

捕渠計尽復防難、開戸偶然見月残、王猛手空憎爾点、幾回誤

把腐綿丸、

病中作

花欲辞枝看色移、丹炉還少有誰知、漢君衰晚豈無感、起感秋風蘭菊時、

此作ありて後、いくほとなく卒す、寿七十有五、寛延元年戊辰歳、十月廿三日也、

介洞先に妻有りて蚤く亡す、後妻其真率辺幅ををさめさること主翁に過たり、老後薙髮して貞信といへりしかど、ある名はいはで、妙雷と人よびしは、其声四隣にひゞき、心におもふまゝのこゝをうち出す人なれば也、あるひはつれ／＼なる所へ人到れば、よろこびて茶酒をもてなし、昔今のことをかきくつしかたり出て、なきみわらひみ興に入、客座久して対するに物うくなれば、われ酔てねふたし、今ははや帰られよ、いざ／＼と催さるゝ類ひ、常にゆきゝする人は馴て心にもかけさるのみ歟、戯に逆ひて長居するも有し、是もわかきより文雅を好み師にもよらて歌をよまれしが、中には俊発のものもありき、今其二三を挙、
題しらす

ん

同じ枝をいかに時雨のふりわけて青葉か中に紅葉しぬら

八十四といふ春、かけまくもかしこき御方より、高き
齢をいはひ給ひて、連歌の一句を、親しく御筆を染て
賜りける、百千とせ行末長き春日哉、此時によりし
うた

かしこしなかたのゝ草の露をしもらさて月の影やとす

とは

享年八十六にして、身まかりなんとせしとき

あま小ふね八十の湊を漕過て彼岸近くなるそうれしき

おのれもかしこにありける日、長居せしまるうどの数
なれば、こゝに追慕の筆をそむ、

(111) 江戸時代後期頃写『日本医譜』第三編第二五卷「苗村介洞」項・

「苗村常伯」項

苗村介洞

名道益号介洞世業医住江州八幡又学堀川伊藤氏筆記雜事必以漢
文性豪強不拘物然無我故人不憎之嘗往療近村農夫植苗風俗行人
植苗時必慰勞之此翁不然農夫謂曰八幡道益不知礼翁聞之帰途招
農夫曰子向謂我其思之子之植苗業也余之匠人亦業也余若勞子則
子亦応勞余農夫黙而去又到或家診病者速去其家請藥曰譬如為出
門數百歩之客設饗不可及也終出去其真率可祭

苗村常伯 一丈伯

一名丈伯又称文安江州彦根人仕井伊侯為侍医有故致仕隱同州野
洲郡落合村博覽洽聞無所不窺所著有正伝或問増補頭書俗解襲方
集八卷錦繡段熟字訓解貞永式目頭書庭訓往絵入口来絵入同首書節用集
頭書女重宝記理窟物語元禄中人乃益夫戚族也

(112) 元禄一〇年(一六九七年)刊『伊勢物語大成』の刊記に「洛陽
書堂 吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛」、元禄十一年(一六
九八年)刊『つれつれ草』の刊記に「万屋庄兵衛板」、宝永二年(一
七〇五年)刊『御伽人形』の刊記に「江戸日本橋南壱町目 枳屋五郎
右衛門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛」とあるので、苗村松軒は、
京都の書肆の近くに住んでいた、京都の作家であつたと考えられる。

(113) 国立国会図書館蔵。

(114) 貞享二年(一六八五年)刊『伊勢物語絵入読曲』は、この作品
自体には署名がないが、初版本である延宝二年(一六七四年)刊『伊
勢物語抄』の扉に「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作
せる所なり」とあることから、坂内直頼(号は山雲子)作であると
考えられる。

(115) 浅井了意については、北条秀雄 笠間選書11『新修浅井了意』

(笠間書院 一九七四年)、坂内直頼については、塩村耕「俗学者 山
雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二二号(人間文化研
究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月)を参照。
(116) 補訂版『国書総目録』第二卷(岩波書店 一九八九年 九七頁)
にある『家訓往来頭書』はこの作品のことか。

(117) 補訂版『国書総目録』第二卷(五九二頁)にある『錦繡段熟字
訓解』補訂版『国書総目録』第三卷(岩波書店 一九九〇年 八一五
頁)にある『三体詩熟字訓解』補訂版『国書総目録』第五卷(岩波
書店 一九九〇年 一五一頁)にある『絶句熟字訓解』はこの作品の
ことか。

(118) 元禄六年(一六九三年)刊『百人一首絵抄』を収録した、元禄
一〇年(一六九七年)刊『伊勢物語大成』の序に「苗村忞軒」とあ
る。これについて、小澤加奈子・加藤次直「都立中央図書館加賀文
庫所蔵 元禄十年刊「百人一首絵抄」(『伊勢物語大成』より)」『総合
教育センター紀要』第二六号(東海大学総合教育センター 二〇〇六

年三月一二四頁）では、「しかしこの本（筆者注…『伊勢物語大成』のこと）に先行する、元禄六年刊「百人一首絵抄」には作者名を載せないことから「百人一首絵抄」を実際に苗村松軒が執筆したかということになる」と疑問が残る。」とする。

㉔ 加藤次直「翻刻 大阪市立中央図書館所蔵 元禄六年刊「百人一首絵抄」『総合教育センター紀要』第二十六号（一五八頁）によると、刊記に「京極四条 吉田半兵衛」とある。

㉕ 元禄九年（一六九六年）刊『書籍目録大全』第一巻にある『医学正伝増補』はこの作品のことか。『書籍目録大全』には、書肆については「金や半右・せにや義」とある。

第八章 中村孫兵衛の出版物について

一、はじめに

中村孫兵衛は、江戸時代前期の京都の書肆である。書写年不明の、江戸時代中期の僧である魯山玄璠の漢詩文集、『雲堆雜著』（国立国会図書館蔵）「白慧法師墓誌」に、「粵洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼不堪攀慕今夏來山中請余曰勒行実於石可以垂之不朽」とあることから、江戸時代前期の作家である坂内直頼（法名は白慧^{さくゑ}）および江戸時代前期の絵師である吉田半兵衛（名は孝賢^{さくゑ}）と関わりがあったことがわかる。坂内直頼は、塩村耕氏の「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』第九六三号（日本古書通信社二〇〇九年一〇月）によって、貞享三年（一六八六年）刊の、当時の好色風俗を図解した浮世草子である『好色訓蒙図彙』などを著したことが明らかにされている人物であり、吉田半兵衛は、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店一九三五年）で、貞享三年（一六八六年）刊『好色五人女』『好色一代女』貞享四年（一六八七年）刊『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたとされている人物である。よって、中村孫兵衛は、江戸時代前期の出版界を知る上で重要な人物であるといえる。

中村孫兵衛に関する主な先行研究は、井上和雄氏の『慶長以来書賈集覽』（彙文堂書店一九一六年）「永原屋孫兵衛」項である。以下にその部分を引用する。

永原屋孫兵衛 中村氏 名は富平 天和—正徳
京都高辻通摩金町（柳馬場東入）
好色訓蒙図彙（貞享二¹⁷²⁵）の奥書中に『高辻昆陽軒』とあるは此の店の家号に非るか

西方指南鈔（元禄七） 辨疑書目録（宝永七）
親書
夫人 御詠歌（正徳三）
辨疑書目録は彼が自著なり、跋文に云

（前文略）我素継父之業、従事書籍已歴年所、故常以其類書文品秩、著辨疑書目録、此非為学者作之、聊欲令書肆之幼童知之、復其余以俚諺加注解者、為令無惑也、於是乎跋
皆宝永第六霜月吉旦 中村富平謹書

しかし、井上和雄『慶長以来書賈集覽』以降、中村孫兵衛に関する研究は進んでおらず、中村孫兵衛の経歴や出版作品が未だに整理されていないという問題点がある。そこで、本稿では、中村孫兵衛の事跡を整理し、中村孫兵衛が、江戸時代前期の出版界において、どのような業績を残したのかを考察してみたい。

二、中村孫兵衛の経歴

中村孫兵衛の経歴を知る上で参考となる資料は、以下の二点である。

まず一つ目は、宝永七年（一七二〇年）刊の、書名が似ている作品の弁別方法を解説した書目、『辨疑書目録』である。この序に、
夫書照^レ二人^{ハスノ}心^ヲ之鑑^{ナリ}也人^{トシテ}而善^ル惡^ノ之頭^ヲ以^レ勤^ヲ学^ヲ忠^ヲ孝^ヲ賢^ヲ愚^ヲ之^ニ
道尚明也然則不^レ可^レ無^シ書者必^{セリ}矣我素^{ヨリ}継^テ父^ノ之業^ヲ從^フ二事^ニ

書籍ニ一已歴ニ一故常以ニ其類書ニ一文ニ品秩ニ著ニ辨疑書目録ニ
此非下為ニ學者ノ作ニ之聊欲レ令ニ書肆之幼童知レ之復其
以ニ俚諺ニ加ニ注解ニ者為レ令ニ無レ惑ニ也於レ是乎跋皆宝永第
六霜月吉旦

中村富平謹書

富平

という記述があり、刊記に、

宝永七年歲次庚寅林鐘吉旦

洛陽高辻通雁金町

中村孫兵衛 寿梓 豊

という記述があることから、『辨疑書目録』は、その序を書いた中村孫兵衛作であり、刊記に記載されている中村孫兵衛の書肆で刊行されたことがわかる。なお、これは、現在中村孫兵衛作であると考えられる唯一の作品である。そして、この作品における序と刊記の記述からは、この人物の名は富平で、号は孫兵衛であること、父の跡を継いで書肆を営んでおり、宝永七年（一七一〇年）の時点ですでにその職業に就いてから長年に及んでいること、書肆は京都の高辻通雁金町（現在の京都府京都市下京区雁金町）にあったことなどがわかる。

二つ目は、江戸時代中期頃写の『雲堆雜著』『白慧法師墓誌』（こま）である。これは、塩村耕氏の「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一〇号（人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月）によって紹介された資料であり、これに「粵洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼不堪攀慕今夏来山中請余曰勒行実於石可以垂之不朽」つまり、中村孫兵衛が、

吉田半兵衛と共に、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したとあることから、中村孫兵衛は、坂内直頼および吉田半兵衛と親交があったことがわかる。

また、中村孫兵衛の生没年については不明であるが、後述するように、中村孫兵衛の出版物の中で最も刊行年が早いものは、延宝六年（一六七八年）刊の、「太極図」とその説明によって、万物の生成の過程と人間のあり方を論じた周敦頤編・熊谷蒭斎注の漢学書である『太極図説』（刊記に「高辻通雁金町 孫兵衛開板」とある）であり、最も刊行年が遅いものは、享保五年（一七二〇年）刊の、朝鮮の医師の問答を記録した尹知微・王応遶作の雑記である『朝鮮医問答』（刊記に「皇都中村孫兵衛富平鐫板」とある）であることや、享保四年（一七一九年）の奥書がある『雲堆雜著』『白慧法師墓誌』に、先に引用したような記述があることから、中村孫兵衛は、少なくとも延宝六年（一六七八年）～享保五年（一七二〇年）頃に生きていた人物であるといえる。

また、中村孫兵衛の号について、長澤規矩也・阿部隆一『日本書目大成』第三卷（汲古書店 一九七九年）の『辨疑書目録』の解題に「富平、通称は孫兵衛、号は百川、京都の書店主人。」とあり、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五卷（岩波書店 一九八四年）「弁疑書目録」項に「号は百川という。」とあるが、「百川」は、天明元年（一七八一年）刊の、書名の数詞によって分類した書目である『書籍名数』の第一巻冒頭に「平安書肆 臨泉堂中村百川治重編輯」とあるように、江戸時代中期の京都の書肆である中村治重（文台屋次郎兵衛ともこま）の号なので、誤りである。

そして、井上和雄氏の『慶長以来書賈集覧』に、「好色訓蒙図彙（貞

享二)の奥書中に『高辻昆陽軒』とあるは此の店の家号に非るか」とあり、貞享三年(一六八六年)刊の『好色訓蒙図彙』の刊記に「花洛 銅駝坊 三右衛門・高辻 昌陽軒 開板」とあることについて言及されているが、元禄六年(一六九三年)刊の、中世からの紀行文をまとめた、宮川道達編の紀行文である『拾遺意行集』には、扉に「昌陽軒蔵板」、刊記に「永原孫兵衛板行」とある。また、未見だが、新日本古典籍総合データベースによると、元禄一七年(一七〇四年)刊の、室町時代の僧である策彦周良の詩に関する話をまとめた如月作の漢詩文である『名賢詩話』(註)の刊記に「中村 昌陽軒」とあるので、井上和雄氏の推測通り、昌陽軒とは中村孫兵衛のことであつたと考えられる。

なお、貞享五年(一六八八年)刊の、女性の手紙の基本文例をまとめた居初つな作の往来物である『女文章鑑』の刊記には、「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」とあるが、その改題本である、享保五年(一七二〇年)三月刊の『女中文章鑑』の刊記には、「高辻通雁金町 中村孫三良梓」とある。これは誤植の可能性もあるが、前述の通り、『朝鮮医問答』(刊行月不明)が刊行された享保五年(一七二〇年)以降に、中村孫兵衛が刊行した作品は現在まで確認できないので、孫三郎は、孫兵衛の跡継ぎである可能性もある。さらに、享保一一年(一七二六年)刊の、日本語や歌語の意味を説明した語彙に関する書である『やまと詞大成』(註)の序に、

それ歌は天地いまだひらける時より出来しとかやされば青きをふみてよろこぶ野辺の鶯黄ばみ落るをおしむ谷の鮎もちいづれか敷寫の道しるべならざらん千早振神代の俳優は人の世にをよんで俳諧につらねさかにたのしみもてあそべり是を好める

うなひ子のたよりともなりねかしと中村氏富丸が心をよする波の間に／＼ひろい集めをきし玉をかいやり捨んも此道の本意にあらざればとてあづさにちりばめんとするになをつくば山のしげきことの葉なれば此面彼面にしりがたく岩瀬の森のいはれぬたくひはもりながら編なしてやまとこと葉と名づくこのおもむきをやつかれないさゝか述べよといふにいなみがたくて拙き硯をならしのをかの露ばかり筆をくはふるものならし 久楽山人とあるが、『やまと詞大成』の編者である(註)「中村氏富丸」という人物も、誤植の可能性もあるが、富平という名であつた中村孫兵衛の跡継ぎである可能性もある。

三、中村孫兵衛の出版物

次に、中村孫兵衛の出版物についてである。『国書総目録』補訂版(岩波書店 一九八九年～一九九〇年)、新日本古典籍総合データベースおよび各機関の蔵書目録などを調べたところ、中村孫兵衛の出版物は、【表一】に記載したように、延宝六年(一六七八年)刊『太極図説』『勢陽遊紀』、延宝八年(一六八〇年)刊『源語秘訣抄』、延宝九年(一六八一年)刊『増補大和言葉』『和歌制言葉』『匂ひ袋』、天和二年(一六八二年)刊『眠寤集』、貞享元年(一六八四年)刊『学文章』、貞享二年(一六八五年)刊『鳥飼伊勢物語』『仏祖三経指南』『天門八卦秘伝抄』『新古今和歌集』『聯珠詩格』、貞享三年(一六八六年)刊『諸芸小鑑』『好色訓蒙図彙』『小児方鑑』、貞享四年(一六八七年)刊『臨終要決鼓吹』『愚迷発心集和談抄』、貞享五年・元禄元年(一六八八年)刊『簠簋内伝金烏玉兔集』『女文章鑑』『神異経』

『螢隨筆』『医学愚得』『本草附方拔萃』『文章歐冶』『浄土安心詮要鈔』、元禄二年（一六八九年）刊『諸宗宝鑑』(32)、『今川諺解大成』『和漢朗詠図解』、元禄三年（一六九〇年）刊『西国順礼道しるべ』『袖珍医便』『昼夜重宝記』『談義まいり』『新発意用心集』、元禄四年（一六九一年）刊『説法用歌集諺註』『源平太平記評判』『誹諧大湊』『ひたち帯』『牡丹花家集』、元禄五年（一六九二年）刊『痘疹世医心法』、元禄六年（一六九三年）刊『夷堅志和解』『手習仕用集』『拾遺意行集』、元禄七年（一六九四年）刊『西方指南鈔』、元禄八年（一六九五年）刊『童訓学要抄』『痘疹格致要論』、元禄一〇年（一六九七年）刊『酉陽雜俎』、元禄一一年（一六九八年）刊『唐十二家律詩』『花譜』、元禄一三年（一七〇〇年）刊『松はやし謡和漢』『東萊左氏博議』、元禄一七年・宝永元年（一七〇四年）刊『名賢詩話』『和語連珠集』『玉すだれ』、宝永二年（一七〇五年）刊『浄土真宗聖人後世物語抄』、宝永三年（一七〇六年）刊『難経本義諺解』、宝永四年（一七〇七年）刊『和三籟集』、宝永五年（一七〇八年）刊『改正国名風土記』、宝永七年（一七二〇年）刊『辨疑書目録』、正徳元年（一七一一年）刊『山州名跡志』『童蒙古事談』、正徳三年（一七一三年）刊『親鸞聖人御詠歌集』、正徳五年（一七一五年）刊『医方筆記』、享保四年（一七一九年）刊『痘疹慈幼津筏』、享保五年（一七二〇年）刊『朝鮮医問答』の六五作品があった。他にもまだ出版物があると考えられるが、このように、和書から漢籍まで、様々な分野の作品を刊行していたようである。

四、中村孫兵衛と同時代の人物との関係

次に、中村孫兵衛と同時代の人物との関係について考察する。

まず、吉田半兵衛についてである。前述の通り、中村孫兵衛は、吉田半兵衛と共に、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したという関係があるが、【表一】に記載した中村孫兵衛の出版物のうち、吉田半兵衛画であると考えられる挿絵がある作品は、延宝九年（一六八一年）刊の、礼儀作法についての香具軒作の仮名草子である『匂ひ袋』、貞享三年（一六八六年）刊の、当時の好色風俗を図解した坂内直頼作の浮世草子である『好色訓蒙図彙』（第一巻の扉に「絵師 洛陽 吉田半兵衛図」という署名がある）の二作品であった。このことから、中村孫兵衛と吉田半兵衛が関係を持ったきっかけは、『好色訓蒙図彙』であると推測できる。また、江戸時代中期頃写の『雲堆雜著』『白慧法師墓誌』において、「洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼」と記されていることから考えると、ここで用いられている「顧盼」という語は、日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第二版 第五卷（小学館 二〇〇一年）によると、「ふりかえつて見ること。転じて、目をかけること。恩恵を与えること。顧盼（こけい）。こめん。」という意味なので、中村孫兵衛と吉田半兵衛は、いずれも坂内直頼の商売仲間であったことから、関係を持ったと考えられる。ちなみに、現在、坂内直頼の作品であると考えられているものは三一作品ある³³が、そのうち二作品に吉田半兵衛画であるという署名があり、一四作品が私見では吉田半兵衛画なので、吉田半兵衛と坂内直頼は関係が深かったといえる。

次に、江戸時代前期の京都の女性作家および絵師であった居初つなについてである。中村孫兵衛の出版物のうち、貞享五年（一六八

八年)刊の、女性の手紙の基本例文をまとめた往来物である『女文章鑑』は、居初つな作である⁽¹⁹³⁾。居初つなは、吉田半兵衛の弟子の一人であつたとされており、宮武外骨氏の「居初津奈女」『此花』第一三枝(雅俗文庫一九一〇年一月)では、「画風によつて鑑定を下すと、吉田半兵衛の門人であらうと思ふ」としており、青木平七氏の「吉田半兵衛の挿絵とその遺風」『古本屋』第八号(荒木伊兵衛書店一九一九年二月)では、画風が吉田半兵衛式であることから、吉田半兵衛の門人であらうとしている。さらに、井上和雄氏の『浮世絵師伝』(渡辺版画店一九三一年)「津奈女」項にも、画風が半兵衛流であることから「吉田半兵衛門人歟」と記されている。その他にも、吉田半兵衛と居初つなには共通点があり、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第二一五号(慶應義塾大学藝文学会二〇一八年十二月)で詳しく述べている。このように、中村孫兵衛の書肆で、吉田半兵衛画や居初つな作の作品が刊行されていることは、この二人が、当時、同じ生活圏にいた傍証の一つになるだろう。

次に、坂内直頼についてである。中村孫兵衛の出版物のうち、貞享三年(一六八六年)刊『諸芸小鑑』『好色訓蒙図彙』、貞享四年(一六八七年)刊『愚迷癡心集和談抄』、元禄四年(二六九一年)刊『説法用歌集諺註』『牡丹花家集』、正徳元年(一七一一年)刊『山州名跡志』の六作品は、坂内直頼作であつた。中村孫兵衛の出版物は、坂内直頼の作品が最も多く、坂内直頼の作品は、中村孫兵衛の書肆で刊行された作品が最も多いので、中村孫兵衛と坂内直頼は関係が深かつたといえる。なお、先行研究では指摘されていないが、貞享五年(一六八八年)刊の、善行を勧め欲望を戒めることを説いた仮名草子である『螢随筆』(刊記に「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」と

ある)は、その序に、

書をよむは家を成の本。理に循ふ有。家を保つのもと。和順有家を斉るもとゝいへり。一日書肆の人。螢随筆と号し書を攜て来ます。予嘗覧に。善を勧め悪を懲すの橋なり。亦人の為ならずや。しかりといへとも。何の家誰の書をけるをしらすとなん。ほいなきわざ也。やつかれに序を請。辞することをえずして。短き筆をうるほし。其概を事つくるならし。貞享戊辰の春三月。

洛下隠士序

という刊行の経緯が記されており、中村孫兵衛が、作者不明(anonymous)の仮名草子を刊行する際に、「洛下隠士」という人物に序の執筆を依頼したという。「洛下隠士」という署名は、一見、個人を特定するものではないと考えられるが、以下の理由により、「洛下隠士」は坂内直頼のことであると推測できる。まず一つ目の理由は、「洛下隠士」という署名は、坂内直頼の他の作品における署名と類似しているということである。塩村耕氏の「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』第九六三号(日本古書通信社二〇〇九年一〇月)に、「近世期には、時代に突出した業績を書物として残しながら、自らを語ることにひどく禁欲的な、隠者気質の文人たちがいた。西鶴同時代の著述家中、最重要の仕事を残した山雲子も、そのような一人である。」とあるように、坂内直頼は、自身の作品の署名に本名を用いることが少なかったという特徴がある。そのため、近年まで、坂内直頼の多くの著作が知られていなかったが、前述の塩村耕氏の論文では、作品の本文の筆跡から、貞享三年(一六八六年)刊の『好色訓蒙図彙』(序に「洛下の野人」という署名がある)、貞享四年(一六八七年)刊の『好色貝合』(序に「洛下散人何之何氏」

という署名がある、貞享五年（一六八八年）刊の『人倫糸屑』（序に「洛下之野人」という署名がある）などが坂内直頼作であると指摘されており、また、陳羿秀氏の「山雲子の著作について」『近世文藝』第九九号（日本近世文学会 二〇一四年一月）では、坂内直頼の他の作品の署名との類似から、延宝九年（一六八一年）刊の『名女情比』（序に「落葉堂の好色軒に筆を綾とり侍ぬ」とある）、天和二年（一六八二年）刊の『好色袖鑑』（序に「花洛の好色堂にして何の何氏」とある）、貞享四年（一六八七年）刊の『男色十寸鏡』（序に「洛陽之野人三夕軒好若処士述」とある）も、坂内直頼作であると指摘されている。そこで、『螢随筆』の序の「洛下隠士」という署名を、坂内直頼の作品の署名と比較した結果、中村孫兵衛の書肆で刊行された、貞享三年（一六八六年）刊の『諸芸小鑑』（序に「洛下之隠士彈松軒」、第六卷末尾に「洛下 野人彈松軒撰」という署名がある）、貞享四年（一六八七年）刊の『愚迷発心集和談抄』（第一卷冒頭に「隠士彈松軒述」という署名がある）という署名と類似していた。坂内直頼の作品において、「洛下」「隠士」という語がいずれも含まれる署名が用いられたのは貞享年間のみなので、坂内直頼が、貞享五年（一六八八年）刊の『螢随筆』に「洛下隠士」という署名を用いていたと考えても不自然ではない。二つ目の理由は、『螢随筆』の序を、坂内直頼の作品の序や本文と比較した結果、その内容が明らかに一致する箇所などは確認できなかったが、序の筆跡は、坂内直頼の他の作品と同じであった¹⁹⁾。よって、『螢随筆』の序は、坂内直頼が、中村孫兵衛に依頼されて執筆したものであると推測でき、このことから、中村孫兵衛と坂内直頼は関係が深かったといえるだろう。ちなみに、坂内直頼の作品に、中村孫兵衛が序を執筆した例

もあり、貞享三年（一六八六年）刊の『諸芸小鑑』（刊記に「京高辻通雁金町 中村孫兵衛・江戸青物町 本屋清兵衛・大坂 心斎橋筋呉服町角 岡田三郎右衛門 板行」とある）の序には、

芸は身をたつる本なり聖教の六芸まなばずは有べからず今這書は洛下之隠士彈松軒閑窓に納めし道々の書をとりにて枝葉を集て童子初心の便とせり予是を乞えて世にひろむるもの也号して諸芸小鑑と実に初心の燕石ならざらんや
貞享三年正月吉辰 洛陽書堂 中村氏序とある。

五、おわりに

最後に、本稿で考察した中村孫兵衛の概要を改めて述べると、以下の通りである。中村富平は、江戸時代前期の京都の書肆である。号は孫兵衛・昌陽軒。屋号は永原屋。書肆は高辻通雁金町（現在の京都府京都市下京区雁金町）にあった。父の跡を継いで書肆を営み、延宝く享保年間頃に活動し、宝永七年（一七一〇年）刊の、自身が著した、書名が似ている作品の弁別方法を解説した書目である『辨疑書目録』などの、六五作品以上を出版した。貞享三年（一六八六年）刊の、当時の好色風俗を図解した坂内直頼作の浮世草子である『好色訓蒙図彙』（吉田半兵衛画）を出版したことなどから、江戸時代前期の作家である坂内直頼および江戸時代前期の絵師である吉田半兵衛と親交があり、坂内直頼作の作品は六作品、吉田半兵衛画の作品は三作品を出版し、坂内直頼の没後には、吉田半兵衛と共に、その墓誌の撰文を僧に依頼した。

今後も江戸時代前期の出版界について研究し、その周辺について、より具体的に明らかにしていきたい。

【表一】中村孫兵衛の出版物一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者	絵師	書肆
延宝六年（一六七八年）	三月	『太極図説』	漢学	周敦頤編・熊谷荔斎注	絵師不明	刊記「高辻通雁金町 孫兵衛開板」
延宝六年（一六七八年）	四月	『勢陽遊紀』	紀行	熊谷荔斎	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛刊行」
延宝八年（一六八〇年）	九月	『源語秘訣抄』	注釈	一条兼良	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 永原屋書肆 中村孫兵衛梓」
延宝九年（一六八一年）	一月	『増補大和言葉』	語彙	作者不明	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 永原屋中村孫兵衛板」
	三月	『和歌制言葉』	歌学	祖隆	挿絵なし	刊記「中村孫兵衛板」
	九月	『匂ひ袋』	仮名草子	香具軒	〔吉田半兵衛〕画	刊記「高辻通柳はゝ東へ入町 永原屋孫兵衛梓」
天和二年（一六八二年）	一〇月	『眠齋集』	俳諧語彙	宮川道達	挿絵なし	刊記「亀屋半左衛門・永原屋孫兵衛 板行」
貞享元年（一六八四年）	七月	『学文章』	往来物	作者不明	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 永原屋孫兵衛板」
貞享二年（一六八五年）	七月	『鳥飼伊勢物語』	物語	作者不明	絵師不明	刊記「高辻通柳馬場東江入町 中村孫兵衛板行」

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者	絵師	書肆
貞享二年（一六八五年）	八月	『仏祖三経指南』	漢籍	道霈	挿絵なし	刊記「書林 小林半兵衛・中村孫兵衛 刊行」
	八月	『天門八卦秘伝抄』	占卜	編者不明	絵師不明	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛板」
	九月	『新古今和歌集』	歌集	源通具ら	挿絵なし	刊記「田中庄兵衛・中村孫兵衛梓」
貞享三年（一六八六年）	二月	『諸芸小鑑』	諸芸	坂内直頼（序「洛下之隠士 弾松軒閑窓」、第六卷末尾「洛下 野人弾松軒撰」）	絵師不明	刊記「洛陽書堂中村氏序」、刊記「京 高辻通雁金町 中村孫兵衛・江戸青物町 本屋清兵衛・大坂 心斎橋筋呉服町角 岡田三郎右衛門 板行」
	閏三月	『好色訓蒙図彙』	浮世草子	坂内直頼（序「洛下の野人作書」）	吉田半兵衛画	刊記「花洛 銅駝坊 三右衛門・高辻 昌陽軒 開板」
	七月	『小児方鑑』	医学	蘆洋	絵師不明	刊記「華洛 書林 田中庄兵衛・中村孫兵衛」
貞享四年（一六八七年）	九月	『臨終要決鼓吹』	浄土	松蒼庵的	挿絵なし	刊記「洛下書林 小嶋弥三右衛門・中村孫兵衛・小林半兵衛・山岡市兵衛」
	不明	『愚迷発心集和談抄』	仏教	坂内直頼（第一巻冒頭「隠士 弾松軒 述」）	挿絵なし	刊記「華洛 中村孫兵衛・江府 本屋清兵衛 梓行」

刊行年	貞享五年・元禄元年（一六八八年）								
刊行月	一月	三月	四月	六月	八月	八月	十一月	不明	八月
作品名	『簞簞内伝金鳥玉兎集』	『女文章鑑』	『神異経』	『螢随筆』	『医学愚得』	『本草附方拔萃』	『文章歐冶』	『浄土安心詮要鈔』	『諸宗宝鑑』
分類	曆占卜	往来物	漢籍	仮名草子	医学	本草	漢籍	浄土	仏教
作・編者	安倍晴明	居初つな	東方朔	浅井了意	名古屋玄医	蘆川桂洲	陳繹曾編・尹春年注	斎賢	白眼居士
絵師	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし	絵師不明	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし	挿絵なし
書肆	刊記「華雉 中村孫兵衛・井上忠兵衛」	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」	刊記「中村孫兵衛梓」	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」	刊記「唐本屋 吉村吉左衛門・永原屋 中村孫兵衛 梓」	刊記「京高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」	刊記「洛陽書林 唐本屋又兵衛・永原屋孫兵衛」	刊記「洛陽五条高辻通雁金町 中村孫兵衛」	序「昌陽軒叙」、刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛板」

刊行年		刊行月		作品名		分類		作・編者		絵師		書肆	
元禄二年（一六八九年）		不明	不明	『今川諺解大成』	教訓	山岡元隣		挿絵なし		跋「書于昌陽軒」、刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」			
元禄二年（一六八九年）		不明	不明	『和漢朗詠図解』	歌謡	編者不明		絵師不明		刊記「京中村孫兵衛・岡田三良右衛門板」			
元禄三年（一六九〇年）		二月	二月	『西国順礼道しるべ』	地誌	養流軒一筆子		絵師不明		刊記「小林半兵衛・中村孫兵衛」			
元禄三年（一六九〇年）		二月	二月	『袖珍医便』	医学	蘆川桂洲		絵師不明		刊記「都高辻通雁金町 永原屋中村孫兵衛梓」			
元禄三年（一六九〇年）		五月	五月	『昼夜重宝記』	事典	作者不明		絵師不明		刊記「大坂北久太郎町心斎橋 書林 平兵衛・京都 高辻通永原屋 孫兵衛・江戸 日本橋南一丁目 村上源兵衛」			
元禄三年（一六九〇年）		四月	四月	『談義まいり』	仮名草子	西音		絵師不明		刊記「高辻雁金町 中村孫兵衛・堀川 唐本屋又兵衛」			
元禄三年（一六九〇年）		不明	不明	『新発意用心集』	浄土	如幻		挿絵なし		刊記「中村孫兵衛」			
元禄四年（一六九一年）		四月	四月	『説法用歌集諺註』	浄土	坂内直頼（跋「鳳城京極六字堂寓居葉山隠淪山雲子坂内直頼述」）		挿絵なし		刊記「書林 洛陽 高辻通雁金町 中村孫兵衛富平・江戸大伝馬町 三町目 西村理右衛門」			
元禄四年（一六九一年）		七月	七月	『源平太平記評判』	軍記物語	作者不明		挿絵なし		刊記「京高辻通雁金町 中村孫兵衛・大坂心斎橋通呉服町角 岡田三郎右衛門」			

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者	絵師	書肆
元禄四年（一六九一年）	八月	『誹諧大湊』	俳諧	高田幸佐	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛梓」
元禄四年（一六九一年）	八月	『ひたち帯』	俳諧	児水	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町中村孫兵衛梓」
元禄四年（一六九一年）	十一月	『牡丹花家集』	和歌	坂内直頼（跋「葉山之隠士山雲子書」）	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町永原屋 中村孫兵衛梓」
元禄五年（一六九二年）	四月	『痘疹世医心法』	医学	万全	挿絵なし	刊記「洛陽書肆 中村孫兵衛・武田治右衛門・江戸通石町三丁目西村理右衛門 刊行」
元禄六年（一六九三年）	二月	『夷堅志和解』	俗信	洪邁編・斎賢訳	挿絵なし	刊記「書林 中村孫兵衛・梶川儀兵衛 續梓・江戸通石町三丁目十軒店 西村理右衛門」
元禄六年（一六九三年）	六月	『手習仕用集』	書道	笹山梅庵	絵師不明	刊記「心斎橋筋呉服町角 大坂 池田屋三郎右衛門・高辻柳馬場 京 中村孫兵衛・日本橋青物町 江戸 万屋清兵衛」
元禄七年（一六九四年）	不明	『西方指南鈔』	真宗	親鸞	挿絵なし	扉「昌陽軒蔵板」、刊記「永原孫兵衛板行」
元禄八年（一六九五）	六月	『童訓学要抄』	語学	作者不明	挿絵なし	刊記「京高辻通雁金町 書林 中村孫兵衛板」 上巻冒頭「洛下 昌陽軒 續梓」

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者	絵師	書肆
元禄八年（一六九五年）	不明	『痘疹格致要論』	医学	万全	挿絵なし	刊記「中村孫兵衛梓」
元禄一〇年（一六九七年）	六月	『西陽雜俎』	漢籍	段成式	挿絵なし	刊記「帝幾宣風坊書林 山下氏半六・中村孫兵衛・井上忠兵衛 蔵版」
元禄一一年（一六九八年）	一月	『唐十二家律詩』	漢籍	張遜業	挿絵なし	刊記「書肆 中村孫兵衛・古川三郎兵衛 開版」
	九月	『花譜』	植物	貝原益軒	挿絵なし	刊記「東洞院通夷川上ル町 林九兵衛・高辻通雁金屋町 永原屋孫兵衛 同梓行」
元禄一三年（一七〇〇年）	十一月	『松はやし謡漢和』	俳諧	如泉	絵師不明	刊記「書林 中村孫兵衛梓」
	不明	『東萊左氏博議』	漢籍	呂祖謙	挿絵なし	刊記「京師書林 吉村古左衛門・永原屋孫兵衛 梓行」
元禄一七年・宝永元年（一七〇四年）	〔二月 〜三月〕	『名賢詩話』	漢詩文	如月	挿絵なし	刊記「中村 昌陽軒」
	五月	『和語連珠集』	随筆	挙扇堂静栄	挿絵なし	序「洛下昌陽軒序」、刊記「書林 高辻通柳之馬場東入町 中村孫兵衛・島崎忠兵衛」
	不明	『玉すだれ』	浮世草子	辻堂兆風子	〔吉田半兵衛〕画	刊記「文台屋次郎兵衛・中村孫兵衛・杉生五郎左衛門 板行」

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者	絵師	書肆
宝永二年（一七〇五年）	七月	『浄土真宗聖人後世物語抄』	真宗	皆円	挿絵なし	刊記「洛陽書林 高辻通柳馬場東入町 中村孫兵衛珍藏」
宝永三年（一七〇六年）	九月	『難經本義諺解』	医学	岡本一抱	絵師不明	刊記「江戸日本橋南詰 万屋清兵衛・京高辻通雁金町 中村孫兵衛・大坂真斎橋筋呉服町角 池田屋三郎右衛門 開板」
宝永四年（一七〇七年）	三月	『和三籟集』	漢詩	蘭山道昶	挿絵なし	刊記「江戸吉祥寺前 中村孫兵衛・京師二条通 田原仁左衛門 敬刻」
宝永五年（一七〇八年）	九月	『改正国名風土記』	地誌	作者不明	挿絵なし	刊記「中村孫兵衛 蔵板」
宝永七年（一七一〇年）	六月	『辨疑書目録』	書目	中村孫兵衛	挿絵なし	刊記「洛陽高辻通雁金町 中村孫兵衛 寿梓」「豊」
正徳元年（一七一一年）	七月	『山州名跡志』	地誌	坂内直頼（第一巻冒頭「瑞伽林隠士 如是相白慧」）	絵師不明	刊記「京都書肆 出雲寺和泉掾・小佐治半右衛門・中村孫兵衛・杉生五郎左衛門・小山伊兵衛・嶋村八兵衛」
	八月	『童蒙古事談』	教育	恒亭主人	挿絵なし	刊記「中村孫兵衛 蔵版」
正徳三年（一七一三年）	不明	『親鸞聖人御詠歌集』	真宗 和歌	親鸞	挿絵なし	刊記「中村孫兵衛」
正徳五年（一七一五年）	二月	『医方筆記』	漢籍	丁元薦	挿絵なし	刊記「高辻通雁金町 中村孫兵衛蔵版」

刊行年	享保四年（二七 一九年）	二〇年） 享保五年（二七
刊行月	一月	不明
作品名	『痘疹慈幼津椈』	『朝鮮医問答』
分類	漢籍	雜記
作・編者	王仲威	尹知微・王応邊
絵師	挿絵なし	挿絵なし
書肆	刊記「高辻通富小路西江入町 永原屋孫兵衛・四条通美幸町角 著 屋勘兵衛」	刊記「皇都中村孫兵衛富平鐫板」

注

(181) 正徳元年(一七一一年)刊『山州名蹟志』後序に、「山・州名・跡・志・僧・白・慧・之・所・撰・也。慧・字・雪・庭・又・号・是・相。山・雲・子」。姓・坂・内・(以下略)」とあることから、坂内直頼(号は山雲子)の法名が白慧であることがわかる。

(182) 吉田半兵衛の名が孝賢であることについては、拙稿「絵師吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会二〇一八年十二月)を参照。

(183) 正しくは「貞享三」である。

(184) 江戸時代中期頃写『雲堆雜著』『白慧法師墓誌』の一部を以下に引用する。

粵洛陽書賈仲邨富平画工吉田孝賢多年獲法師顧盼不堪攀慕今夏来山中請余曰勒行実於石可以垂之不朽余知法師最久故每想嚙昔盡然有所感且古人曰有善而不聞於来世後死者之責也因徇其請不敢辞乃歷序其所識而繫之以銘曰

維山雲子 志氣堅剛 青山不變

白雲飛颺 塵埽之外 逍遙徜徉

崑嵐攪動 幻夢一場 令名千載

薦此石章

享保四年歲舍己亥六月日四明西麓沙門

某書

(185) 西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースを参照。

(186) 天明元年(一七八一年)刊『書籍名教』の刊記に、「京堀川通錦小路上町 文台屋次郎兵衛版」とあることから、市古貞次『国書人名辞典』第四卷(岩波書店 一九九八年 二七四頁)「文台屋治郎兵衛」項では、

文台屋治郎兵衛 ぶんだいや 書肆

〔生没〕生没年未詳。江戸時代中期の人。〔名号〕中村氏。名、

治重。通称、文台屋治(次)郎兵衛。号、百川・臨泉(川)堂。〔経歴〕代々、京都堀川通蛸薬師下ル錦小路上ルの書肆。

〔著作〕書籍名教編(安永九)

〔参考〕徳川時代出版者出版物集覧 近世書林版元総覧

とされている。

(187) 現在確認できる伝本は、大阪天満宮蔵のもののみである。

(188) 『江戸時代女性文庫』第八六卷(青空社 一九九八年)を参照。

(189) 関場武「考訂やまと詞」『藝文研究』第六五号(慶應義塾大学藝文学会 一九九四年三月)によると、享保十一年(一七二六年)刊『やまと詞大成』の刊記に「京高辻通柳馬場東入ル町永原屋孫兵衛板」とある伝本(所蔵先不明)があるが、未見である。『やまと詞大成』は、刊記に「寺町通松原上ル町 菱屋治兵衛板」とあるものが一般的なので、延宝九年(一六八一年)刊『増補大和言葉』の刊記に「高辻通雁金町永原屋中村孫兵衛板」とあるのに拠っていたが、後に訂正したか。

(190) 享保十一年(一七二六年)刊『やまと詞大成』は、延宝九年(一六八一年)刊『増補大和言葉』に、冒頭七丁分を増補した内容である。

(191) 貞享四年(一六七八年)刊『諸宗鉄槌論』の改題本。

(192) 塩村耕「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号(人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月)、塩村耕「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』第九六三号(日本古書通信社 二〇〇九年一〇月)、陳羿秀「山雲子と遊女評判記」『人間文化創成科学論叢』第一六卷(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 二〇一三年三月)、陳羿秀「山雲子の著作について」『近世文藝』第九九号(日本近世文学会 二〇一四年一月)などを参照。

(193) この作品自体に作者の署名はないが、元禄三年(一六九〇年)刊『女書翰初学抄』序に、

天降る日那に生なる葛の葉のうらむる事は宿世のえにしぞかし
其道々のことわざを露しらまほしきには且恋しきは都なめり僕
壮年の比隙ある身となれりよりて日比の本意こゝなりと八重の
汐路をしのぎて今此九重にいたりぬ住事二十とせに及べりつゝ
に思ふ道／＼をたどりて其かたはしをうかゞひ我身には足れり
と是をたのしみ隙行駒のあしなみを草のとざしにかぞへ和国の
風雅を味ふならし爰にしれる人一人の女子をもてり是がために
女文章のしるべならん事を書いてよと望める事数多度なり辞する
に詞なくて終に二札の文を書いてあたへぬ彼人よろこびて女文章
鑑と名付りそれもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へ
り今一人の女子ありて又此書を望めりよつてつたなき詞を綴て
女書翰初学抄と名付これ偏に初心のためなりといふ事しかり

居初氏女都音書之

とあることから、居初つな作であるとされている。

(96) 貞享五年(一六八八年)刊『螢随筆』の改題本である、元禄一
六年(一七〇三年)刊『月見の友』は、序に「附後に小冊を加、是
は松雲子了意の作なり、本の題号はあかうそといふ、月見の友の御
伽に追加する所也」(『仮名草子集成』第五〇卷(東京堂出版 二〇一
三年)を参照)とあり、その刊記に「于時寛文七夏上旬洛下松雲子
了意書」とあるように、追加一卷が浅井了意作とされている。

(97) 本文は別筆。

第九章 吉田半兵衛作品年表

最後に、吉田半兵衛の作品を年代順に整理する。吉田半兵衛については、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年)において考察されている没年が誤っていたこと、吉田半兵衛とは異なる画風の作品も吉田半兵衛画とされていることなどにより、いずれの書籍やデータベースにおける吉田半兵衛の作品一覧も未完成であるという問題点がある。そこで、吉田半兵衛の作品についての記述がある主な書籍やデータベースをもとに、これまで吉田半兵衛画であると推定されていた作品の挿絵を筆者が改めて確認し、筆者の研究によって新たに指摘した作品を含め、吉田半兵衛画と考えられるもののみを表にして以下に紹介する。

なお、吉田半兵衛画であると推定されている作品において、現時点で未見の作品は、以下の通りである。(作品名の後の()に出典と未見の理由を明記した。)

寛文一二年(一六七二年)刊『甲賀三郎』(『版画礼讃』。伝本未詳)
寛文一二年(一六七三年)刊『なりひら一代記』(『版画礼讃』。『古版小説挿画史』。伝本は池田金太郎氏旧蔵本のみだが現在はその所在不明)
延宝三年(一六七五年)五月刊『大日本王代記』(『浮世絵年表』。『新撰浮世絵年表』。『絵本年表』第一巻。延宝三年刊本は井本進氏・神田茂氏旧蔵本のみだが現在はその所在不明)

延宝三年(一六七五年)一〇月刊『為義産宮詣』(『版画礼讃』。版本

は焼失)

延宝四年(一六七六年)刊『酒天童子』(『版画礼讃』。『古版小説挿画史』。伝本未詳)

元禄二年(一六八九年)一月刊『好色京くれない』(『玉のさかづき』。『此花』凋落号、『近代日本文学大系』第二五巻(日本小説書目年表)、『改訂日本小説書目年表』。伝本未詳)

元禄二年(一六八九年)三月刊『好色床談義』(『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』。吉田半兵衛画の挿絵がある伝本は神谷勝弘氏旧蔵本のみだが現在はその所在不明)

元禄五年(一六九二年)刊『小謡 観世流百番』(『絵本年表』第一巻。伝本未詳)

元禄八年(一六九五五年)一〇月刊『ことふた』(『絵本年表』第一巻。伝本未詳)

元禄年間頃刊『好色玉鏡』(新日本古典籍総合データベース。伝本未詳)

以下の表のように、現在、吉田半兵衛画であると考えられる作品は、以下の二二二作品(未見の作品を含めると二二二作品)である。(このうち、吉田半兵衛の署名がある八作品は作品名を太字にしている。)この表から、吉田半兵衛の活動時期は寛文く正徳年間(一六六一年く一七一六年)頃の約五〇年間であり、(吉田半兵衛の署名がある作品の刊年を参考とした確実な活動時期は、延宝九年(一六八一年)く正徳二年(一七一二)年の約三〇年間である。)水谷不倒氏の『古版小説挿画史』「吉田半兵衛」項でも、「半兵衛は何年頃から、小説の挿絵を描いてゐるかといふに、前にも屢々記したやうに、署

名がないので、能く之を知ることが出来ないが、半兵衛型の画風から類推すると、寛文四五年頃からと思はれる。」とされているように、最初は、寛文二年（一六六二年）刊の『狂言記』〔新撰浮世絵年表〕の「◎寛文二年 壬寅 一六六二」項に、「○七月、吉田半兵衛画とおもはるゝ『狂言記』五冊出版。」とある）のように、吉田半兵衛の絵所があつた京都の寺町通の書肆^②で出版された作品に関わる仕事をしていたが、延宝・天和年間（一六七三年～一六八四年）頃以降には、江戸時代前期の京都の作家である近松門左衛門の浄瑠璃の正本などの挿絵を描き、人気を得ていった^③。最も盛んに活動した貞享・元禄年間（一六八四年～一七〇四年）頃には、江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴の浮世草子や、江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼および江戸時代前期の京都の書肆である山本八左衛門の好色本、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯作の重宝記などの、当時において特によく売れた分野^④の作品の挿絵を描き、その人気を確立させる。元禄時代（一六八八年～一七〇四年）以降に、形式的で固い絵柄から丸みを帯びた絵柄に変化していき、元禄一年（一六九八年）刊の『太平記』（四〇巻二冊）、宝永四年（一七〇七年）刊の『源平盛衰記』（四八巻二冊）、宝永七年（一七一〇年）刊の『平家物語』（一二巻二冊）などの長編作品の挿絵も大量に描いている。そして、現在、吉田半兵衛の最後の作品であると考えられるのは、刊記に「画師 巻飾堂 吉田氏」「孝賢」^⑤という印記のある、正徳二年（一七一二）刊の『傾城孟軍談』である。なお、水谷不倒氏が「古版小説の挿画と吉田半兵衛」『版画礼讃』（春陽堂 一九二五年）で考察しているように、宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子

孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほへたる富貴草」の記述を参考に、吉田半兵衛が一二歳頃から絵所に奉公し、一五年後の寛文年間に二七歳で独立したと考えた場合、最も盛んに活動した貞享年間は五〇歳頃ということになり、正徳二年（一七一二）に最後の作品を描いた時には七〇歳後半ということになる。それぞれの作品は、いずれも人物の描き方などに同一人物作と考えられる特徴があるものの、公家物語では柔和な描線、武家物語では無骨な描線が用いられるなど、作品の分野によってやや絵柄が異なるので、当時の版本の絵師は、作品の分野によって絵柄を使い分け、読者の理解を手助けしていたと考えられる。

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
寛文二年（一六六二年）	七月	『狂言記』	狂言	不明	〔吉田半兵衛〕画	寺町誓願寺前 安田十兵衛開板
寛文二年（一六六二年）	十一月	『ねごと草』	子 仮名草	小野愚侍	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
寛文三年（一六六三年）	三月	『しゅ天どうじ』	浄瑠璃	山本角太夫	〔吉田半兵衛〕画	二条正本屋喜右衛門
寛文五年（一六六五年）	一月	『日本廿四孝』	子 仮名草	〔浅井了意〕	〔吉田半兵衛〕画	松永伊右衛門開板
寛文五年（一六六五年）	三月	『狂言記』	狂言	不明	〔吉田半兵衛〕画	版木源左衛門開板
寛文六年（一六六六年）	八月	『あまくさ物がたり』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画（存疑）	鶴屋崑右衛門板
寛文七年（一六六七年）	九月	『京童跡追』	地誌	中川喜雲	別人・〔吉田半兵衛〕画（第二巻第一図などに吉田半兵衛風の絵が散見される）	さはら木町通烏丸東へ入町 山森六兵衛刊行
寛文九年（一六六九年）	三月	『夫婦宗論物語』	子 仮名草	不明	〔吉田半兵衛〕画	刊記のある伝本なし
寛文九年（一六六九年）	四月	『由来物語』	子 仮名草	小亀益英	〔吉田半兵衛〕画	室町五条二町下ル堺町 小亀三左衛門益英・四条寺町 前川茂右衛門 新刊

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
寛文一〇年（一六七〇年）	二月	『ちんぜいノ八郎ためとも』	浄瑠璃	大和少掾藤原勝則	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋八左衛門板
寛文一二年（一六七二年）	二月	『小さかづき』	子 仮名草	〔山岡元隣〕	〔吉田半兵衛〕画	洛陽山治氏家成刊行
寛文一一年（一六七一年）	二月	『宝蔵』	俳諧	山岡元隣	〔吉田半兵衛〕画	洛陽寺町書舎 秋田屋五郎兵衛
寛文一二年（一六七二年）	不明	『一休諸国物語』	子 仮名草	不明	〔吉田半兵衛〕画	寺町二条上ル町 表紙屋庄兵衛板
寛文一三年（一六七三年）	一月	『こわうのひめ』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画	八もんしや八左衛門板
延宝二年（一六七四年）	一月	『日本王代記』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋八左衛門板
延宝二年（一六七四年）	四月	『くずは道心』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画	山本九兵衛板
延宝二年（一六七四年）	九月	『しのたづまつりぎつね付あべノ清明出生』	浄瑠璃	〔伊藤出羽掾〕	〔吉田半兵衛〕画	鶴屋崑右衛門板
延宝二年（一六七四年）	九月	『山城四季物語』	事 年中行	坂内直頼（序「坂内氏山雲子みっから序」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 本間長兵衛・大角八郎兵衛開板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
延宝三年（一六七五年）	一月	『大日本神道秘蜜の巻付御月日待ゆらい』	浄瑠璃	〔井上播磨掾〕	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋八左衛門板
延宝三年（一六七五年）	一〇月	『蘆分船』	地誌	一無軒道治	〔吉田半兵衛〕画	書林 山本氏理兵衛開板
延宝四年（一六七六年）	四月	『雨夜の友』	仮名草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	鶴や岳右衛門板
延宝五年（一六七七年）	一月	『出来齋京土産』	地誌	〔浅井了意〕	〔吉田半兵衛〕画	磯田平兵衛板行
延宝五年（一六七七年）	一月	『平家物語』	軍記物語	不明	〔吉田半兵衛〕画（存疑）	洛陽二条通書肆堂開板
延宝五年（一六七七年）	三月	『八まん太郎琴之縁』	浄瑠璃	上総若太夫	〔吉田半兵衛〕画	山本九兵衛新板
延宝六年（一七八年）	一月	『松浦五郎景近』	浄瑠璃	清水理太夫	〔吉田半兵衛〕画	二条通 鶴屋七右衛門
延宝六年（一七八年）	二月	『名媛詩仙集』	漢詩	藤昌琳	〔吉田半兵衛〕画（存疑）	笹屋三郎左衛門 板行
延宝六年（一七八年）	三月	『有馬大鑑迎湯抄』	地誌	生白堂行風	第一巻〜第四巻は〔吉田半兵衛〕画、第五巻は別人画	大坂常盤町天神橋通東へ入ル町 伊勢屋右衛門開板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
延宝六年（一六七八年）	不明	『住吉相生物語』	地誌	一無軒道治	〔吉田半兵衛〕画	河勝又兵衛
延宝七年（一六七九年）	四月	『にがわらひ』	咄本	不明	〔吉田半兵衛〕画	堀川通西吉水町 錢屋儀兵衛・鎰屋吉兵衛・金屋四郎兵衛
延宝七年（一六七九年）	五月	『古今狂歌仙』	狂歌	愛香軒暇鼻子	〔吉田半兵衛〕画	川勝又兵衛嘉珍開板
延宝八年（一六八〇年）	八月	『難波鑑』	地誌	一無軒道治	〔吉田半兵衛〕画	大坂本町五丁目御堂筋角 同所 小浜屋七郎兵衛・近江屋次郎右衛門板
延宝八年（一六八〇年）	八月	『雛物語』	咄本	幸佐	〔吉田半兵衛〕画	祇園縄手大黒町 満足屋清兵衛板行
延宝八年（一六八〇年）	不明	『けらわらひ』	咄本	坂内直頼（序「山雲子」）	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
延宝九年（一六八一年）	一月	『朱雀遠目鏡』	評判記	不明	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
延宝九年（一六八一年）	一月	『名女情比』	仮名草	坂内直頼（序「落葉堂の好色軒に筆を綫とり侍ぬ」）	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書林 瀬尾源兵衛・本田次兵衛 開板
延宝九年（一六八一年）	二月	『源氏御色遊』	浮世草子	山本八左衛門	吉田半兵衛画（下巻末尾「絵師 吉田半兵衛」）	刊記なし

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
延宝九年（一六八一年）	三月	『都風俗鑑』	評判記	坂内直頼（序「花洛の遊民何之何氏拙者書」）	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
延宝九年（一六八一年）	四月	『朱雀諸分鑑』	評判記	坂内直頼（跋「朱雀野人書」）	〔吉田半兵衛〕画	万屋庄兵衛・丸屋原兵衛
延宝九年（一六八一年）	五月	『つれつれ草』	浄瑠璃	〔近松門左衛門〕	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入町 山本九兵衛刊
延宝九年（一六八一年）	八月	『長崎土産』	評判記	前悪性大臣嶋原金捨	別人画・〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
延宝九年（一六八一年）	九月	『匂ひ袋』	仮名草	香具軒	〔吉田半兵衛〕画	高辻通柳はゝ東へ入町 永原屋孫兵衛梓
天和元年（一六八一年）	一二月	『乱曲揃』	浄瑠璃	宇治加賀掾	〔吉田半兵衛〕画（やや存疑）	ふや町通八文字屋八左衛門
天和二年（一六八二年）	一月	『恋慕水鏡』	浮世草	山本八左衛門	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし（元禄九年刊『書籍目録大全』によると「文台や」）
天和二年（一六八二年）	二月	『好色袖鑑』	浮世草	坂内直頼（序「花洛の好色堂にして何の何氏謹而書也」）	〔吉田半兵衛〕画	丸屋源兵衛 開板
天和三年（一六八三年）	二月	『風流嵯峨紅葉』	浮世草	山本八左衛門	〔吉田半兵衛〕画	敦賀屋弥兵衛板行（元禄九年刊『書籍目録大全』によると山本八左衛門）

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
天和三年（一六八三年）	三月	『うかれきやうげん』	狂言本	山本遊学	〔吉田半兵衛〕画	京 山本七郎兵衛・大坂 西沢太兵衛
天和三年（一六八三年）	五月	『歌仙金玉抄』	注釈	坂内直頼（序「洛陽散人山雲子謹書」）	〔吉田半兵衛〕画	金屋半右衛門 板行
天和三年（一六八三年）	五月	『嶋原大和暦』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	一条通 和気屋長兵衛開板
天和三年（一六八三年）	九月	『有馬名所鑑』	地誌	不明	〔吉田半兵衛〕画	有馬上道町 有野屋次郎右衛門板
天和三年（一六八三年）	九月	『新御伽婢子』	浮世草子	西村未達（序「洛下寓居書」）	〔吉田半兵衛〕画	江戸神田新革屋町 西村半兵衛・京 三条通 同市良右衛門・八幡町通 大津屋庄兵衛
天和四年（一六八四年）	一月	『花の名残』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	江戸神田新革屋町 西村半兵衛・洛陽錦小路新町西へ入町 永田長兵衛 梓行
貞享二年（一六八五年）	一月	『宗祇諸国物語』	仮名草子	西村未達（序「洛下旅館序」）	〔吉田半兵衛〕画	神田新革屋町 西村半兵衛・京師三条通 西村市郎右衛門・同八幡町通 坂上勝兵衛 刊行
貞享二年（一六八五年）	二月	『梶久一世の物語』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	北御堂前安土町本屋 書林 庄太郎開板
貞享二年（一六八五年）	三月	『薬師霊場記』	寺院	高野一栄	〔吉田半兵衛〕画	井筒屋庄兵衛・寺田野茂兵衛 開板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
貞享二年（一六八五年）	四月	『竹斎療治之評判』	仮名草子	円瓢子	〔吉田半兵衛〕画	北御堂前安土町本屋書林庄太郎開板
貞享二年（一六八五年）	八月	『伊勢物語絵入読曲』	注釈	〔坂内直頼〕	吉田半兵衛画〔刊記「絵師京吉田定吉」〕	押小路通橘町 大文字屋七郎兵衛・江戸芝神明前 井筒や忠左衛門開板
貞享三年（一六八六年）	一月	『好色三代男』	浮世草子	〔西村未達〕	〔吉田半兵衛〕画	書林寿詞堂 皇都三条通 西村市郎右衛門・同八幡町通 坂上勝兵衛 刊行
貞享三年（一六八六年）	一月	『諸国心中女』	浮世草子	西村未達（序「洛下寓居序」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸神田新革屋町 西村半兵衛・皇都三条通 西村市郎右衛門・同八幡町通 坂上勝兵衛 梓行
貞享三年（一六八六年）	二月	『伊勢講并参宮儀式』	神社	不明	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書林 小嶋弥三右衛門・山岡市兵衛 版行
貞享三年（一六八六年）	二月	『好色伊勢物語』	浮世草子	城坤 酒楽軒	〔吉田半兵衛〕画	洛下錦小路通 永田長兵衛・江戸神田新革屋町 西村半兵衛 彫梓
貞享三年（一六八六年）	二月	『好色五人女』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	武州 書林 青物町清兵衛店・摂州 書肆 北御堂前 森田庄太郎板
貞享三年（一六八六年）	二月	『吉野拾遺』	説話	松翁	〔吉田半兵衛〕画	寺町通二条上ル町 大森太右衛門 刊行
貞享三年（一六八六年）	三月	『清明通変占』	占卜	〔管天子〕	〔吉田半兵衛〕画	京二条通観音町 書肆 風月堂開板、

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
貞享三年（一六八六年）	閏三月	『好色訓蒙図彙』	浮世草子	坂内直頼（序「洛下の野人作書」）	吉田半兵衛画（上巻扉「絵師洛陽吉田半兵衛図」、下巻扉「図無色軒筆」「図画無色軒筆」）	花洛 銅駝坊 三右衛門・高辻 昌陽軒 開板
貞享三年（一六八六年）	五月	『夕霧二世相』	浄瑠璃	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	京二条通寺町西へ入町北側 大坂高麗橋堺筋かと出見世 山本九兵衛板行
貞享三年（一六八六年）	六月	『好色一代女』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	大坂真斎橋筋呉服町角 書林 岡田三郎右衛門板
貞享三年（一六八六年）	十一月	『難波昔語』	役者評判記	不明	〔吉田半兵衛〕画	洛下 ぬら利板
貞享三年（一六八六年）	十一月	『本朝二十不孝』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	江戸青物町 万谷清兵衛・大坂呉服町八丁目 岡田三郎右衛門・同平野町三丁目 千種五兵衛板
貞享四年（一六八七年）	一月	『御伽比丘尼』	浮世草子	西村未達	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸神田新革屋町 西村半兵衛・京三条通 西村市郎衛門 新版
貞享四年（一六八七年）	一月	『女用訓蒙図彙』	往来物	奥田松柏軒	別人（第一巻第一図・吉田半兵衛（第四巻「浮世絵の逸物吉田氏が筆をかりて粗かゝしむる也」）画	京二条通 片山三右衛門・大坂高麗橋一丁目 山本清三郎・江戸日本橋万町 本屋清兵衛
貞享四年（一六八七年）	一月	『新竹斎』	浮世草子	〔西村未達〕（303）	〔吉田半兵衛〕画	書林 帝畿三条通油小路東江入 西村市郎右衛門
貞享四年（一六八七年）	一月	『男色大鑑』	浮世草子	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	大坂伏見呉服町淀屋橋筋 書林 深江屋太郎兵衛板・京二条通山崎屋市兵衛・江戸日本橋青物町 万屋清兵衛

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
貞享四年（一六八七年）	一月	『野郎立役舞台大鏡』	役者評判記	山人八左衛門	〔吉田半兵衛〕画	第一図「板本山人」、刊記「京出水通大宮西へ入町 和泉屋八左衛門 板行」
貞享四年（一六八七年）	二月	『本朝美人鑑』	仮名草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	江戸大伝馬町三丁目 麿屋喜右衛門板・西村利右衛門板
貞享四年（一六八七年）	三月	『懷硯』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
貞享四年（一六八七年）	四月	『武道伝来記』	浮世草子	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 万屋清兵衛・大坂呉服町心齋橋筋角 岡田三郎右衛門
貞享四年（一六八七年）	四月	『山路の露』	浮世草子	嵯峨夢住庵 妙仙尼	吉田半兵衛画（序「花洛の画工吉田氏に物して」）	江戸神田新革町 書林 西村唄風・同 斉藤作兵衛・洛下三条通 西村嘯松子 彫刻
貞享四年（一六八七年）	五月	『好色破邪頭正』	浮世草子	白眼居士（北条団水か）	〔吉田半兵衛〕画	書林 西沢・森本 板行
貞享四年（一六八七年）	五月	『諸国敵討』	浮世草子	西沢貞陳作・神保氏入道補	〔吉田半兵衛〕画	西沢太兵衛・河勝五郎右衛門 板行
貞享四年（一六八七年）	六月	『籠耳』	浮世草子	苗村丈伯（序「艸田斎書」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 田中庄兵衛・万屋庄兵衛 同梓
貞享四年（一六八七年）	七月	『男色十寸鏡』	浮世草子	坂内直頼（序「洛陽之野人三夕軒好若処士述」）	〔吉田半兵衛〕画	〔金屋平兵衛〕

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
貞享四年（一六八七年）	八月	『好色青梅』	子 浮世草	玉扨軒有当子	〔吉田半兵衛〕画	一条通鏡石町 和気屋長兵衛 開板
貞享四年（一六八七年）	九月	『好色貝合』	子 浮世草	坂内直頼（序「洛下散人何之何氏謹撰」、下巻末尾「好色菴考也」）	〔吉田半兵衛〕画（序「僕去年其品々を図にあらはして好色訓蒙図彙をつくる今又もれしを集て是とあはせて全部をなす扱こそ好色貝合と号す」）	書林 清兵衛・三右衛門 開板
貞享四年（一六八七年）	九月	『好色旅日記』	子 浮世草	〔片岡旨恕〕	〔吉田半兵衛〕画	吉野家次ろ兵衛
貞享四年（一六八七年）	九月	『朱雀信夫摺』	評判記	評判 好色軒・文法 南花軒	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
貞享四年（一六八七年）	十一月	『難字訓蒙図彙』	辞書	〔永井如瓶〕	〔吉田半兵衛〕画	心斎橋筋淡路町南へ入町 安井嘉兵衛刊
貞享五年（一六八八年）	一月	『好色大神楽』	子 浮世草	不明	〔吉田半兵衛〕画	井筒屋九郎兵衛 新板
貞享五年（一六八八年）	一月	『当流女文章』	往来物	不明	〔吉田半兵衛〕画（改題本『女筆文車』を参照）	京都 寺田与半次・大坂 平野屋庄左衛門・江戸 橋本重兵衛 ※本書は未見。書誌情報は、石川松太郎『往来物解題辞典 解題編』（大空社 二〇〇一年）による。
貞享五年（一六八八年）	一月	『日本永代蔵』	子 浮世草	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	京 書林 二条通麩屋町 金屋長兵衛・大坂 書林 北御堂前 森田庄太郎刊板
貞享五年（一六八八年）	二月	『武家義理物語』	子 浮世草	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	京寺町通五条上ル町 山岡市兵衛・江戸日本橋万町角 万屋清兵衛・大坂心斎橋筋淡路町南江入丁 安井加兵衛梓

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
貞享五年（一六八八年）	三月	『嵐無常物語』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
貞享五年（一六八八年）	三月	『好色通変占』	浮世草子	坂内直頼（序「自書」）	〔吉田半兵衛〕画	京帳屋岳兵衛・藤屋彦三郎・江戸日本橋青物町伏見屋兵左衛門
貞享五年（一六八八年）	三月	『庭訓往来図讃』	注釈	署名なし『書籍目録』によると苗村丈伯作）	〔吉田半兵衛〕画	書林 山崎屋市兵衛・丸屋半兵衛 同梓
貞享五年（一六八八年）	三月	『日本歳時記』	年中行事	貝原好古編・貝原益軒補	〔吉田半兵衛〕画	雒陽書肆日新堂寿梓
貞享五年（一六八八年）	四月	『人倫糸屑』	浮世草子	坂内直頼（序「洛下之野人撰」）	〔吉田半兵衛〕画	不明（伝本は上巻のみ）
貞享五年（一六八八年）	五月	『庭訓往来絵抄』	注釈	署名なし『書籍目録』によると苗村丈伯作）	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸日本橋南一丁目利倉屋喜兵衛
貞享五年（一六八八年）	六月	『色里三所世帯』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
貞享五年（一六八八年）	不明	『衣更着物語』	室町物語	不明	〔吉田半兵衛〕画	板奥 京蛸薬師 堺町角 喜平
貞享五年（一六八八年）	不明	『好色盛衰記』	浮世草子	〔井原西鶴〕	〔吉田半兵衛〕画	書林 武芻日本橋南老丁目 平野屋清三郎・摂州大坂折屋町 江戸屋莊右衛門板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄元年（一六八八年）	一〇月	『男山放生大会』	祭祀	菅宗徳	〔吉田半兵衛〕画	今井五兵衛尉定房雕刻之
元禄元年（一六八八年）	十一月	『新可笑記』	浮世草子	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 万屋清兵衛・大坂真斎橋筋呉服町角 岡田三郎右衛門 板行
元禄元年（一六八八年）	不明	『大隈川源左衛門』	狂言本	不明	〔吉田半兵衛〕画	二条通 正本屋崑右衛門
元禄二年（一六八九年）	一月	『本朝桜陰比事』	浮世草子	〔井原西鶴〕(303)	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 万屋清兵衛・大坂心斎橋筋順慶町 柏原清衛門
元禄二年（一六八九年）	五月	『婦人養草』	教訓	梅塙散人	〔吉田半兵衛〕画	書林 洛陽 梅村弥右衛門・賀陽 塚本治兵衛・同 風月半兵衛
元禄二年（一六八九年）	八月	『忠臣身替物語』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
元禄三年（一六九〇）	一月	『好色四季咄』	浮世草子	不明（序「無名僕序す」）	〔吉田半兵衛〕画	出水通西へ入ル町和泉屋三郎兵衛板行
元禄三年（一六九〇年）	一月	『好色咄浮世祝言揃』	浮世草子	〔西村未達〕	〔吉田半兵衛〕画	江戸神田新革屋町 西村半兵衛店・京三条通油小路東へ入町 西村市郎右衛門 梓行
元禄三年（一六九〇年）	三月	『仏母摩耶山開帳』	狂言本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	ふや町通せいくはんじ下ル町西側 八文字屋八左衛門板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄三年（一六九〇年）	七月	『人倫訓蒙図彙』	事典	不明	第一巻、第二巻は〔吉田半兵衛〕画、第三巻、第七巻は蒔絵師源三郎画	書林 平楽寺 開板・大坂高麗橋一丁目 村上清三郎・江戸日本橋 南平松町 村上五郎兵衛
元禄三年（一六九〇年）	不明	『水木辰之助餞振舞』	狂言本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋八左衛門新板
元禄四年（一六九一年）	一月	『徒然草絵抄』	注釈	苗村文伯（刊記「洛陽処士 艸田斎寸木子三徑 図讃」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 万屋庄兵衛・大文字屋七郎兵衛 同梓
元禄四年（一六九一年）	五月	『としの花』	図案	不明	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
元禄四年（一六九一年）	不明	『好色扶桑鹿子』	浮世草	無友軒独笑	〔吉田半兵衛〕画	不明
元禄四年（一六九一年）	不明	『養張草』	役者評 判記	不明	〔吉田半兵衛〕画（の模倣か）	書林 藤華軒
元禄五年（一六九二年）	一月	『諸国新百物語』	浮世草	西村未達（序「洛下俳林子」）	〔吉田半兵衛〕画	西村市郎右衛門 新版
元禄五年（一六九二年）	一月	『世間胸算用』	浮世草 子	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	書肆 京二条通堺町 上村平左衛門・江戸青物町 万屋清兵衛・大坂梶木町 伊丹屋太郎右衛門 板行
元禄五年（一六九二年）	二月	『役者大鑑』	役者評 判記	不明	〔吉田半兵衛〕画	出水通大宮西へ入町 和泉屋三郎兵衛板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄五年（一六九二年）	三月	『貞徳永代記』	俳諧	随流	〔吉田半兵衛〕・別人画	三条縄手大黒町 橘屋庄三郎板行
元禄五年（一六九二年）	四月	『年代記大絵抄』	年代記	署名なし〔芸苑古今儒林伝〕によると苗村丈伯作	第一巻〜第三巻は別人画、第四巻〜第六巻は〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 伏見屋兵左衛門・大坂梶木町 伊丹屋太良右衛門・京御幸町 伊賀屋久兵衛・京寺町 吉野屋次郎兵衛 合梓
元禄五年（一六九二年）	五月	『女重宝記』	辞書	苗村丈伯（序「艸田寸木子叙」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸青物町 万屋清兵衛・大坂梶木町 伊丹屋太郎右衛門・京寺町 吉野屋次郎兵衛 板行
元禄五年（一六九二年）	七月	『世話用文章』	節用集	苗村丈伯（序「艸田子識」）	〔吉田半兵衛〕画	書林 貞節軒 烏丸通七観音町 佐野九兵衛 梓
元禄五年（一六九二年）	不明	『好色大鑑』	浮世草子	〔藤本箕山〕	〔吉田半兵衛〕画	さはら木町通 万屋彦三郎板
元禄五年（一六九二年）	不明	『好色にしき木浮世狂言尽』	浮世草子	〔西村未達〕	〔吉田半兵衛〕画	江戸神田新草屋町 書林 西村半兵衛店・京三条通油小路東へ入町 書舎 西村市郎右衛門 版行
元禄六年（一六九三年）	一月	『雨夜三盆機嫌』	役者評判記	木笛庵瘦牛	〔吉田半兵衛〕画	板木夕顔宿辺
元禄六年（一六九三年）	一月	『伊勢物語絵抄』	注釈	苗村丈伯（刊記「洛陽処士艸田子三径図讀」）	〔吉田半兵衛〕画	江戸芝神明前 井筒屋忠左衛門・大坂真斎橋筋 秋田屋市兵衛・京押小路橘町 大文字屋七郎兵衛
元禄六年（一六九三年）	一月	『浮世栄花一代男』	浮世草子	井原西鶴	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物丁 幡屋清兵衛・大坂心斎橋上人町 雁金屋庄兵衛・京油屋宇右衛門・松葉屋平左衛門 板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄六年（一六九三年）	一月	『好色春の明ぼの』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	江戸神田新革屋町 西村半兵衛店・京六角通小川東へ入町 書林西村市郎右衛門 新刊
元禄六年（一六九三年）	三月	『百人一首絵抄』	注釈	〔苗村松軒（丈伯）〕	吉田半兵衛画（刊記「京極四条 吉田半兵衛」）	江戸青物町 万屋清兵衛・大坂心斎橋筋 本屋平兵衛・京寺町松原菊屋七郎兵衛
元禄六年（一六九三年）	六月	『男重宝記』	辞書	苗村丈伯（序「艸田子三径題」）	〔吉田半兵衛〕画	三条坊門通御所八幡之町 中川彦三郎・四条通東洞院東工入町 大和屋勘七良 同梓
元禄六年（一六九三年）	七月	『御成敗式目絵抄』	注釈	署名なし『近代著述目録』などによると苗村丈伯作	〔吉田半兵衛〕画	書肆 万屋庄兵衛板行
元禄六年（一六九三年）	冬	『西鶴置土産』	浮世草子	井原西鶴作・北条団水編	〔吉田半兵衛〕画	書林 京洛寺町五条上ル町 田中庄兵衛・武江青物町 万屋清兵衛・浪花堀筋備後町 八尾甚左衛門
元禄七年（一六九四年）	一月	『年中重宝記』	年中行事	苗村丈伯（序「洛下艸田子書」）	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
元禄七年（一六九四年）	一月	『武家重宝記』	武家故実	苗村丈伯（序「洛下艸田子識」）	〔吉田半兵衛〕画	京烏丸通六角下ル七観音町 佐野九兵衛・大坂真斎橋筋上人町 雁金屋庄兵衛板
元禄七年（一六九四年）	二月	『九想詩診解』	漢詩注	序「葉山之隠士山雲子著」〔坂内氏（印）〕〔直頼（印）〕	〔吉田半兵衛〕画	洛陽錦小路通新町西入町 書林 永田調兵衛蔵板
元禄七年（一六九四年）	三月	『西鶴織留』	浮世草子	井原西鶴作・北条団水編	〔吉田半兵衛〕画	江戸万屋清兵衛・大坂 雁金屋庄兵衛・京 上村平左衛門板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄七年（一六 九四年）	七月	『系図入説僻付つれ 草』	随筆	兼好	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
元禄七年（一六 九四年）	九月	『琴曲抄』	歌謡	不明（序「甘節（印）」 「玉池堂人（印）」	〔吉田半兵衛〕画	京寺町 梅村弥右衛門・同 尾崎七左衛門・江戸日本橋 松葉清四 郎 連版
元禄七年（一六 九四年）	十一月	『人鏡論』	教訓	大儒 性子	〔吉田半兵衛〕画	浪華北御堂前書肆毛利田庄太郎梓行
元禄八年（一六 九五年）	一月	『永代重宝記』	事典	不明（筆跡は苗村丈 伯本に似る）	〔吉田半兵衛〕画	書林 村田七兵衛・松屋加兵衛 開板
元禄八年（一六 九五年）	一月	『好色十式人男』	浮世草	洛下 舍衣軒 明昏 （印）	〔吉田半兵衛〕画	洛陽 井筒屋庄三郎板行
元禄八年（一六 九五年）	一月	『好色とし男』	浮世草	不明	〔吉田半兵衛〕画	書林 開板
元禄八年（一六 九五年）	一月	『西鶴俗つれつれ』	浮世草	井原西鶴作・北条団 水編	〔吉田半兵衛〕画	京洛寺町五条上ル町 田中庄兵衛・浪花堺筋備後町 八尾甚左衛門
元禄八年（一六 九五年）	一月	『本朝貞女物語』	仮名草	不明	〔吉田半兵衛〕画（存 疑）	大坂北御堂前 毛利田庄太郎繡板
元禄八年（一六 九五年）	三月	『好色おとぎぼう し』	浮世草	不明	〔志茂村七郎兵衛〕画（吉 田半兵衛画からの流用があ る）	山本七良兵衛板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄九年（二六 九六年）	一月	『好色小柴垣』	浮世草 子	酔狂庵	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
元禄九年（二六 九六年）	一月	『人倫重宝記』	事典	不明	〔吉田半兵衛〕画	書林 大坂 久保田崑兵衛・京 中野彦三郎板
元禄九年（二六 九六年）	一月	『万の文反古』	浮世草 子	〔井原西鶴作・北条 团水編〕	〔吉田半兵衛〕画	江戸万屋清兵衛・大坂 雁金屋庄兵衛・京 上村平左衛門板
元禄九年（二六 九六年）	三月	『古今武士鑑』	浮世草 子	棕梨一雪	〔吉田半兵衛〕画	京御幸町二条上ル丁 浅野久兵衛・大坂高麗橋老丁目 同 弥兵衛
元禄九年（二六 九六年）	六月	『好色わすれ花』	浮世草 子	如酔	〔吉田半兵衛〕画	京下立売大宮西江入町 和泉屋八左衛門・尾州両替町本町角 木村 六右衛門 開板
元禄一〇年（一 六九七年）	一月	『義経記』	軍記物 語	不明	〔吉田半兵衛〕画	京寺町松原下ル町 梅村三郎兵衛
元禄一〇年（一 六九七年）	三月	『嫁娶調宝記』	礼法	遠藤元閑（序「洛下隠人 広 長軒元閑序」）	別人画（第四卷に『女用訓 蒙図彙』第三卷からの転載	京二条 井筒や九郎兵衛・大坂北御堂之前 毛利田庄太郎 開板
元禄一〇年（一 六九七年）	五月	『伊勢物語大成』	注釈	苗村丈伯（序「苗村 泰軒」）	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書堂 吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛
元禄一〇年（一 六九七年）	八月	『能之図式』	能	不明	〔吉田半兵衛〕画	洛下書林 京新町通下長者町上ル町 谷口梅花堂・大坂高麗橋老町 目 浅野弥兵衛・京押小路柳馬場東江入町 谷口七郎兵衛

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄一〇年（一六九七年）	十一月	『太平記』	軍記物 語	不明	〔吉田半兵衛〕画	摂城大坂心齋橋筋 書林 保武多伊右衛門梓
元禄一一年（一六九八年）	一月	『小夜嵐』	浮世草 子	〔井原西鶴〕	第一卷第三卷は別人画、 第四卷、第一〇卷は〔吉田	京一条鏡石町 富倉太兵衛・大坂高麗橋 村上清三郎・江戸日本橋 万町 小川新兵衛
元禄一一年（一六九八年）	一月	『太平記』	軍記物 語	不明	〔吉田半兵衛〕画	洛陽書林等開板
元禄一一年（一六九八年）	一月	『初音草咄大鑑』	咄本	洛下 寓言子	〔吉田半兵衛〕画	書肆 五条橋通万寿寺町外屋 川勝五郎右衛門
元禄一一年（一六九八年）	六月	『つれつれ草』	注釈	苗村丈伯（序「苗村 恠軒」）	〔吉田半兵衛〕画	万屋庄兵衛板
元禄一一年（一六九八年）	八月	『怪談全書』	仮名草 子	林羅山	〔吉田半兵衛〕画	江戸上野仁王門筋中町 中野孫三郎・京五条橋通 福森兵左衛門 板行
元禄一一年（一六九八年）	一二月	『新色五卷書』	浮世草 子	西沢一風（序「難波 書生芦仮葺与志編」）	〔吉田半兵衛〕画	大坂南本町式丁目 万屋仁兵衛板行
元禄一二年（一六九九年）	七月	『好色文伝授』	浮世草 子	洛陽由之軒 政房 （印）	〔吉田半兵衛〕画	書林風月半七 板行
元禄一二年（一六九九年）	不明	『糸竹大全』	音楽	松風軒	〔吉田半兵衛〕画	永田調兵衛板行

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄一三年（一七〇〇年）	一月	『十能都鳥狂詩』	役者評判記	梅花軒華溪	〔吉田半兵衛〕画	寺町通松原上ル丁 菱屋治兵衛板行
元禄一三年（一七〇〇年）	三月	『御前義経記』	浮世草子	〔西沢一風〕（第一巻序「浮太郎冠者実名与志編」）	〔吉田半兵衛〕画	大坂 油屋与兵衛・万屋仁兵衛・雁金屋庄兵衛・京 上村平左衛門 刊板
元禄一三年（一七〇〇年）	九月	『狂言記 続』	狂言	不明	〔吉田半兵衛〕画	江戸通本石町 山形屋吉兵衛・京堀河 八尾平兵衛
元禄一四年（一七〇一年）	七月	『けいせい請状』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入北がわ 正本屋九兵衛新板
元禄一四年（一七〇一年）	八月	『けいせい色三味線』	浮世草子	〔江島其磧〕	〔吉田半兵衛〕画	ふ屋町通せいくはんじ下ル町 八文字屋八左衛門開板
元禄一五年（一七〇二年）	一月	『女大名丹前能』	浮世草子	西沢一風	〔吉田半兵衛〕画	京押小路通ふや町 金屋市兵衛板
元禄一五年（一七〇二年）	一月	『元禄曾我物語』	浮世草子	都の錦	〔吉田半兵衛〕画	京洛五条通 河勝五郎右衛門・江戸日本橋南老町目 舩屋五郎右衛門
元禄一五年（一七〇二年）	一月	『御前伽婢子』	浮世草子	都の錦	〔吉田半兵衛〕画	京洛五条通 河勝五郎右衛門・江戸日本橋南老町目 舩屋五郎右衛門
元禄一五年（一七〇二年）	一月	『鳥之迹』	歌集	戸田茂睡	〔吉田半兵衛〕画	武江城北 書林 燕雀堂平野や吉兵衛板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄一五年（一七〇二年）	三月	『元禄大平記』	子 浮世草	都の錦	〔吉田半兵衛〕画	京五条橋通書林舛屋 青山為兵衛
元禄一五年（一七〇二年）	五月	『風流好色十二段』	子 浮世草	不明	〔吉田半兵衛〕画	大坂平野町 本屋三郎兵衛・京錦小路 山本六兵衛板
元禄一六年（一七〇三年）	一月	『好色敗毒散』	子 浮世草	夜食時分	〔吉田半兵衛〕画	書肆 浪花 浅野弥兵衛・花洛 中林次郎兵衛・同 金屋平右衛門
元禄一六年（一七〇三年）	一月	『遊色控柱』	子 浮世草	洛陽之書坊 此君堂撮	〔吉田半兵衛〕画	書林 京都 近江屋治助・大阪 河内屋茂兵衛・名古屋 菱屋金兵衛・津 長野屋勘吉
元禄一六年（一七〇三年）	二月	『傾城辻談義』	子 浮世草	目黒露白	〔吉田半兵衛〕画	京 上村四郎兵衛板行
元禄一六年（一七〇三年）	三月	『新平家物語』	子 浮世草	一声子	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸日本橋南中通 山口屋権兵衛・同 長谷川町 平野屋伝左衛門・大坂 高谷平右衛門
元禄一六年（一七〇三年）	三月	『風流今平家』	子 浮世草	〔西沢一風〕〔跋〕難波の（ぜ与志）	〔吉田半兵衛〕画	京寺町通松原上ル町 菊屋七郎兵衛新板
元禄一六年（一七〇三年）	七月	『心中恋の塊』	艶本	不明	〔吉田半兵衛〕画	大坂本町一丁目 万屋彦太郎板
元禄十六年（一七〇三年）	不明	『曾根崎心中』	浄瑠璃	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	正本屋 山本九兵衛新板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
元禄一七年（一七〇四年）	不明	『文安詩歌合』	歌合	西園寺公名等	〔吉田半兵衛〕画	武陽城北牛込 燕雀堂藏板
宝永二年（一七〇五年）	一月	『一休可笑記』	臨濟	不明	〔吉田半兵衛〕画	書林 大坂本町壱丁目 松寿堂彦太郎
宝永二年（一七〇五年）	三月	『御伽人形』	浮世草子	苗村松軒（丈伯）	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋南壱丁目 桝屋五郎右衛門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛
宝永二年（一七〇五年）	五月	『棠大門屋敷』	浮世草	錦文流	〔吉田半兵衛〕画（やや存疑）	浪荅本町壱丁目 書林 松寿堂・万屋彦太郎 開板
宝永三年（一七〇六年）	一月	『御伽百物語』	浮世草	青木鷺水	〔吉田半兵衛〕画	江戸 和泉掾・京 寺町通松原上ル町 菱屋治兵衛 開版
宝永二年（一七〇五年）	五月	『御前独狂言』	浮世草	花洛 西鷺好（印）	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸日本橋川瀬石町 須藤権兵衛・京烏丸通六角下ル町 西村市良右衛門 彫刻
宝永二年（一七〇五年）	八月	『傾城武道桜』	浮世草	〔西沢一風〕	〔吉田半兵衛〕画	寺町通松原上ル町東側 菊屋七郎兵衛開板
宝永三年（一七〇六年）	一月	『当世乙女織』	浮世草	錦文流	〔吉田半兵衛〕画	書林 大坂本町壱丁目 松寿堂万屋彦太郎板行
宝永三年（一七〇六年）	三月	『世の是沙汰』	浮世草	西楽	〔吉田半兵衛〕画	京極通書林 神原利兵衛・万木治兵衛板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
宝永三年（一七〇六年）	九月	『兼好諸国物語』	浮世草子	隠者覺舟子閑寿	〔吉田半兵衛〕画（やや存疑）	江戸日本橋南一丁目 枅屋五郎右衛門・大坂心齋橋順慶町 吉文字屋市兵衛・帝都書林 上村四郎兵衛
宝永四年（一七〇七年）	一月	『傾城播磨石』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	江戸日本はし老町メ 小河彦九郎・京寺町さわら木町 柏屋勘右衛門 板行
宝永四年（一七〇七年）	一月	『色道懺悔男』	浮世草子	善教寺猿算	〔吉田半兵衛〕画	五条通高倉西へ入町 福森兵左衛門・成出權兵衛 板行
宝永四年（一七〇七年）	一月	『伊達髪五人男』	浮世草子	西沢一風	〔吉田半兵衛〕画	京寺町通松原上ル東側 菊屋七郎兵衛 開板
宝永四年（一七〇七年）	一月	『昼夜用心記』	浮世草子	北条団水	〔吉田半兵衛〕画	京井筒屋庄兵衛・同万木次兵衛・江戸日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛
宝永四年（一七〇七年）	三月	『源平盛衰記』	軍記物語	不明	〔吉田半兵衛〕画	押小路御幸町西へ入ル町 伊藤七郎兵衛・二条高倉東へ入ル町 辻三郎兵衛
宝永六年（一七〇九年）	一月	『御前二代曾我』	浮世草子	西沢一風	〔吉田半兵衛〕画	刊記に記載なし
宝永七年（一七一〇年）	九月	『平家物語』	軍記物語	不明	〔吉田半兵衛〕画	河内屋吉兵衛板
正徳二年（一七一二年）	九月	『傾城盃軍談』	浮世草子	不明	吉田半兵衛画（刊記「画師 巻飾堂 吉田氏（印） 孝賢（印）」）	書林 人見利兵衛

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
〔寛文年間〕	八月	『頼光跡目論』	浄瑠璃	岡清兵衛	〔吉田半兵衛〕画	削除されている
〔寛文年間〕	不明	『松風村雨』	浄瑠璃	不明	〔吉田半兵衛〕画	削除されている
〔延宝八年（一六八〇年）〕	不明	『うるほひ草』	艶本	不明	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋六
〔延宝末年〕	不明	『花山院后諍』	浄瑠璃	宇治加賀掾	〔吉田半兵衛〕画	山本九兵衛新板
〔延宝年間〕	不明	『吉田兼好物語』	浄瑠璃	宇治加賀掾	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入町北側 山本九兵衛板
〔天和元年（一六八一年）〕	不明	『七人ひくに』	浄瑠璃	宇治加賀掾	〔吉田半兵衛〕画	山本九兵衛板
〔天和年間〕	不明	『和気清麿』	浄瑠璃	宇治加賀掾	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入北側 山本九兵衛開板
〔貞享元年（一六八四年）〕	不明	『百夜小町』	狂言本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
〔貞享元年（一六八四年）〕	不明	『夕霧七年忌』	狂言本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	八文字屋八左衛門板

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
〔貞享三・四年〕	不明	『諸国此頃好色覚帳』	浮世草子	山本人左衛門	〔吉田半兵衛〕画	和泉屋八左衛門 板行
〔貞享四年（一六八七年）〕	不明	『早松茸』	艶本	不明	〔吉田半兵衛〕画	不明
〔貞享四年（一六八七年）以前〕	不明	『好色旅枕』	浮世草子	坂内直頼（序「好色軒在元の業平自序す」、なり平八ケのみだれ「好色軒 在原業平」）	〔吉田半兵衛〕画	「役者十六つがひの絵合」第二図「板本 山の八」
〔貞享五年（一六八八年）〕	不明	『浮世鏡』	語学	不明	〔吉田半兵衛〕画	伝本は第三巻のみ
〔貞享年間〕	不明	『念仏往生記』	浄瑠璃	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入町 山本九兵衛刊
〔元禄二年（一六八九年）〕	〔三月〕	『天智天皇』	浄瑠璃	〔近松門左衛門〕	〔吉田半兵衛〕画	二条通寺町西へ入町北かわ 山本九兵衛板
〔元禄三年（一六九〇年）〕	〔二月〕	『好色後家はなし』	浮世草子	不明	〔吉田半兵衛〕画	菊屋七郎兵衛
〔元禄六年（一六九三年）〕	不明	『男色子鑑』	浮世草子	〔九思軒鱗長〕	〔吉田半兵衛〕画	京出水通大宮西へ入ル町 和泉屋三郎兵衛・江戸日本橋方町 松葉屋清兵衛
〔元禄九年（一六九六年）以前〕	不明	『好色産毛』	浮世草子	林鴻	〔吉田半兵衛〕画	下立売通大宮西江入ル町 和泉屋弘之刊

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	絵師	書肆
〔元禄一一年 (二六九八年)〕	〔一二 月〕	『女中野郎むすび』	艶本	不明	〔吉田半兵衛〕画	京下立売大宮西江入ル 和泉屋長左衛門・江戸日本橋万町 万屋三郎兵衛
〔元禄一一年 (二六九八年)〕	不明	『上京の謡始』	脚本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	〔八文字屋八左衛門〕〔水木辰之助評判に「ふ屋町と所書なきは此方の板にてなく候」とある〕
〔元禄一一年 (二六九八年)〕	不明	『けいせい江戸桜』	狂言本	近松門左衛門	〔吉田半兵衛〕画	ふ屋町通せいくはんじ下ル町 八文字屋八左衛門新板
〔元禄一三年 (一七〇〇年)〕	不明	『好色極秘伝』	子 浮世草	〔西沢一風〕	〔吉田半兵衛〕画	不明
〔宝永二年 (一七〇五年)〕	三月	『けいせい風流杉 盃』	子 浮世草	〔増田円水〕	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし
〔享保年間〕	不明	『砂糖饅頭』	艶本	不明	〔吉田半兵衛〕画	不明 ※本書の全体は未見。書誌情報は、白倉敬彦『絵入春画艶本目録』(平凡社二〇〇七年)による。

(196) 水谷不倒『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年 一一九頁)「吉田半兵衛」項には、「吉田半兵衛は、元禄五六年で終つたものと見ねばならぬ。」とされているが、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号(慶應義塾大学藝文学会二〇一八年一月)で、吉田半兵衛は、享保四年(一七一九年)までは生存していたと考えることができることを指摘している。

(197) 吉田半兵衛の作品についての記述がある主な書籍やデータベースは、柳亭種彦『好色本目録』、『新群書類従』第七巻 国書刊行会 一九〇六年、『此花』第三枝・凋落号(雅俗文庫 一九一〇年三月・一九一二年七月)、宮武外骨『玉のさかづき』(雅俗文庫 一九一二年)、漆山又四郎 芸苑叢書 第一期『浮世絵年表』(風俗絵巻図画刊行会 一九二〇年)、水谷不倒『浮世草子 西鶴本』(水谷文庫 一九二〇年)、稀書複製会『版画礼讃』(春陽堂 一九二五年)、『変態文献叢書』追加第二巻(文芸資料研究会 一九二八年)、国民図書株式会社『近代日本文学大系』第二五巻(国民図書 一九二九年)、守随憲治・秋葉芳美『歌舞伎図説』解説(万葉閣 一九三一年)、井上和雄『浮世絵師伝』(渡辺版画店 一九三一年)、尾崎久弥『甘露堂文庫稀覯本攷覧』(名古屋書史会 一九三三年)、米山堂『近世文芸名著標本集』(米山堂 一九三三〜一九三五年)、漆山又四郎『新撰浮世絵年表』(奎光書院 一九三四年)、水谷不倒『古版小説挿画史』、『評釈江戸文学叢書』第一巻(大日本雄弁会講談社 一九三五年)、大村西崖『近世風俗画史』(宝雲舎 一九四三年)、瀬原退蔵・暉峻康隆・野間光辰『定本西鶴全集』(中央公論社 一九五一年〜一九五三年)、朝倉治彦『未刊仮名草子集と研究』第一巻(未刊国文資料刊行会 一九六〇年)、『西鶴』(天理図書館 一九六五年)、横山重『古浄瑠璃正本集』第六冊(角川書店 一九六七年)、吉田幸一『近世文芸資料 第一〇』『好色物草子集』(古典文庫 一九六八年)、天理図書館善本叢書和書之部編集委員会『天理図書館善本叢書』和書之部 第二五巻 浮世草子集一(天理

大学出版部 一九七四年)、近世文学書誌研究会『近世文学資料類従』西鶴編 12(好色盛衰記)(勉誠社 一九七五年)、山崎麓 書誌書目シリーズ⑥『改訂日本小説書目年表』(ゆまに書房 一九七七年)、リチャード・レイン『元禄のエロス』第五巻(画文堂 一九七九年)、東京大学総合図書館『東京大学総合図書館蔵書目録』(雄松堂書店 一九八二年)、伊井春樹『研究報告 大英図書館蔵国書関係解題』『調査研究報告』第四号(人間文化研究機構 国文学研究資料館学術資料事業部 一九八三年三月)、漆山又四郎『日本書誌学大系 34』、『絵本年表』第一巻(青裳堂書店 一九八三年)、野間光辰『日本書誌学大系 3』『初期浮世草子年表・近世遊女評判記年表』(青裳堂書店 一九八四年)、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第六巻(岩波書店 一九八五年)、中村幸彦・日野竜夫『新編稀書複製会叢書』第二五巻・第二六巻・第二八巻(遊女評判記・花街本)(臨川書店 一九九〇年)、吉田幸一『古典文庫第六〇四冊』『好色文伝授・好色錦木』(古典文庫 一九九七年)、朝倉治彦『訓蒙図彙集成』第九巻(大空社 一九九八年)、湯澤賢之助『新典社研究叢書 130』『西村本の浮世草子』(新典社 二〇〇〇年)、加藤次直『翻刻 大阪市立中央図書館所蔵 元禄六年刊「百人一首絵抄」』『総合教育センター紀要』第二六号(東海大学総合教育センター 二〇〇六年三月)、白倉敬彦『絵入春画艶本目録』(平凡社 二〇〇七年)、『浮世草子大事典』編集委員会『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』(笠間書院 二〇一七年)、艶本資料データベース、渋井清コレクション「仮」、新日本古典籍総合データベース、西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース、早稲田大学 古典籍総合データベースなどであり、これらを調査対象とした。

(198) 吉田半兵衛の半生について記されている、宝永六年(一七〇九年)刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に「半兵衛は三年めに。寺町通へ出て。」とある。

(199) 特に、延宝二年（一六七四年）刊『日本王代記』（吉田半兵衛画）は、坂口弘之『古浄瑠璃・説経研究 近世初期芸能事情』下巻（和泉書院二〇二〇年）によると、江戸時代前期の京都の浄瑠璃語りである竹本義太夫のデビュー作であるとされる。

(200) 元禄十五年（一七〇二年）刊の、当時の文化について批評した浮世草子である『元禄大平記』第一巻第二話「京と大坂に本替の沙汰」に、「当世はたゞかたひ書物をとり置て。あきなひの勝手には。好色本か重宝記の類が増じやといへば」とあり、当時、好色本や重宝記がよく売れていたことがわかる。

(201) 吉田孝賢が吉田半兵衛の実名であるということについては、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号で考察している。

(202) 享保一四年（一七二九年）刊『書籍目録』第四卷「仮名物草紙類」に「五 新竹斎 西村氏」とある。

(203) 元禄九年（一六九六年）刊『書籍目録大全』第二卷「を 仮名」に「五 厂金や 桜陰比事 西鶴 三匁五分」とある。

(204) 元禄九年（一六九六年）刊『書籍目録大全』第六卷「好色本」に「五 山本八左 同（好色）うぶげ 二匁五分」とあるので、これ以前に刊行されたと考えられる。

(205) 貞享四年（一六八七年）刊『野郎立役舞台大鏡』の全一一図中九図が、『好色旅枕』「役者十六つがひの絵合」からの流用である。

第十章 おわりに

本論文では、江戸時代前期の作家と絵師の關係に着目し、絵画資料を参考としながら、作品の制作背景を明らかにすることを試みた。最後に、本論文の結論をまとめると、以下の通りである。

第一章の「はじめに」では、国文学においては、作品の本文や書誌などの研究が中心であったが、絵画資料を参考として、作品の制作背景をより具体的に明らかにしたいという本論文の目的について述べ、江戸時代の浮世絵師についての先行研究を概観している。

第二章の「吉田半兵衛の画業について」では、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛の経歴および署名がある作品を整理している。吉田半兵衛については、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）以来、ほとんど研究が進んでいなかったが、宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』にその半生が記されており、これらの当時の文献から、吉田半兵衛は京都の四条通にある八坂神社御旅所付近に住んでいたと考えられることを指摘した。また、筆者が新たに紹介した、正徳二年（一七二二年）刊の、『太平記』に仮託して、登場人物が酒の飲み比べを行うという内容の浮世草子である『傾城盃軍談』を含め、現在、作品中に吉田半兵衛の署名などがあり、吉田半兵衛画である可能性が高いと考えられる作品は、全部で八作品あることを指摘した。そして、『傾城盃軍談』には、刊記に「画師 卷飾堂」という署名と、「吉田氏」「孝賢」という印記があることから、

吉田半兵衛の本名は吉田孝賢であり、卷飾堂という絵所を営んでいたことが明らかになった。なお、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で、吉田半兵衛は、元禄五・六年（一六九二・一六九三年）に隱遁もしくは逝去したと考察⁶⁰⁾しているが、江戸時代中期の京都の僧である玄瑠の漢文集である「雲堆雜著」（国立国会図書館蔵）「白慧法師墓誌」に、「洛陽の書賈仲邨富平・画工吉田孝賢」が「多年法師（筆者注…江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼のこと）の顧盼を獲」たので、玄瑠に墓誌の撰文を依頼したことが記されており、これには享保四年（一七一九年）の奥書があるので、この年までは生存していたと考えられる。江戸時代前期の版本の挿絵は、江戸版は菱川師宣画、京都版は吉田半兵衛画であることが多い⁶¹⁾。菱川師宣は丸みのある描線、吉田半兵衛はやや形式的な描線であることが特徴だが、これは、各地域で好まれる画風が異なったからであると考えられ、江戸時代の版本の特色といえよう。版本の挿絵を見ることで、ある程度、その作品が刊行された時代・地域が特定できるので、今後の研究に役立つということを指摘したい。

第三章の「蒔絵師源三郎の画業について」では、江戸時代前期の蒔絵師であり、版本の挿絵を描いた絵師でもある蒔絵師源三郎の経歴および作品を整理している。蒔絵師源三郎は、元禄三年（一六九〇年）刊の、当時の職業について図解した事典である『人倫訓蒙図彙』の第三巻末尾に署名があることからその名が知られており、『人倫訓蒙図彙』の第一巻・第二巻は吉田半兵衛に似た画風であることから、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』では、吉田半兵衛の弟子であると考えられていた。しかし、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』における、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるという考察

は誤りであり、『人倫訓蒙図彙』を刊行したのは京都の書肆であることとから⁸⁸⁾、京都の絵師であつた可能性があることを指摘した。また、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』以来、吉田半兵衛が元禄五・六年（一六九二・一六九三年）に逝去したとされていたことにより、それ以降に刊行された吉田半兵衛画の作品の多くが蒔絵師源三郎画であるとされてしまっていたが、現在、蒔絵師源三郎画であると考えられる作品は『人倫訓蒙図彙』の一作品のみであることを指摘した。筆者が比定した蒔絵師源三郎の画風は、吉田半兵衛の画風とは異なる稚拙なもので、おそらく、蒔絵師源三郎は、吉田半兵衛の弟子などではなく、本来は版本の挿絵を描く仕事をしていたわけではなかったが、当時の職業について紹介するという『人倫訓蒙図彙』の趣旨や、本文中に「蒔絵師」の項がある⁸⁹⁾ことから、本書の挿絵を描くことを依頼されたのだろう。この研究により、吉田半兵衛の作品をより正しく整理できるようになった。

第四章は、「井原西鶴の画業について」である。先行研究において、蒔絵師源三郎画とされていた作品の中には、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』で江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴画とされている作品と、同じ画風の挿絵が描かれているものがある。この、先行研究において井原西鶴画とされている作品については、小池藤五郎氏の『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年）や、信多純一氏の『好色一代男の研究』（岩波書店 二〇一〇年）などのように、それらが本当に井原西鶴画であるかを疑問視する声もある。そこで、それらの作品が、本当に井原西鶴画であるか再検討した。現在、井原西鶴画とされている絵と同じ画風の作品は、版本は一五作品、画賛は五作品、絵巻は一作品であり、それらの作品について

調べたところ、井原西鶴画とされている版本には、井原西鶴以外の作・編者が著したものもあることや、井原西鶴作・画とされている、大坂版『好色一代男』の本文と挿絵の内容には異なる点が複数個所存在することや、井原西鶴画とされている画賛はそれぞれに画風が異なっており、全てが同一人物による絵ではないと考えられることや、先行研究において専門絵師画とされている「西鶴独吟百韻自註絵巻」（天理図書館蔵）の絵には、井原西鶴画とされている版本の挿絵との類似点が複数個所存在することや、井原西鶴画とされている作品の絵の合計は八五七図に及ぶことや、宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛濶平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に、大坂版『好色一代男』の挿絵を描いた絵師についての記述があり、その中に、江戸時代前期の大坂の絵師である北峯正甫の名前が挙がっていることなどから、今後とも、本当に井原西鶴画であるかということが再検討されてもよいのではないかということを指摘している。ただし、いずれの作品にも絵師の署名はないことから、現時点では、これらの作品が井原西鶴画ではないと断定することはできない。

第五章の「居初つなの著作と画業について」では、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である居初つなの経歴と版本の作品を整理した上で、吉田半兵衛と居初つなが師弟であった可能性について検討している。吉田半兵衛と居初つなの絵を比較し、居初つなの版本の挿絵と類似した構図がある吉田半兵衛画の作品の多くは、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯作であるという特徴があることに気付いた。そこで、苗村丈伯の作品について調べてみると、構図が全く同一である、元禄十一年（一六九八年）刊の、『徒然草』

の注釈書である『つれつれ草』（苗村松軒（丈伯）作・〔吉田半兵衛〕画）上巻第一図と、享保十一年（一七二六年）刊の、女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女筆琵琶海辺』（居初つな作・画）五〇丁ウの頭書部分の挿絵を始めとして、吉田半兵衛と居初つなの版本の挿絵には多くの類似点があることから、居初つなは、吉田半兵衛の絵を直接参照していた可能性が高いということを指摘した。また、それだけでなく、苗村丈伯と居初つなの作品は、本文にも類似点が複数個所存在するので、居初つなは、版本を著す際に、本文は苗村丈伯から、挿絵は吉田半兵衛から影響を受けていた可能性があることを指摘した。他にも、元禄三年（一六九〇年）刊の、『書翰初学抄』を模倣し、一二ヶ月における女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女書翰初学抄』（居初つな作）の改題本である、元禄十一年（一六九八年）刊の『女用文章綱目』と、元禄十二年（一六九九年）刊の『増益女教文章』は、作品の内容から、苗村丈伯作であると考えられることも指摘した。さらに、居初つなは、貞享十元禄年間頃に、着物を着た女性たちと衣紋掛けに掛けられた着物を描いた「雛形絵巻」（奈良県立美術館蔵）を制作しているが、正徳五年（一七一五年）刊の、着物の意匠などが描かれた図案書である『雛形都商人』の作者であり小袖絵師である吉田光義は、作品の内容から、吉田半兵衛の跡継ぎであると考えられるので、居初つなは、実際に吉田半兵衛の周辺で絵を学んでいた可能性もあることを指摘した。これにより、吉田半兵衛の跡継ぎが小袖絵師として活動しており、少なくとも吉田家が二代続いたことが明らかにしたが、その後は京都における吉田姓の絵師は文献上では確認できず、吉田半兵衛の影響を受けたと考えられる、江戸時代中期の京

都の絵師である西川祐信などが人気を得た。

第六章の「坂内直頼の著作について」では、江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼（法名は白慧）の経歴と作品について整理している。坂内直頼は、作品中に吉田半兵衛画であるという署名がある、貞享三年（一六八六年）刊の、当時の好色風俗を図解した浮世草子である『好色訓蒙図彙』の作者であり、前述の「雲堆雜著」において、吉田半兵衛が、坂内直頼に鼻肩にされていたことから、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したことが記されているように、吉田半兵衛と親交が深かった人物である。本章では、坂内直頼作であると考えられるものを新たに三作品指摘している。一つ目は、貞享四年（一六八七年）刊の、京都島原の遊女評判記である『朱雀信夫摺』であり、坂内直頼の他の作品との構成・署名・筆跡・挿絵の類似や、本文中に、坂内直頼作である『朱雀遠目鏡』についての記述があることなどから、坂内直頼が制作に関わった可能性が高いと考えられることを指摘した。二つ目は、貞享五年（一六八八年）刊の、『清明通変占』を模倣し、安倍晴明作の算盤占を好色的な内容にした浮世草子である『好色通変占』であり、この作品には作者の署名はないものの、坂内直頼の他の作品との構成・署名・内容・筆跡・挿絵の類似から、坂内直頼作であると考えられることを指摘した。三つ目は、延宝九年（一六八一年）刊の、古今の情け深い女性を紹介した仮名草子である『名女情比』であり、この作品には、先行研究において、坂内直頼作とする説と、江戸時代前期の京都の書肆・作家である山本八左衛門作とする説の二通りが存在するが、『名女情比』と構成・内容が類似する『源氏御色遊』は、山本八左衛門が、坂内直頼作である『名女情比』の内容を好色的に改変したものであ

ると考えられるので、坂内直頼作であると考えの方が妥当であることを指摘した。坂内直頼は好色本を含む様々な分野の作品を著していることから、自由な人柄であったことが伺える。吉田半兵衛も、家族を養うためにあらゆる仕事をし、好色的な浮世絵で人気を得ている。吉田半兵衛の作品を概観すると、好色本においては、特に、坂内直頼作であると考えられる、貞享三年（一六八六年）刊の『好色訓蒙図彙』と、貞享四年（一六八七年）以前刊の『好色旅枕』が代表作であったと考えられるので、坂内直頼との出会いは、吉田半兵衛にとって重要なものだったのだろう。

第七章の「苗村丈伯の著作について」では、第五章で、居初つなと関係があることを指摘した、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯の経歴と作品を整理している。苗村丈伯（号は三徑）は、先行研究において、名字や号が類似した複数の別人と混同されているという問題点がある。そこで、苗村丈伯が、径山子・苗村介洞・苗村松軒と同一人物であるかを再検討したところ、径山子・苗村介洞とは別人であり、苗村松軒とは同一人物であると考えられることを指摘した。これにより、苗村丈伯の経歴と作品が正しく整理され、苗村丈伯の新しい著作が明らかになった。すなわち、苗村丈伯は、江戸時代前期の京都の作家であり、号は三徑・松軒など。元禄五年（一六九二年）刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、二四作品以上を著した。苗村丈伯は、作品の内容や、後世の文献から、近江国の医師であったと考えられるが、何らかの事情により致仕し、その後京都に上って、その教養によって数多くの作品を著して民衆の啓蒙に貢献した。特に、注釈書を多く著しており、いずれも、本文を上下二段に分け、注釈と吉田半兵衛風の挿

絵を載せることで知識のない人でも内容が理解しやすいように工夫されているという特徴がある。このように、苗村丈伯の作品は、本文の体裁や挿絵の画風が意図的に統一されていると考えられることから、真面目な人柄であったことが伺える。女子教育に関心があつた居初つなが、苗村丈伯の影響を受けていたと考えても、不自然ではない。

第八章の「中村孫兵衛の出版物について」では、前述の「雲堆雜著」において、吉田半兵衛とともに、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したことが記されており、吉田半兵衛と親交があつた人物であると考えられる、江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛の経歴および出版物を整理している。これにより、中村孫兵衛は、江戸時代前期の京都の書肆であり、名は富平、号は孫兵衛・昌陽軒。屋号は永原屋。書肆は高辻通雁金町（現在の京都府京都市下京区雁金町）にあつた。父の跡を継いで書肆を営み、宝永七年（一七一〇年）刊の、自身が編集した、書名が似ている作品を弁別するための書目である『辨疑書目録』などの、六五作品以上を出版した人物であることが明らかになった。また、享保五年（一七二〇年）刊の、手紙ごとに、不適切な例文と適切な例文の二通りを示し、女性らしい言葉遣いを指南した往来物である『女中文章鑑』（「居初つな」作）の書肆である「中村孫三郎」という人物や、享保十一年（一七二六年）刊の、歌語の意味を説明した語彙書である『やまと詞大成』の作者である「中村氏富丸」という人物は、中村孫兵衛の跡継ぎである可能性も指摘している。さらに、坂内直頼の作品を概観すると、中村孫兵衛板であることが最も多く、吉田半兵衛画であることが最も多い一方で、吉田半兵衛と中村孫兵衛にはあまり接点が多くないので、

吉田半兵衛と中村孫兵衛は、貞享三年（一六八六年）刊の『好色訓蒙図彙』（坂内直頼作・吉田半兵衛画・中村孫兵衛板）が出版されたことをきっかけに関係を持ったと考えられることを指摘した。ちなみに、中村孫兵衛は『辨疑書目録』を編集しているように学者肌の人物であったが、坂内直頼も博識な人物だったので、この二人は性格的な面でも気が合ったのかもしれない。これにより、当時の出版界では、作家・絵師・書肆が、公私ともに友好関係を持ちながら仕事をやっていくことも明らかになった。

第九章の「吉田半兵衛作品年表」では、現在、吉田半兵衛画であると考えられる二三二作品を刊行年順に整理し、その業績を紹介している。吉田半兵衛に関係する人物を各章で詳細に調べたことで、各所で吉田半兵衛画であると指摘されていた作品だけでなく、これまで吉田半兵衛画であると指摘されていなかった作品なども集約し、吉田半兵衛の基本的な作品年表を作成することができた。このことから、版本の挿絵を描いた浮世絵師について研究する際には、その周辺人物について網羅的に調べるのが有用であることを指摘したい。

そして、第十章の「おわりに」では、各章の結論および本論文の結論をまとめている。

本論文によって、吉田半兵衛のおおよその経歴と作品が明らかになった。また、奈良絵本・絵巻を制作していた居初つなは、後の浮世絵の祖となった吉田半兵衛の絵を参照していたことが明らかになったことで、吉田半兵衛と居初つなは、室町時代後期から江戸時代前期にかけて制作された奈良絵本・絵巻と、江戸時代中期から後期にかけて制作された浮世絵の橋渡しとなった人物として、新たに位

置付けることができるのではないだろうか。居初つなは、『女書翰初学抄』の序に、「天降る日那に生なる葛の葉のうらむる事は宿世のえにしぞかし其道々のことわざを露しらまほしきには且恋しきは都なめり僕壮年の比陳ある身となれりよりて日比の本意こゝなりと八重の汐路をしのぎて今此九重にいたりぬ住事二十とせに及べりつゐに思ふ道／＼をたどりて其かたはしをうかゞひ我身には足れりと是をたのしみ隙行駒のあしなみを草のとざしにかぞへ和国の風雅を味ふならし」とあるように、諸芸を学ぶことを夢見て京都に上っており、

書は書家である母の窪田やすに、文は苗村丈伯に、絵は吉田半兵衛に学んだと考えられる。そして、書家としても作家としても、そして画家としても才能溢れる彼女は、諸芸を身につけた後、『女実語教』に「人の子の中に。男子は師をとりて学文をつとめさせ。家をとゝのへ。身を治る道をならはしむるもあれど。女子に至りてはをしゆる人もまれなり。」とあるように、女子教育の重要性を感じ、『女筆琵琶海辺』の口絵に描かれている姿のように、京都の上流階級の女子を教育する教育者として活動していた可能性がある。長崎巖氏の「奈良県立美術館所蔵『雛形絵巻』について——描かれた風俗の観点から——」『MUSEUM』第五五〇号（東京国立博物館 一九九七年一〇月）などでは、「雛形絵巻」は、卷子本形式でありながら、肉筆風俗画の特徴も示し、江戸時代前期から中期にかけての一般の肉筆浮世絵とは一線を画するものであり、絵画史上位置づけが比較的難しい作品であることが指摘されているが、これによって、江戸幕府の奢侈禁止令により、大名家向けの豪華な奈良絵本・絵巻が制作されることが少なくなった一方で、木版印刷技術の普及により、庶民向けの安価で大量生産が可能な浮世絵へと需要が移行していった社会的背景

を、二人の人物を通して新たな視点から理解できるようになったのではないだろうか。

本論文における研究は、著者が慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻後期博士課程在学中に、同大学文学部教授であり、本論文の主査である石川透先生の指導のもとに行ったものである。著者は、修士課程までは日本における男色の研究を行っていたが、井原西鶴の『男色大鑑』の挿絵を描いたとされている吉田半兵衛が、先行研究において、石川先生のご専門である居初つなの師と考えられていたことから、博士課程では、吉田半兵衛の研究をすることを勧めていただいた。吉田半兵衛と居初つなが師弟であったかという問題については単純な絵の比較だけでは結論が出ないことや、著者が近世文学の研究に必要な知識に乏しかったことなどから、博士論文を提出するまでに、長い年月を要してしまった。石川先生からは、居初つなについて有益なご助言をいただき、未熟な著者を温かく見守りながら導いていただいた。その他の先生方からも、論文の書き方について、基礎的なことから懇切丁寧にご指導いただいた。私が修士課程まで研究していた日本の男色に関する作品にも引用されている諺に、「親子は一世の契り、夫婦は二世の契り、師弟は三世の契り」⁽³⁰⁶⁾というものがある。著者にとつて、慶應義塾大学文学部国文学専攻における、深い学識と個性豊かな人間性を持った素晴らしい先生方との出会いは、生涯における宝物であり、この諺の通り、来世においても先生方の教えを乞いたいと願う次第である。

注

⁽³⁰⁶⁾ 水谷不倒『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年 一一九

頁）「吉田半兵衛」項には、「吉田半兵衛は、元禄五六年で終つたものと見ねばならぬ。」とある。

⁽³⁰⁷⁾ 例えば、延宝七年（一六七九年）刊『伊勢物語頭書抄絵入読曲』（刊記に「松会開板」とある）は菱川師宣画であり、その改題本である、貞享二年（一六八五年）刊『伊勢物語絵入読曲』（刊記に「押小路通橋町 大文字屋七郎兵衛・江戸芝神明前 井筒や忠左衛門 開板」とある）は吉田半兵衛画である。

⁽³⁰⁸⁾ 元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』の刊記に「書林 平樂寺 開板」とあり、平樂寺は京都の書肆である。

⁽³⁰⁹⁾ 元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』第五卷に「蒔絵師」項がある。

⁽³¹⁰⁾ 松本隆信『室町時代物語大成』補遺二（角川書店 一九八八年 二二六頁）「稚児観音縁起」に、「師匠は三世の契と申せは、後世には又、あひたてまつらむ」とある。